熊本県文化財調査報告　第32集

益城郡衙

—推定地の発掘調査報告—

1978

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　　第32集

益城郡衙

—推定地の発掘調査報告—

1978

熊本県教育委員会

調査地空中写真（北が益城，南が西天神原）

序　　文

近年、農業構造改善事業等によって、ふるさとの田圃の姿は大きく変容しつつあります。

これらの事業は、農業の近代化にとって必須の要件とはいえ、それによって改変を受ける文化財の数も少なくありません。

このような情勢のなかで、熊本県教育委員会では、昭和52年度の国庫補助事業、文化財緊急調査の一環として益城郡衙推定地の調査を実施しました。

この調査は、文化庁の御指導をはじめ、嘉島町、城南町教育委員会および地元の方々の暖かい御協力により遂行することができました。ここに心から感謝の意を表します。

本書が、文化財の保護と活用という点で御利用頂くことを期待して序といたします。

昭和53年３月

熊本県教育委員会

教育長　林　田　正　恒

目　　次

Ⅰ．調査にいたる経緯

A　調　査　ま　で……1

B　調　査　組　織……1

Ⅱ．嘉島町の調査

A　調査地の位置と環境……3

B　調　査　の　目　的……3

C　調　査　の　経　過……6

D　調査地の状態と発掘区の設定……6

E　調査地の層序と出土遺物……7

Ⅲ．城南町の調査

A　調査地の位置と環境……10

B　調　査　の　目　的……10

C　調　査　の　経　過……12

D　調査区の設定……13

E　調査地の層序……15

F　検　出　遺　構……19

G　出　土　遺　物……45

H　遺構の年代と性格……80

Ⅳ．ま　と　め

A　嘉島町の調査結果……86

B　城南町の調査結果……88

図　　版

巻首		調査地空中写真（1974年撮影）
PL 1	1	益城調査風景
	2	益城調査地
	3	出土遺物
2	1	西天神原遠景
	2	西天神原遠景
3	1	20トレンチ
	2	11.7トレンチ
	3	1トレンチ
4	1	28トレンチ
	2	32トレンチ
	3	14トレンチ
5	1	18トレンチ
	2	1トレンチ
	3	13トレンチ
6	1	8トレンチ
	2	14トレンチ
	3	7トレンチ
7	1	10トレンチ
	2	43トレンチ
	3	41トレンチ
8	1	17トレンチ
	2	28トレンチ
	3	28トレンチ
9	1	2トレンチ
	2	礫石状石製品
10	1	礫石状石製品
	2	礫　石
11		礫石状石製品の整形・調整痕
12		縄文土器
13		弥生土器(1)
14		弥生土器(2)
15		弥生土器(3)
16		須恵器
17		須恵器・土師器
18		陶磁器
19		瓦・鉄製品
20		石　　器
21		石器・石製品
22		出土貝類

挿　　図

1　益城・西天神原の位置図（島津作成）……4
2　調査地の設定図（清田・江藤実測、中山製図）……5
3　益城周辺の字名（嘉島町役場原図）……6
4　調査地の地形図（島津作成）……7
5　嘉島町土壌区分図・土壌断面柱状図（熊本県農政部原図）……8
6　調査地の層序（島津・中山実測、島津製図）……9
7　西天神原の字名（城南町役場原図）……11
8　西天神原の地番（　　同　　）……12

9　掩体壕・誘導路築造模式図（豊崎作成）……13
10　調査地土層・土層対比図（田中・豊崎実測、田中製図）……15
11　竪穴・住居址平面図・断面図（清田実測、島津製図）……20
12　住居址平面図・断面図（清田・吉田実測、島津製図）……21
13　住居址遺物出土状態（清田・吉田実測、島津製図）……21
14　住居址様遺構（工藤・中山実測、島津製図）……22
15　溝1・2平面図（豊崎実測、中山製図）……23
16　溝1断面図（中山・工藤・豊崎実測、島津製図）……24
17　溝1平面図（豊崎実測、島津製図）……25
18　溝3・4平面図（豊崎実測、製図）……26
19　溝3平面図（田中・豊崎・清田実測、島津製図）……27
20　溝3断面図（　同　上　）……28
21　溝3断面図（　同　上　）……29
22　32トレンチ内の集石（田中実測、島津製図）……30
23　溝4断面図（豊崎・宮部実測、島津製図）……34
24　溝4平面図（　同　上　）……34
25　溝5平面図・断面図（吉田実測、島津製図）……35
26　溝状遺構平面図・断面図（清田・吉田実測、島津製図）……35
27　溝状遺構平面図・断面図（　同　上　）……36
28　集石1平面図（工藤・吉田実測、島津製図）……38
29　集石1平面図・断面図（工藤・吉田実測、島津製図）……39
30　集石2平面図・断面図（中山実測、島津製図）……39
31　溝1の西限とピット群（中山実測、島津製図）……40
32　ピット群（中山・工藤実測、島津製図）……42
33　礫石状石製品出土状態（豊崎実測、製図）……43
34　縄文土器実測図（1）（島津・工藤実測、島津製図）……45
35　縄文土器実測図（2）（　同　上　）……46
36　弥生土器実測図（1）（島津・工藤・清田・丸山実測、島津製図）……53
37　弥生土器実測図（2）（　同　上　）……54
38　須恵器拓影（1）（島津・山城作成）……61
39　須恵器拓影（2）（　同　上　）……62
40　須恵器・黒色土器・土師質土器・瓦実測図（島津・清田実測、島津製図）……62

41 陶磁器実測図（笠間・山下・平川実測、野田製図）……63
42 瓦銘文(山城作成）……70
43 瓦拓影（笠間・山下・平川実測、島津製図）……70
44 鉄製品実測図（島津実測、製図）……71
45 石器実測図（1）（西田・田中・豊崎実測、西田製図）……73
46 石器実測図（2）（　同　上　）……74
47 礎石状石製品実測図（1）（豊崎実測、製図）……76
48 礎石状石製品計測図(豊崎作成）……77
49 礎石・礎石状石製品実測図（2）(田中実測、豊崎製図）……78
50 32・41トレンチ溝内土層図（田中・清田実測、島津製図）……81
51 沈目立山遺跡水溜め実測図（緒方原図）……82
52 礎石分布図（松本原図、豊崎作成）……84

表

1 トレンチ一覧表（豊崎・島津作成）
2 西天神原の土層水準高（同　上）
3 住居址ピット計測表（清田・島津作成）
4 ピット計測表（中山作成）
5 縄文土器出土一覧表（清田・島津作成）
6 弥生土器出土一覧表（　同　上　）
7 須恵器出土一覧表（田中・島津作成）
8 土師器出土一覧表（田中・島津作成）
9 青磁出土一覧表（島津作成）
10 石器・石製品一覧表（豊崎作成）
11 溝1・2・4比較表（島津作成）
12 32・41トレンチ出土遺物（同　上）
13 溝3の計測値（田中作成）
14 32・41トレンチ出土遺物一覧表（島津作成）
15 益城郡郷比定一覧表（佐藤・島津作成）

例　言

1. この報告書は、昭和52年度に実施した、国庫補助事業「益城郡衙推定地」の発掘調査に関する報告である。
2. 現地の発掘調査は、熊本県教育委員会が実施し、文化課の島津義昭、西田道世、中山清美、豊崎晃一が担当した。また熊本大学学生・田中寿男、工藤澄子、熊本商科大学学生・清田純一、吉田好範、宮部雅夫、清田隆幸、江藤哲郎の諸氏の協力をうけた。
3. 遺構、遺物の実測は上記の調査担当者が行い、現地の写真は中山清美が担当し、また遺物の写真は白石巖が担当した。
4. 図版の作成には広瀬賜代氏の協力を得た。なお原図作成者、製図者については目次に記すとおりである。
5. 報告書の作成には、隈昭志の指導により、調査担当者等全員の討議をもとに執筆した。各々の担当は文末に記した。
6. 本書の編集には島津義昭があたった。

Ⅰ. 調査にいたる経緯

A 調査まで

昭和52年度の国庫補助事業として実施した今回の調査は、熊本県の予算措置が9月補正予算として計上せざるをえなかったので、調査の実施はそれ以降となり、かなり急を要する調査となった。調査は主として「益城郡衙推定地」の現地発掘を行い、それに関連して熊本県における官衙の研究史を集約した。ちょうど、熊本県教育委員会では、昭和50～51年度、国庫補助事業として県内に分布する条里制遺構の現状と復原を行い、それと共に郡家等に関する基礎的な資料を集約していたので、これも併せて活用した。

熊本県における官衙の研究について、まず坂本経堯、松本雅明、乙益重隆、田辺哲夫氏などの諸先学によって着手され、昭和22年から40年にかけてその主要な発掘調査が行われ熊本県における指標となっていたが、近年ではあまりこの種の調査は進展していなかった。官衙のうち、郡衙に関しては、田辺哲夫氏による「玉名郡衙」の調査で、郡家、郡倉、郡寺を有機的に把握した全国的にも数少ない調査があり、また松本雅明氏による、益城郡家、郡寺、郡社の比定研究があるが、他は主に文献記載や表面採集資料に拠る、郡衙の比定である。

今回発掘調査を実施した対象地は、古く圭室諦成氏によって言及され、郡家として比定することの可能な上益城郡嘉島町大字上六嘉字益城と、松本雅明氏によって「益城軍団」と比定されている下益城郡城南町大字坂野字西天神原の二地点である。この他に松本雅明氏によって「益城郡家」に比定された下益城郡城南町大字宮ノ原字宮ノ前についても調査予定地として考えていたが、同地はすでに昭和47年に、圃場整備事業による開田作業によって、削平され、大幅に旧地形が変わっていることと、圃場整備事業時に立会った地元城南町教育委員会の記録においても、遺構等は確認できなかったということから、今回の調査地から除外した。

全国的に農業近代化のため、公営、団体営等の農業基盤整備事業が大規模に行われており、平野部はもちろん丘陵部に立地する遺跡についても、いまや全面消滅の危機に直面しているといっても過言ではない。今回調査した嘉島町大字上六嘉字益城についても、近い将来このような事態を迎えることが予想されるので、今回の調査によって、当該地に関する一応の記録化を実施できたことは喜ばしい事である。

（隈　昭志・島津義昭）

B 調査組織

調査は熊本県教育委員会が行ったが、地元の嘉島町・城南町各教育委員会からは関係資料の

提供等、多大の協力を受けた。また調査地の住民の方々にも発掘地の旧状の教示をはじめ、作業員としての協力を受けた。調査組織は以下のとおりである。（隈・島津）

調査責任者	文化課長	合志太助
	同課長補佐	田中繁
調査総括	同文化財調査係長	隈昭志
調査事務担当者	同管理係長	望野正雄
	同主事	石原昭宏
調査担当者	同学芸員	島津義昭（調査主任）
	同調査員	西田道世
	同調査員	中山清美
	同調査員	豊崎晃一
調査資料整理	文化課主幹	上野辰男
	同嘱託	山城仁恵
	同調査員	白石巌
調査の指導・助言	熊本大学教授	松本雅明
	同教授	白木原和美
	文化庁記念物課調査官	小林達夫
	同技官	稲田孝司
	熊本商科大学教授	牧野洋一
	熊本大学助教授	甲元真之
	佐賀大学助教授	日野尚志
	熊本大学講師	規工川宏輔
	福岡市立歴史資料館	三島格
	玉名高等学校校長	田辺哲夫
	熊本市立高等学校教諭	阿蘇品保夫
	嘉島町町史編纂委員	荒尾廷寿
	城南町教育委員会庶務課長	徳本明
調査協力者	熊本大学学生	田中寿男・工藤潤子
	熊本商科大学学生	清田純一・吉田好範
		宮部雅夫・清田隆幸
		江藤哲郎

Ⅱ. 嘉島町の調査

A 調査地の位置と環境

熊本県上益城郡嘉島町大字上六嘉字益城（くまもとけん かみましきぐん かしままち おおあざかみろくか あざましき）は上六嘉、下六嘉、上島、鯰などの集落に囲繞された、嘉島町の水田地帯の中央部に位置する。この水田地帯は、南を東西に流れる御船川、北を画津湖に源を発する加勢川により限られている。調査地の一帯は、大略平坦であるが南東から北西にかけて、わずかずつ高さを減じる。したがって水田水路もこの方向を示す。水田地帯の南、御船川の土手下で標高8.4m、北側の加勢川ぞいで6.9mを測る。

調査地の東側には、龍福寺と西村の間から北西方向に延びる旧河道とみられる低地が見られる。今回発掘を行ったのは、大字上六嘉字益城1775番、1769—1番、大字鯰字花田569番である。

（島津）

B 調査の目的

嘉島町、現在上益城郡に属す。和名抄には、益城郡に下記の8郷を記す。(1)

益城郡　営麻　子按　加西　坂本
益城　麻部　富神　宅部

これ等の比定地については諸説があり、決着をみていない。上六嘉字益城を和名抄記載の「益城」と関係ありとする圭室諦成氏の説がある。(2)

> 益城郷について。（中略）わたくしは六嘉村・甘木村・大島村にあてゝおる。その理由は、益城の字名が残っていることである。上益城郡村誌におさめられておる上六嘉村誌の字地の条に、「益城（マシキ）、本村の乾（西北）、東西五十七間、南北二丁五十五間」とみえておる。ちなみにマシキは原始日本語では、がけのところ、つまり台地のへりのところの意である。第二の理由は、中央であったことである。益城郡は広いので、郡をさらに幾つかにわけて統治していたことは、阿蘇文書所収1195年（建久六）の、甲佐社領文書案によってあきらかである。上六嘉村の小字の中郡（ナカゴオリ）は、中郡の行政官庁のあったところを意味するのではないだろうか。

として、小字「益城」を、古代益城郷と直接繋がりあるものとされた。さらに田辺哲夫氏は、それを発展させ、この地を古代益城郡の郡衙の存する可能性を示唆された。その根拠は、和名抄の筆頭記載の郷には、玉名郡の場合の如く郡衙の存する可能性があること。小字「益城」が、嘉島条里区の条に沿って存在し、それが大字界となること、などである。しかし一方、松本雅明氏の小字「益城」を益城郡の中心としない論考も公にされている。(3)

fig. 1　益城・天神原位置図(1.益城　2.西天神原)明治34年測図

したがって今回の調査は、発掘調査により遺構および包含層の有無を知ることに目的がある。小字「益城」内に二か所、大字飽字「花田」に一か所の微高地様の高所があるが、それが遺構であるかどうかを知ることに調査の重点を絞った。（島津）

C 調査の経過

調査は稲刈りの終了を待って、12月、1月におこなった。調査地は雑草が繁茂していたので、その除去から始めた。その後、地形に添って調査グリットを設定した。北側の微高地から順次発掘を始めた。11月10日には稲田孝司技官が来訪、調査方法について教示を受けた。1月9日には牧野洋一、日野尚志、規工川宏輔、阿蘇品保夫の諸氏が現地に出向き、調査の検討がおこなわれた。現地は冬季でも地下水位が高く、発掘は困難であった。（島津）

D 調査地の状態と調査区の設定

調査地の全体的な状態は先述したが、以下調査をした3か所の地点について詳しく記す。3か所の地点は、北より順に1、2、3地点と呼ぶこととする。

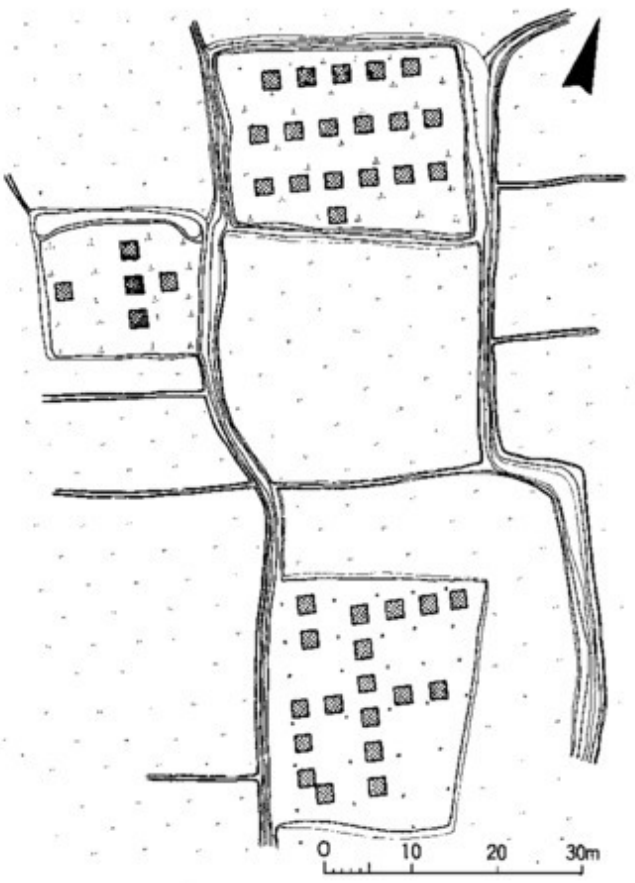
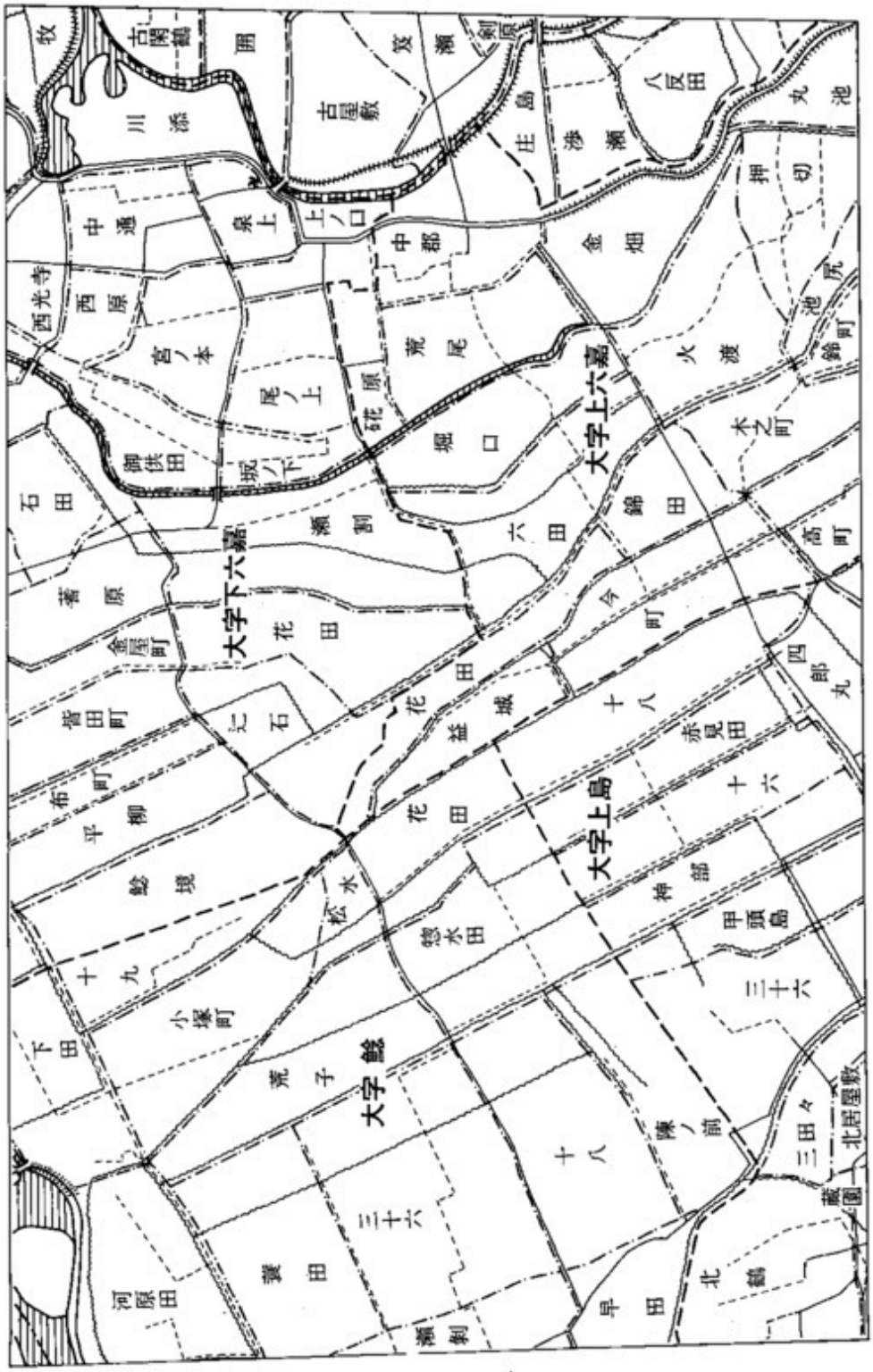


fig. 2 調査地の設定図

1地点は、中心部の計測で東西27m、南北20.5mを測る。西南側がやや張り出す。東西の側には井手が通っている。高さは、6.4～6.7mでほぼ同じ値を測る。台地縁には幅50～60cmの小溝が掘られている。

2地点は、北端は井手を隔てて1地点と接する。調査地のなかでは一番面積が少ない。東西19m、南北17mを測る。高さは1地点と同じ。北縁に幅1.5m、高さ20cmの高い部分がある。

3地点は、四辺形の北辺に比し南辺が短く、北辺24.5m、南辺20.5mを測る。台地の高さは、



——— 大字界　　—·—·— 小字界

fig. 3　益城周辺の字名

6.25～6.67mを測り、1、2地点より低い。

これ等の地点は、かつては広かったと伝えられているが、その規模がどのように変化してきたかについては復原する手懸りを欠く。

調査区は、この地に想定せられた条里地割の方向（N 22°W）を軸として、1地点に77か所、2地点に42か所、3地点に117か所設定した。1か所の大きさは2m平方である。しかし実際の発掘数は、1地点18か所、2地点5か所、3地点17か所、合計40か所であった。　（島津）

E　調査地の層序と出土遺物

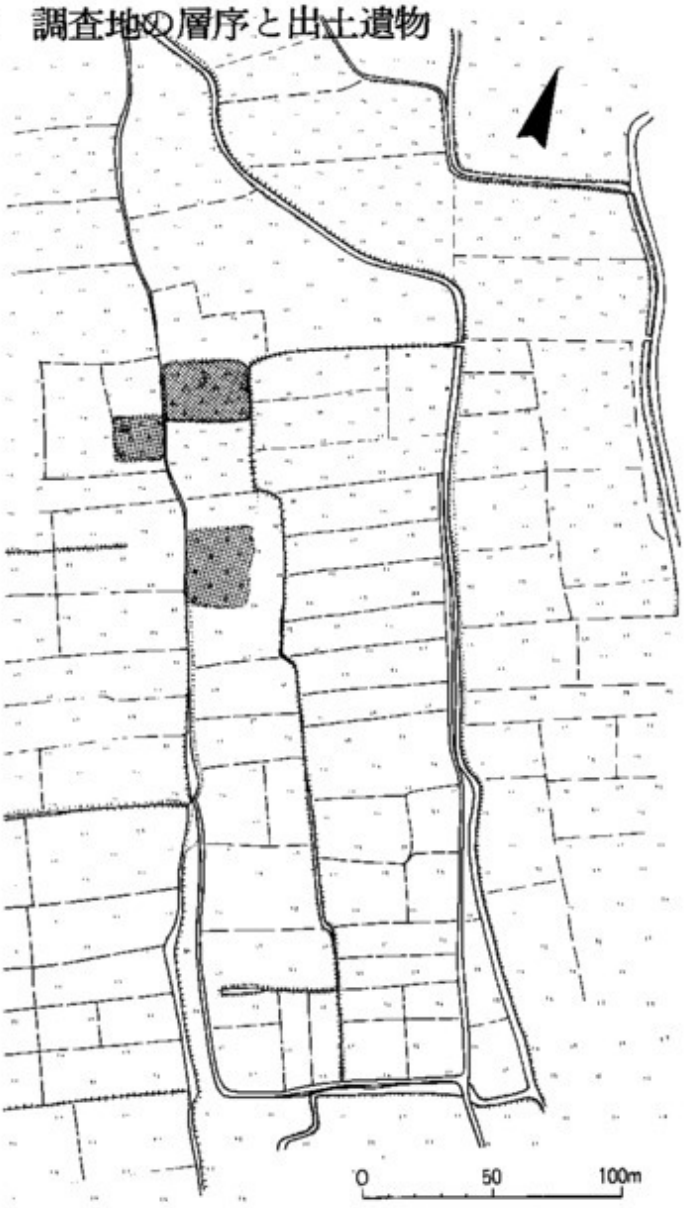
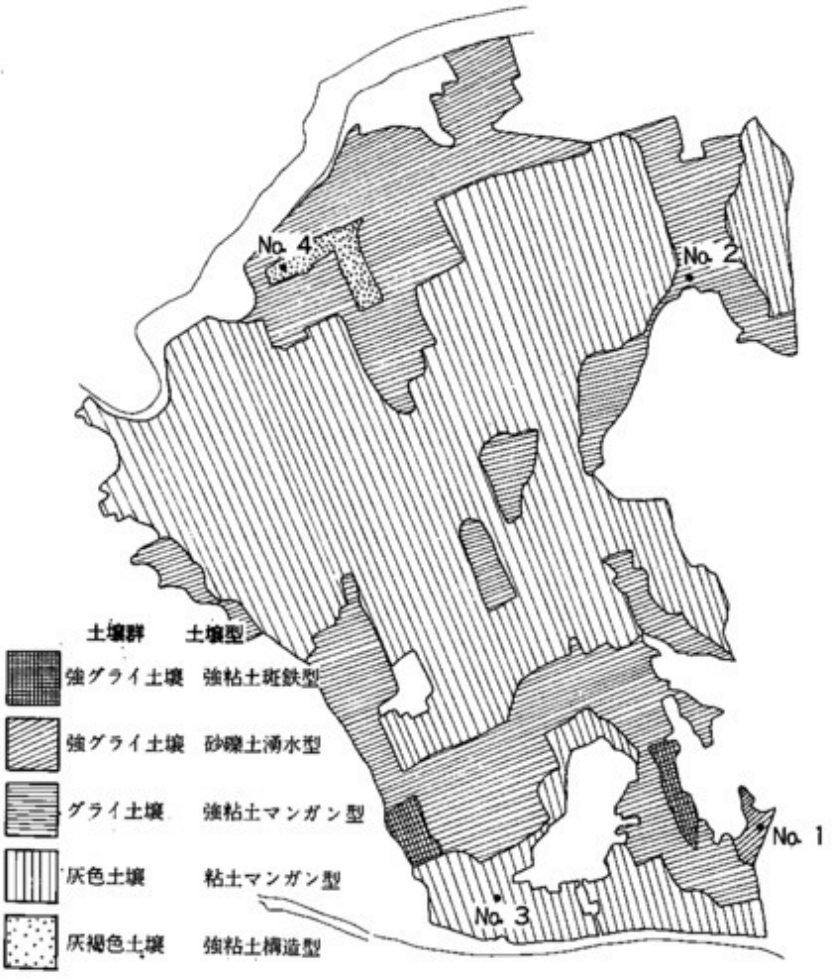


fig.　4　調査地の地形図

土層は、調査地全体同一の堆積を示す。調査で確認したものは、4層、地表下1.8mまで掘った。1m前後で湧水が始まる。Ⅰ～Ⅳ層に大別でき、さらに2枚ずつの亜層がみられる。Ⅰ層は黒色土でかやの根が多くみられるa層と、その下のb層で、厚さは約20cm、Ⅱ層は、褐色土で、a層はやや粉っぽく明るい、b層はしまっていてやや暗い、厚さ60～70cmを測る。Ⅲ層は灰色土で、a層には斑文がよく発達している。厚さは55cmを測る。b層は上層より密。Ⅳ層は、黒色の泥層で、上層に20cmの鉄分集積層がみられる。80cm以上を測る。Ⅰ層を除いて、以



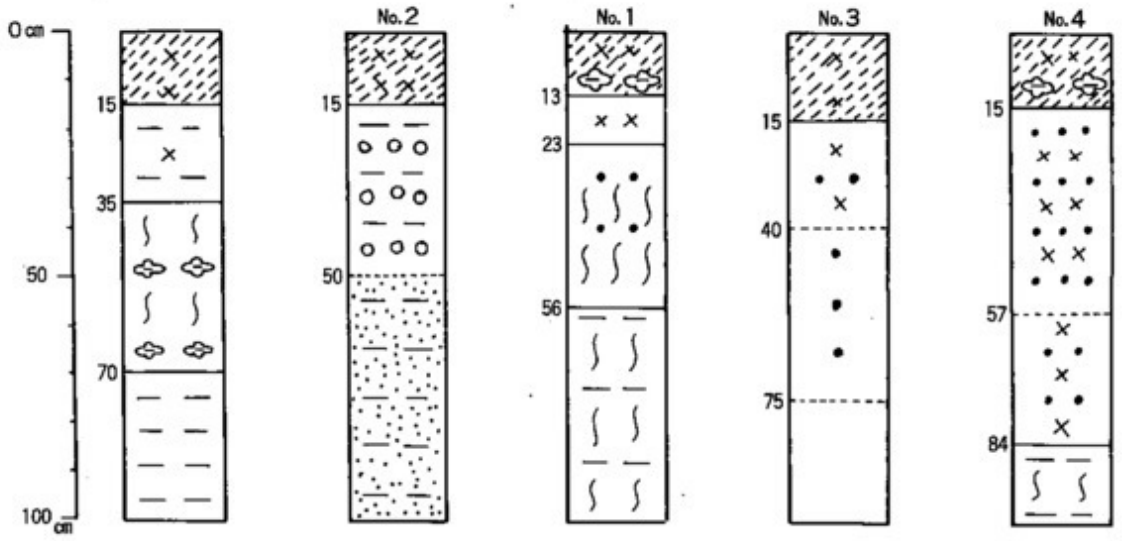


fig. 5　嘉島町土壌区分図・土壌断面柱状図

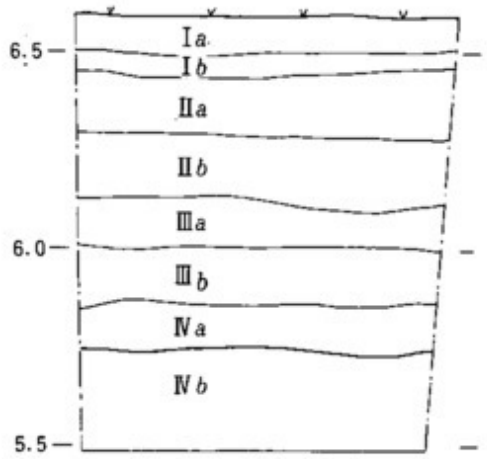


fig. 6　調査地の層序

下漸位的に変化している。II層以上が微高地様の高所を形成している。この地区の水田の土壌区分は、灰色土壌群の強粘土マンガン型を呈しているが、この土壌は我が国の沖積地帯の乾田土壌の大部分を形成しているといわれている。

出土遺物はI層に近世の染付および磁器数が23片、IIa層上面で土師器3片、瓦質土器1片が出土した。II層出土の土師器は、1片が2㎝平方の小破片で皿とみられ、周辺が磨耗している。瓦質土器はこね鉢の破片とみられる。いずれも中世のものであろうか。小破片のため図示できない（PL.1の3の下段右端）。　（島津）

註

(1)原田敏明監修『熊本県の歴史』（文画堂）　1960年　東京・佐賀の60、61頁に高山寺本の写真がある。
　正宗敦夫編纂・校訂『倭名類聚鈔』（風間書房）　1970年　東京　による。
(2)圭室諦成『熊本の歴史』（日本談義社）　1954年　熊本
(3)松本雅明「益城国府考」「日本談義」第92号　1958年　熊本
(4)川瀬金次郎・横山栄造・松本慎『日本の水田土壌』（講談社）　1972年　東京

Ⅲ. 城南町の調査

A 調査地の位置と環境

熊本県下益城郡城南町大字坂野 字西天神原（くまもとけん しもましきぐん じょうなんまち おおあざ さかの あざにしてんじんばる）は、熊本平野の南に優美な姿を横たえる吉野山の両側の台地上の北端に存する。この台地は広義に「舞ノ原台地」と呼ばれる、標高30～34mの拡大な台地であるが、その為第二次世界大戦中は飛行場として利用された。

天神原は、この舞ノ原台地の北東方向にあたるが、平野の集落から吉野の集落へ通じる窪道を境に、西天神原、東天神原に分割されている。天神原の名前は、現在東天神原の中央に位置する天満宮に由来する。

現在は神社境内を除いて全て蜜柑園であるが、かつては桑畑であった。小字「西天神原」は、北西、南の二方向は急崖になっていて、崖下の水田との比高差は約10mを測る。ここからは、眺望が良く北面して熊本平野を眼前に収め、西方に目を転ずれば遠く有明海、雲仙岳を望することが出来る。

東天神原に接した、中央部が最も高く標高37mで、そこから扇状に順々に低くなり崖縁まで続く。縁部で標高30mを測る。

先述のとおり、戦時中に舞ノ原台地に飛行場が作られたが、この天神原には緊急時に飛行機を隠す掩体壕とそれに通じる誘導路が作られていた。これらの施設の造築には、地元の人々も参加しており、聞き取りによると、ほぼ西天神原の中央部に馬蹄形状に誘導路が作られ、二か所の掩体壕が築かれた。この折、礎石が出土したのである。

これらの動きにより、表土から深い所で約1mの土は、移動、撹乱している箇所がある。

（島津）

B 調査の目的

城南町大字坂野字西天神原は昭和32年の松本雅明氏の調査によって礎石群、礎石の根石、軒下の敷石などとみられる一連の遺構が発見された。これ等の結果については『城南町史』（昭和40年）の中に詳しいが、結論としては、この地を益城軍団に比定された。(1) その根拠を要約すると、

①上述の諸遺構が発見されたこと

②布目瓦が全くでない

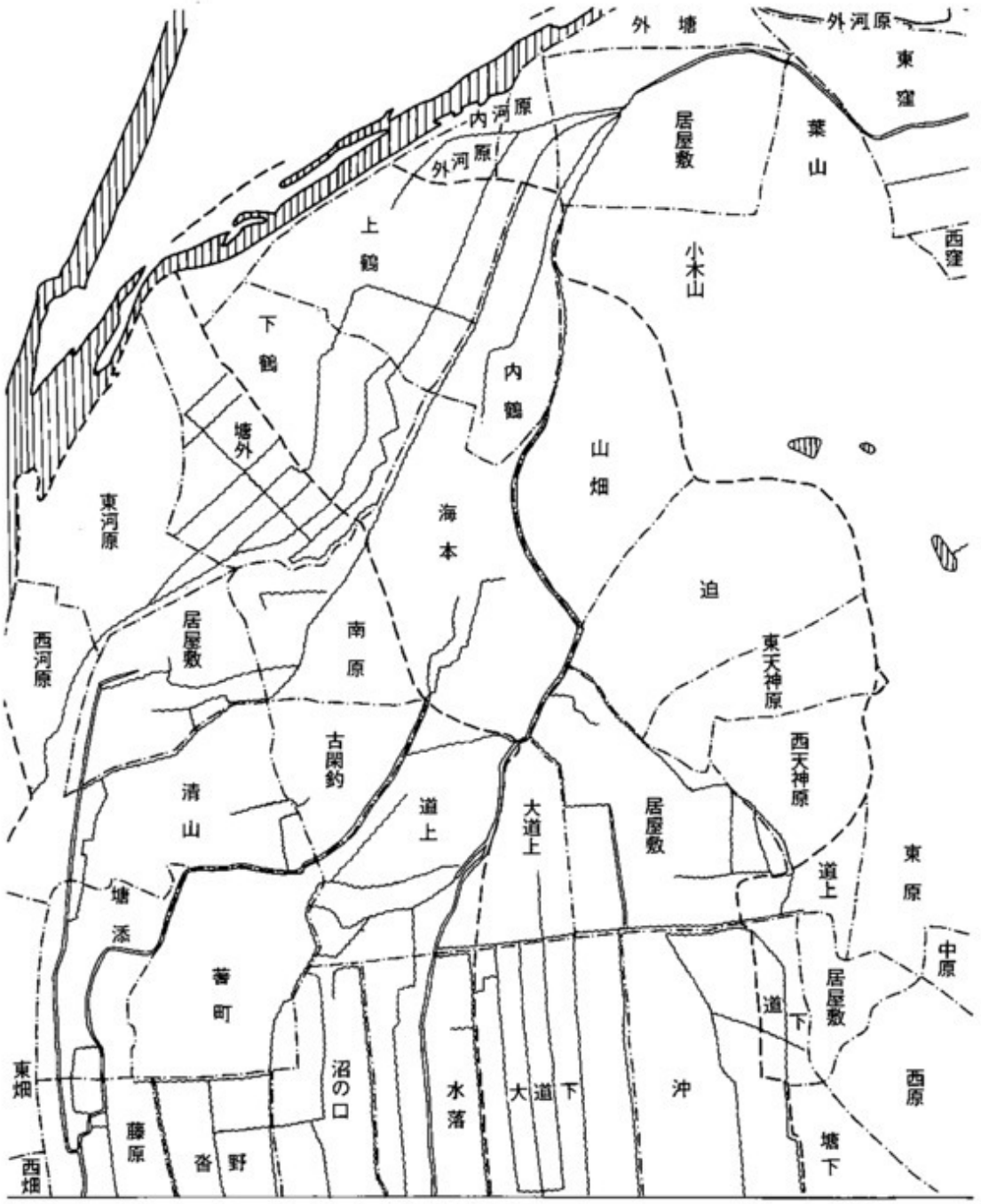


fig. 7 西天神原の字名 ——— 大字界 —·—·— 小字界

③近接する層から発見される須恵器片は、いずれも奈良朝前後のものであること。

④以上のことは、瓦を使用しないのに大きな礎石をおく鞠智城址の例からも、わかるように城砦である可能性が高いこと。

⑤また立地的にも、浜戸川西方の平野を一眺のもとに見下す台地で、有明海防備の意味をもっている。

などである。一方、この地を「郡家」に比定する説もある[2]。以上の様な点を踏まえ、現地発掘調査を実施した。（島津）

C 調 査 の 経 過

嘉島町に引き続き２月、３月に城南町の調査をおこなった。発掘調査に先立ち、地元平野地区に於いて説明会を開いた結果、土地所有者の理解と協力が得られ、調査地は蜜柑畑であるに

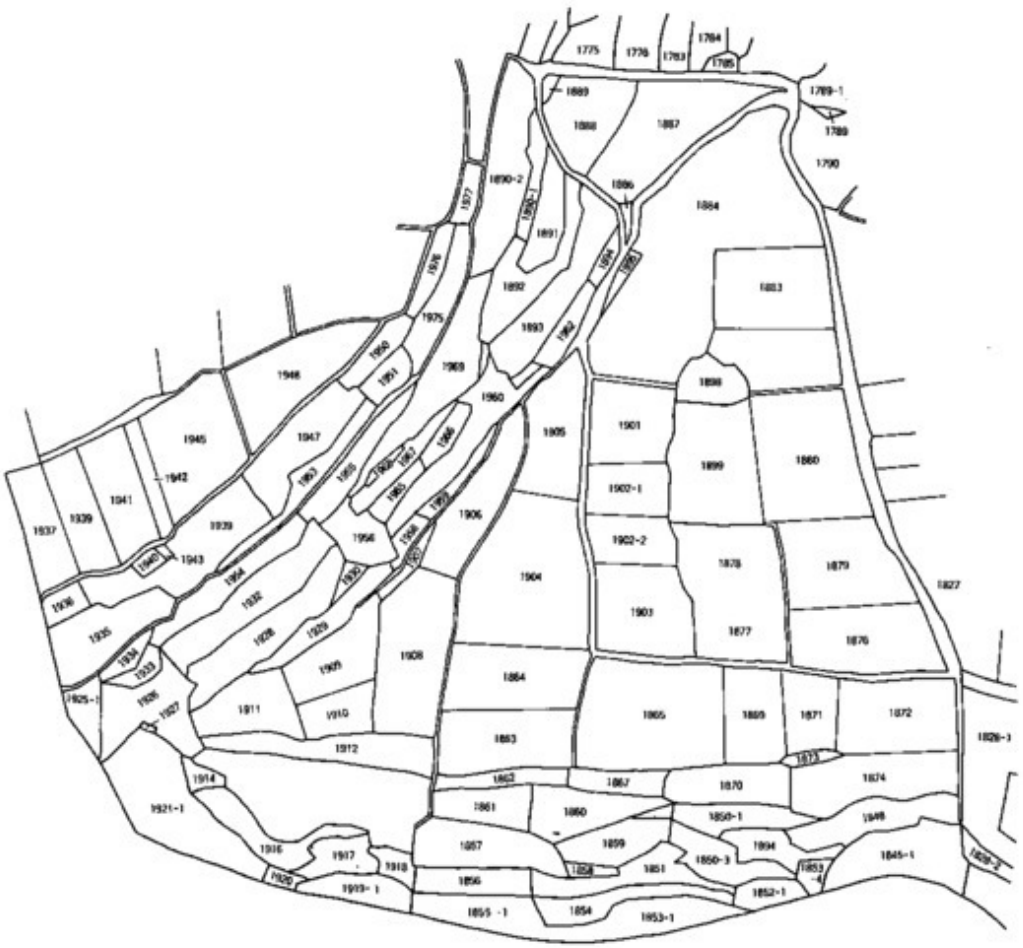


fig. 8 西天神原の地番

もかかわらず調査を実施することができた。

調査区の設定にあたっては、土地所有者の指示に従い蜜柑と配水管に支障のないようにすることとなった。したがって通常の調査に比して調査区の設定が変則的になった。発掘調査に先立ち、年配者から戦時下の土地変更の規模や様子を聞いた。それと同時にかつて松本雅明氏により調査された礎石の再調査をおこなった。3月1日には、文化庁の小林達夫調査官が来訪され教示を受けた。（島津）

D 調査区の設定

調査地は、前述のとおり全面蜜柑畑であり、西天神原の一部は誘導路や掩体壕に利用されていた。調査前の聞き取りによると誘導路は、1883番地から西へ入り、1884番地で南へ方向を変え1901、1902、1903番地を通り、それから東へ1877、1876番地へ抜けていたという。掩体壕は1883番地、1879番地に作られていた。これらの築造にあたっては、人力の他にブルトーザー等の機械力も使用され、当該部分の平坦化が進められたという。今回作成した地形図の35.5～36.5mのコンター間が誘導路の道筋にあたると見られる。したがってトレンチは、それらを外すように設定した。またトレンチ設定にあたっては蜜柑の根を痛めないように、蜜柑の植付の間を土地所有者の承諾を得ながらおこなったので、トレンチの幅は一定していない。トレンチの名称は、設定順にナンバーを付していった。（島津・豊崎晃一）

fig. 9 掩体壕・誘導路築造模式図

（単位m）

トレンチ名	東	西	南	北	備　考	トレンチ名	東	西	南	北	備　考
1	2.0	2.0	7.8	8.0		24	2.1	2.1	10.0	10.0	溝5
2	0.1•1.0•0.5	1.3・0.5	0.5•0.9•0.2	1.5・1.2		25	0.4	0.4	0.8	0.8	
3	2.2	2.1	4.7	4.6		26	0.4	0.3	1.2	1.2	
4	1.5	1.8	2.9	2.7		27	1.9	1.6	0.9	0.9	集石1
5	1.7	1.9	7.5	7.5		28	2.5	2.6	1.4	1.4	〃
6	2.5	2.5	2.0	2.0		29	5.7	5.3	1.2	3.0	
7	7.0	6.9	1.8	1.7		30	2.2	2.4	3.9	2.4	
8	2.2・2.3	2.0・2.0・1.3	4.1	2.0・1.8・2.0	溝1・2	31	0.9	0.9	5.5	5.5	溝3
9	4.0	3.7	0.9	1.0		32	0.8	0.7	5.0	4.8	〃
10	2.0	2.0	6.8	6.8		33	1.8	1.7	1.0	1.0	
11	1.2	1.5	7.0	7.0		34	1.9	1.5	1.6	1.9	
12	2.0	2.1	4.1	4.1	溝3	35	0.6	0.6	3.5	3.6	溝3
13	2.4	2.5	2.5	2.4		36	3.0	8.5	3.0	0.8	
14	2.1	3.0	1.9	1.9	溝1 集石2	37	0.4	0.4	4.8	4.8	溝3
15	1.0	1.0	9.0	9.1		38	4.9	4.9	0.7	0.7	溝4
16	3.4	3.4	2.6	2.6		39	3.5	3.4	0.6	0.7	溝3・4
17	1.5	1.5	3.0	3.0		40	0.7	0.7	3.2	3.1	溝4
18	3.6	3.9	2.8	2.9	溝1	41	0.8	0.8	3.0	3.0	溝3
19	8.3	3.8	1.0	1.0	〃	42	1.8	2.0	7.6	7.5	〃
20	8.3	2.2・5.7	2.3	9.0・1.2	〃	43	0.7	0.6	2.5	2.5	
21	7.4	7.4	2.0	1.7		44	0.6	1.0	4.5	4.0	
22	9.0	9.0	6.1	6.1	溝3	45	0.3	0.3	4.0	4.5	
23	5.1	5.1	2.8	2.9							

Tab. 1　トレンチ一覧表

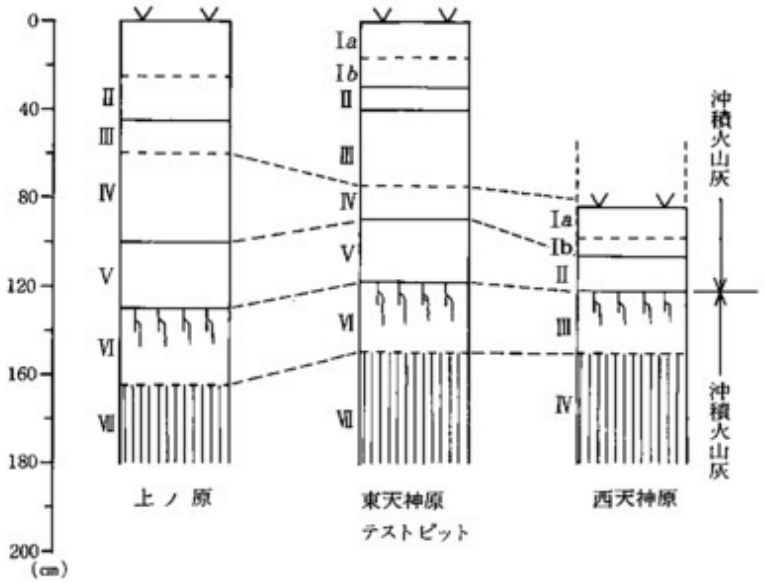


fig. 10 調査地土層・土層対比図

E 調査地の序層

緑川、御船川、浜戸川沿岸ならびにその周辺には、河岸段丘が発達している。西天神原は、それらの段丘群の一つである舞ノ原台地北辺に位置している。台地は低位段丘上位面（Mh面）に比定されており、その基本的構成地質については、籾倉克幹氏の調査に詳しい。(3)

ここでは、調査地の東隣（東天神原）に設けた土層観察用テストピット（1.20m×0.7×1.70m）における観察を基礎に、調査地の土層の基本的層序、ならびにその堆積状況について記す。

テストピットにおける土層断面は fig.10 の通りである。上位より 8 層に区分される。

Ⅰa層　地表より 0～15 cm。細礫を含み、樹根の多い灰褐色の表土である。色調は7.5 YR 4/2。

Ⅰb層　地表より 15～30cm。若干細礫を含む。シルト質土壌で若干粘性がある。色調は 7.5 YR4/1。黄色パミスを含む。

Ⅱ層　地表より30～40cm。若干暗い褐色を呈す軽埴土である。下位にゆくにつれしまりがよくなる。黄色パミスが他の層と比べ、顕著である。色調は、10YR4/4。

Ⅲ層　地表より、40～75cm。上位では細礫を若干含む。軟質の暗褐色火山灰である。若干粘性があり、黄色パミスを含む。色調は、10YR3/3。

Ⅳ層　地表より75～90cm。Ⅲ層とは漸移的である、若干粘性のある上位の細粒の暗褐色火山土である。色調は、10YR 3/3～3/4を示す。Ⅲ層からⅣ層にかけて、縄文晩期の土器

片が出土している。

V層　地表より90～118㎝。沖積火山灰層中最とも黒色化し、腐植の集積が多い。全体的にしまりよく、黄色パミスを若干含むが、目立つほどではない。色調は、7.5 YR3/2～2/2を呈す。

VI層　地表より118～150㎝。下位のローム層の腐植部である。上位では塊状構造が発達しておりよくしまっている。下位へ向って色調は明るくなり、VII層とは漸移的である。7.5 YR4/4を呈す。

VII層　地表より150㎝以下に堆積する。

全体的によくしまったローム層下である。上位は若干軟質であるが、下位にゆくほど固括力を増す。下位においては、軽石、安山岩小礫を含んでいる。阿蘇新期ローム層に比定できる7.5 YR5/6～5/8を呈す。

以上の土層は、Primary な堆積状況を示し、調査地の東隣に分布している。

次に、調査地において、確認された土層層序について記す。なお以下で用いる土層ナンバー（Ia～IV層）はテストピットとは符合しないことをことわっておく。

調査地における層は、遺構内の堆積土を別にして基本的には4層が認められる。

Ia層　層厚10～20㎝、細礫を多くみ、樹根の多い腐植攪乱土層である。縄文後、晩期土器片、弥生、土師片、磁器片等の出土をみる。暗褐色を呈す。

Ib層　層厚20～30㎝、細礫を若干含む、軽埴土である。シルト質で、黄色のパミスが点在する。調査地の北東部（31、32、41、43T周辺）西部（25、26Tの周辺）に良好に残っている。暗褐色を呈す。

II層　層厚20～30㎝。やや粘質のある黒褐色土である。全体的にしまりのよい層である。黄橙々色のパミスを含む。分布状況は、Ibとほぼ同様であるが、Ibと比べやや残りのよい状況を示す。近年の削平は、この層の上位面までおよんでおり、とくに、8、9、14、18、20、等の南側トレンチ、28、34等の北側トレンチにおいては、それが顕著である。

III層　層厚20～30㎝。下位の黄褐色ローム層の漸移腐植土層である。上部では、塊状構造がよく発達しており、クラックゾーンとなっている。暗褐色を呈すが下部にいく程、明るくなり、IV層とは漸移的である。

IV層　溝3での観察によると層厚1.50mほどを測る。明るい褐色を呈すほりのよいローム層である。下位にゆくほど、安山岩系統の破砕礫、軽石が多くなる。

以上が、調査地の基本的層序である。

（単位m）

トレンチ名	Ⅰa 表土上面	Ⅱ 黒褐色土上面	Ⅲ 暗褐色土上面	Ⅳ 黄褐色土上面	備　考	トレンチ名	Ⅰa 表土上面	Ⅱ 黒褐色土上面	Ⅲ 暗褐色土上面	Ⅳ 黄褐色土上面	備　考
1	35.97	——	——	(35.76)		22	35.85	——	——	——	溝3
2	36.588	36.45	36.028	35.828		28	36.06	——	——	35.31	
3	36.12	——	——	(35.72)		31	36.93				溝3
4	35.82	35.52	35.20	34.884		32	36.93				〃
5	35.82	35.40	35.20	34.90		35	36.01	35.70	35.42	34.96	〃
6	36.72	36.38		35.87		38	36.92			36.28	溝4
7	35.85	35.62	35.32	35.00		39	36.96			(36.15)	溝3・4
8	35.88				溝1・2	41					
9	35.57	——	——	35.10		42	36.97	36.66	36.42	35.94	
10	36.33	36.18	35.90	35.78		43	36.95	——	——	36.00	溝3
11	35.82	35.54	35.36	35.24		45	36.88			36.14	
13	36.60	36.70	36.44	36.05		46	36.91			36.20	
14	35.63	35.50	35.30	34.91	溝1 集石2	23	34.61	——	——	(34.11)	
16	36.64	——	——	34.92		24	34.43	——	——	(33.87)	溝5
17	36.63					25	33.26	33.06	32.70	32.23	
18	35.66	35.26	35.02	34.90	溝1	26	33.60				
19	35.94	35.60	35.42	35.09	〃	29	34.24	33.70	33.46	32.82	
20	35.81	35.40	35.18	35.04	〃	30	34.21	33.65	33.50	32.84	
21	35.79	35.52	35.30	34.98							

Tab. 2　西天神原の土層水準高

*　——削平され存在しない層
**　（　）存在するが上面が削平されている可能性がある層

テストピットにおける、第Ⅱ層からⅤ層の土質ならびに層序の状況は、保田窪面上に立地する上ノ原遺跡の沖積火山灰の堆積状況の所見に酷似する。とくにⅢ層からⅣ層にかけて、縄文後・晩期に相当の土器片が出土した事実は、それらの層が上ノ原遺跡のⅣ層に対比できるものと思われ、またそれ以下の層位も対比が可能である。

調査地において、第Ⅲ層、ないし第Ⅳ層（上ノ原第Ⅳ層）に相当する土層は、先述したように削平もしくは撹乱されており、部分的に確認されるにすぎない。残りのよい箇所では、Ⅰb層と呼称される層に相当する。

テストピット第Ⅴ層に相当する土層は調査地第Ⅱ層にあたり、以下順次Ⅵ層とⅢ層、Ⅶ層とⅣ層がそれぞれ対応する。（島津・田中寿男）

西天神原の現状

F 検 出 遺 構

発掘区は先述のように西天神原に任意に設定した。発掘区は45か所であり１～45のナンバーで表記するが、この番号は設定の順序を示す。天満宮の境内に１、３区（1898番地）、それより南の1896番地に２、６、10、16、17の各区、それと並列して1879～1883番地に12、13、31、32、36～39、40～45の各区。また、平坦面の南寄りに、東西に４、５、７～９、11、14、15、18、19、21の各区を設定した。更に天満宮の北側、1884番地に27、28、33、34、西天神原の西平坦面1904、1908番地に23、24、25、26、29、30区を設定した。以下遺構毎にトレンチの状態を述べるが、遺構の認められなかった区については、後にまとめて記述する。

検出遺構の概要　各種の遺構が検出された。それぞれの遺構は発見順にナンバーを付して呼ぶ。以下検出遺構と調査区を記す。

住居址	６、10トレンチ
住居址様遺構	29、30トレンチ
溝１	８、14、18、19、20トレンチ
溝２	８トレンチ
溝３	12、22、31、32、35、37、39、41、43トレンチ
溝４	38、39、40トレンチ
溝５	24トレンチ
溝状遺構	13、16、17トレンチ
集石１	27、28トレンチ
集石２	14トレンチ
小ピット群	４、５、７、11、20、21トレンチ
礎石状石製品	２トレンチ

なお、溝３の溝中に集石が見られたが、これは溝３に含めて記述する。　（島津）

i　竪　穴（fig.11・12・13）

６トレンチ　かつて遺物が出土したという土地所有者の教示により調査区を設定した。4，5㎡の小範囲のなかに３か所の竪穴を検出した。北側から１号、２号、３号と呼ぶ。Ⅱ層を掘り下げているうち３号に気付き、精査してみると２号と切り合っていることが解った。同一レベルで２号の南の縁が認められたので、３号より２号が新しい時期のものだと判断される。さらに１号を検出したが、縁部に大きなピット（Ｐ１）があり切り合い関係を明らかにしなかった。

１号は竪穴の南辺45㎝を検出したのみであるが、約20㎝下に床面が見られた。西側のトレンチと接する部分で、わずかに北側に曲り気味になるが、この様子から推定すると、トレンチの

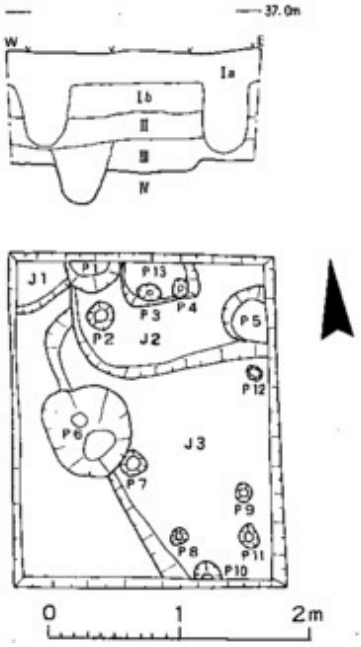


fig. 11　竪穴・住居址平面図・断面図(6トレンチ)

外側、そう遠くないあたりに南西コーナが存るとみられる。

2号は南辺1.3m、西辺0.7mを調査した。床面は、掘り込み面から20cmを測る。トレンチの北壁に接して四辺形の大形のピットが見られるが、北側は未掘。また西、南辺にも円形のピットが見られる。南壁に接する床面から甕の脚部と男根状石製品が出土した。

3号は西辺2.1mと北辺0.4mを調査した。北側は2号が切っている。切り込み面から床面まで約10cmを測る。床面は水平で、西壁の大形のピットの周りには炭化物の分布が見られた。床面からは、2個分の甕の脚と、トレンチの東壁中に重弧文の壺が出土した。

10トレンチ　竪穴の南北の壁を検出した。南辺の東側には竪穴の南東隅が見られる。南北壁の間は5.9mを測る。切り込み面から床面まで約20cmで、床面は水平で、堅く締まっている。壁の立ちあがりはゆるやかであるが、明瞭に確認できた。西壁に接する竪穴の中央部に大形の四辺形のピットがある。西方は未掘。P6の周辺に床面に密着して焼土と有機物の分布が見られた。竪穴の切り込み層はⅡ～Ⅲ層からと見られるがよく解らない。

6トレンチ　　(単位cm)

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1	41	24+α	28.0	北側未掘	8	14	13	14.6	
2	21	21	12.0		9	15	12	9.7	
3	19	13	7.0		10	15+α	20	10.5	南側未掘
4	14	12	3.6		11	18	15	12.0	
5	43	35+α	29.3	東側未掘	12	13	9	7.7	
6	76	63	40.3	底面に2個の穴がある	13	57	33+α	6.9	北側未掘
7	20	19	8.4						

10トレンチ

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1	45	34	24.0		8	45	30	23.8	
2	33+α	46	14.0		9	120	50+α	28.6	北側未掘
3	17	16	13.9		10	36	32	38.5	
4	22	17	15.6		11	35	35		
5	50	30+α	7.3	南側未掘	12	55	40	31.5	
6	20	20	22.1		13	76	52	39.6	
7	15	14	10.0		14	61	47	15.4	

Tab. 3　住居址ピット計測表

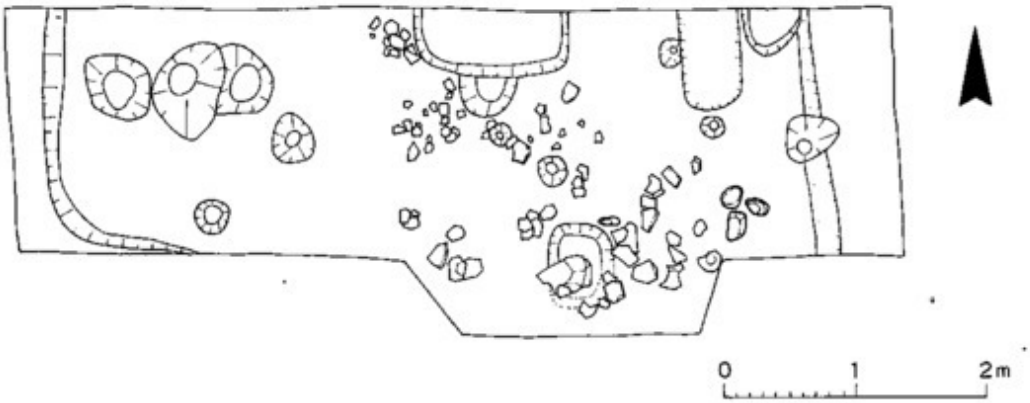


fig. 13　住居址 遺物出土状態

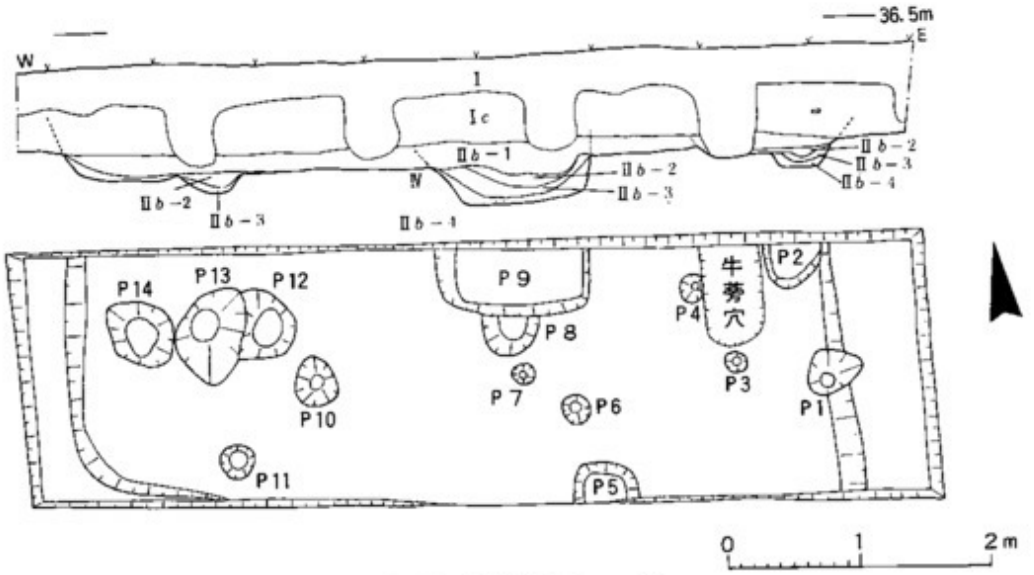


fig. 12　住居址平面図・断面図(10トレンチ)

ii 住居址様遺構 (fig・14)

29・30トレンチ　29トレンチの西南側から多量の遺物が出土したので、南側に30トレンチを設定し拡張した。表土から約40cmが耕作土。Ⅱ層の暗褐色土はその下に約50cmの厚さをもつが、下の方にやや黒っぽく粘性が強い箇所が見られた。 Ⅲ層は黒褐色土で厚さおよそ40～50cm。Ⅳ層は黄褐色のローム状土。Ⅰ層の下位～Ⅱ層上面から須恵器、弥生土器が出土した。それより下のⅡ層中位～Ⅲ層上面から縄文土器、石器が出土した。Ⅲ層の上面に部分的に固い面が認められ、とくにピットの周り、50cmにはそれが顕著であった。　　(島津・清田純一)

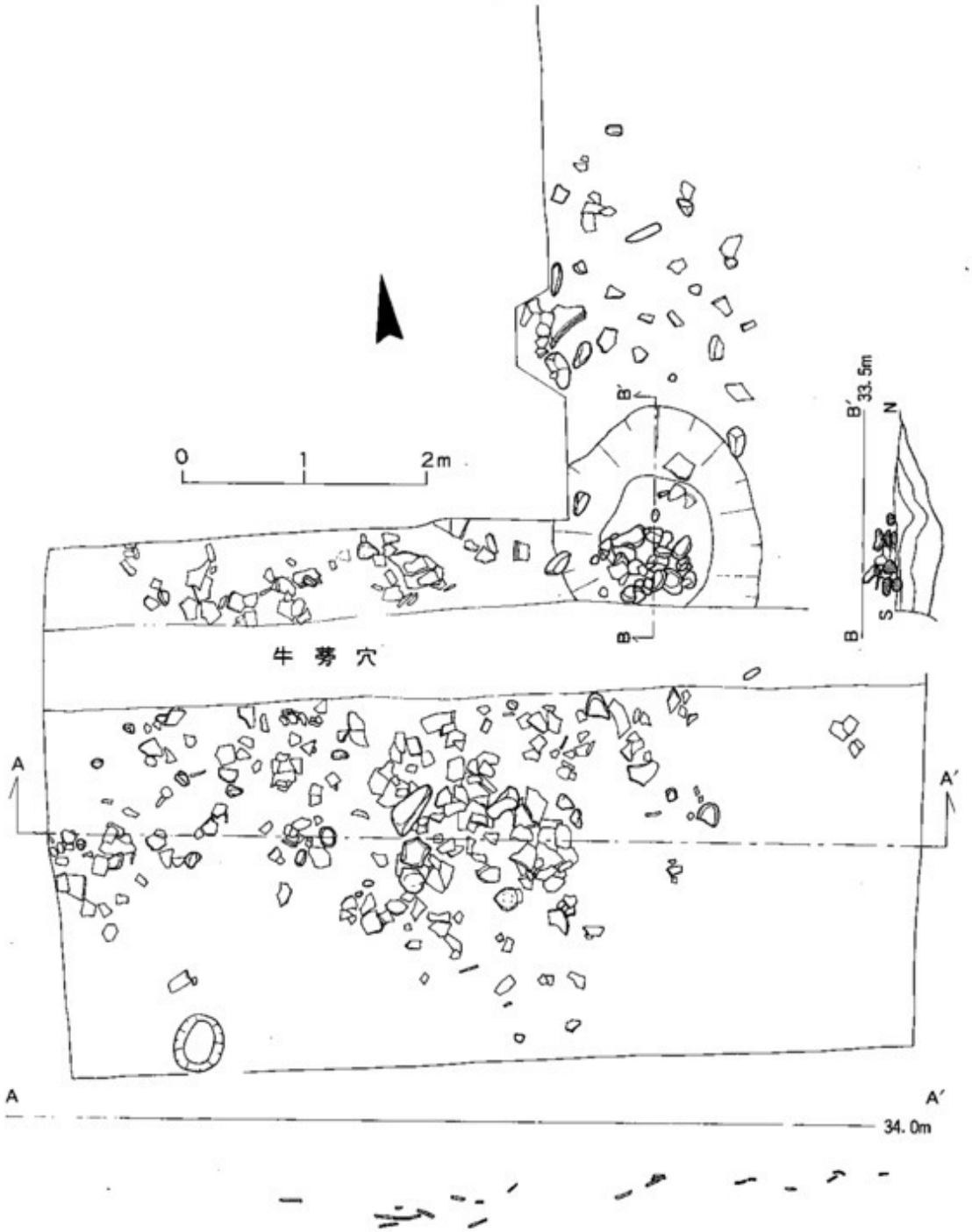


fig. 14　住居址様遺構(29.30トレンチ)

ピットは、南北方向に長軸をもち楕円形をなす。北側は牛蒡穴により切られている。東西約1.8m、南北約2.4m（復原値）を測る。断面は浅皿状をなし、中央部の深いところで約40cmを測る。ピット内は3層に別かれ中位に多量の焼土が見られる。上面には拳大の川原石を35個、雑然と並べていて、その間に縄文土器片も見られた。

縄文土器の面的な拡がりは、ピットを中心に、北側約1m、30トレンチの西側に集中している。径15～25cmの円礫が土器とともに見られた。縄文土器とともに石器も出土した。

（島津・中山清美）

iii　溝1・2（fig.15～17）

8トレンチ　溝の発見の端緒となったトレンチ。溝1、2が交互している部分を最初に検出したので、東西南北に拡張した。地表からⅣ層までの厚さは約50cmを測る。地山の黄色ローム状土、Ⅲ層の黒色クラックが全層に散乱して見られ表土からⅣ層迄の間は全て撹乱されている可能性がある。弥生土器片、須恵器片が出土した。溝1は、東西方向に直線状に見られるが、溝の上半は削平されて、Ⅳ層に掘り込まれた溝の底部、深さ10～15cmが残っている。溝底は平坦でなく凹凸がみられる。溝底に密着して径10～20cmの川原石が雑然とみられる。

溝1に交互して、やや東側に弧状を呈し溝2が検出された。この溝も溝1と同様に溝底のみ残る。溝2の南側、東縁は、かろうじて溝端が認められる状態である。溝の縁部およびその周辺に合計15個のピットが認められた。正円をなすものは少ない。溝1は溝2を切っており、溝1が古い。

（島津・豊崎）

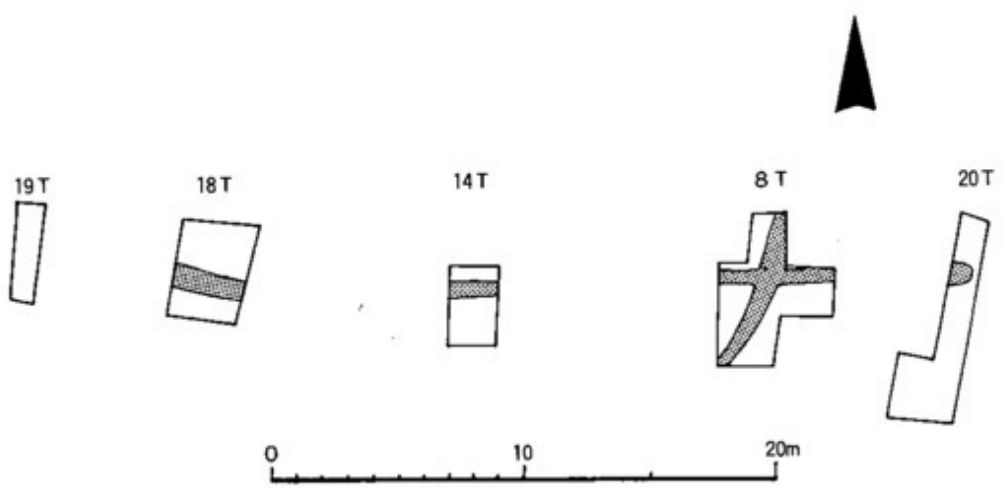


fig. 15　溝1・2平面図

14トレンチ　8トレンチで検出した溝の延長具合を調べるため設定した。東西方向に溝1が検出された。東側の断面には、Ⅰ層から切り込み、角礫を含む浅い皿状の落ち込みが見られる。土層は表土の下にⅢ層、Ⅳ層がみられ、Ⅱ層が欠落する。溝はⅠ層の中位（Ⅰb層）から切り込んでおりⅣ層に達する。溝は断面U字形をなし、上幅1*m*、溝底幅40cm、深さ80cmを測る。溝内は薄い7枚の互層が認められる。溝の中位には親指大の小石が多く見られた。縄文土器、弥生土器、土師器片が出土した。またトレンチの南側に集石とピットが見られたが、これは後述する。（島津・豊崎）

18トレンチ　溝1の延長具合を調べるため設定した。東西方向に溝1が検出された。土層は、14トレンチと同様であるが溝底はⅣ層上面で終る。断面形は幾分大きく上幅1.05*m*、溝底幅60cm、深さ60cmを測る。溝内の落ち込み土は3枚の互層が見られる。溝底に接して径10cm位の小石が散在する。（島津・豊崎）

19トレンチ　溝1の西側への延長具合を調べるため設定した。Ⅲ層上面を検出する過程で、8個のピットを検出した。ピットの切り込み面は不明。溝1を平面的に把握することはできなかったがトレンチ東側の壁の断面に溝を認めた。溝はⅡ層を切り、Ⅲ層上面に溝底をもつ。上半は削平され下半のみ残っている。残存部は上幅1.1*m*、溝底幅70cm、深さ20cmを測る。トレン

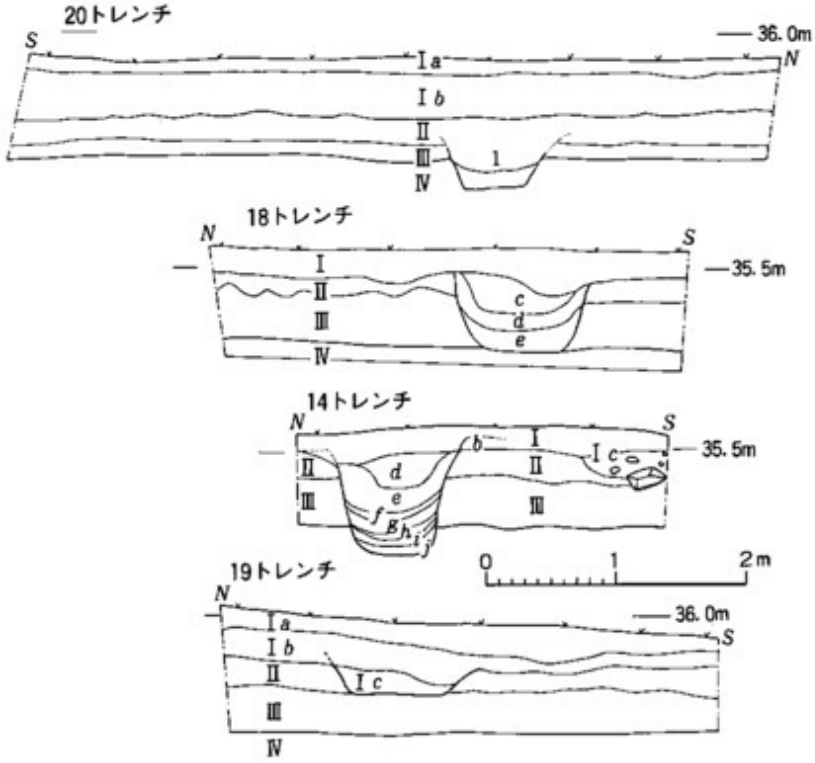


fig. 16　溝1断面図

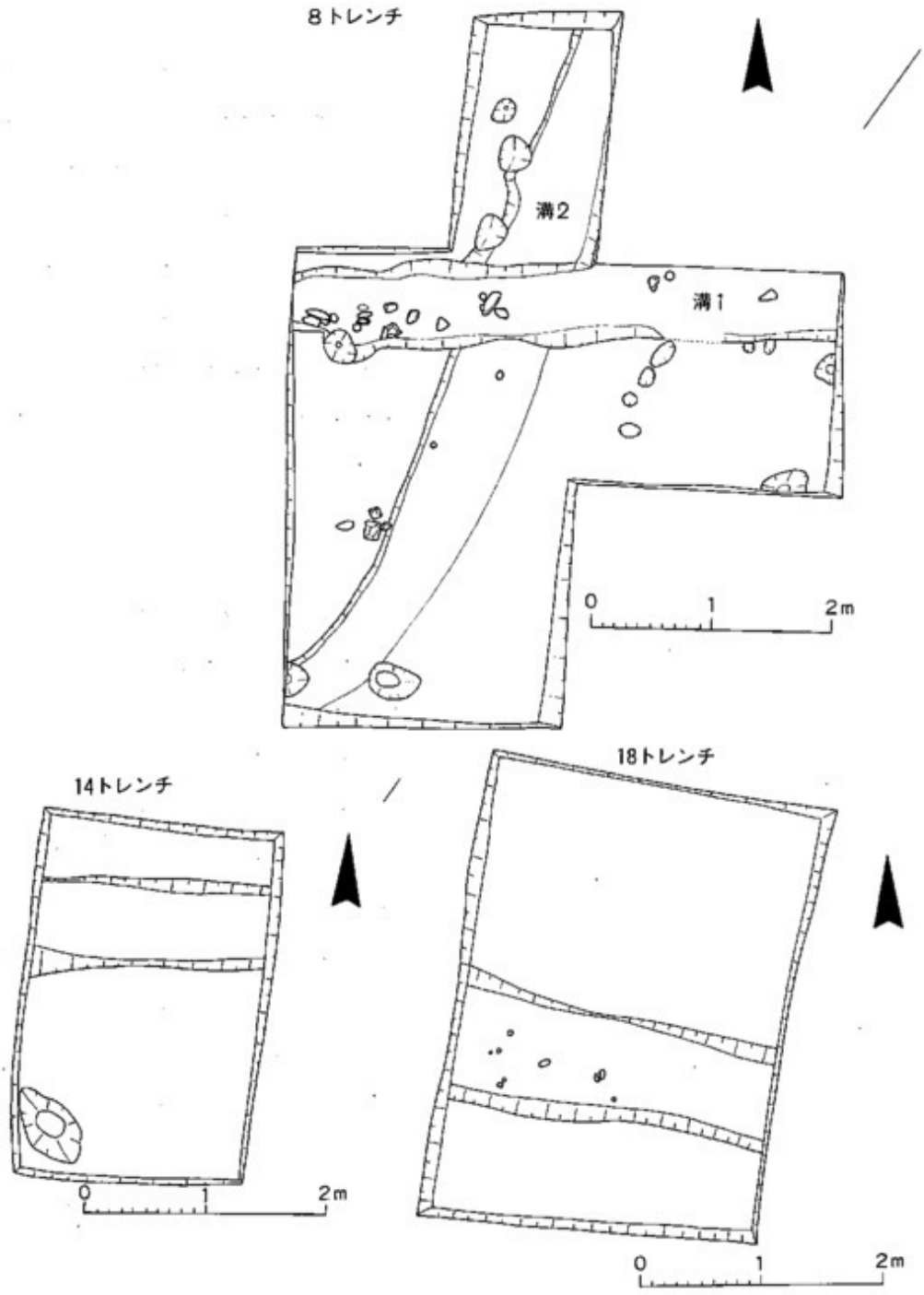


fig. 17　溝1平面図

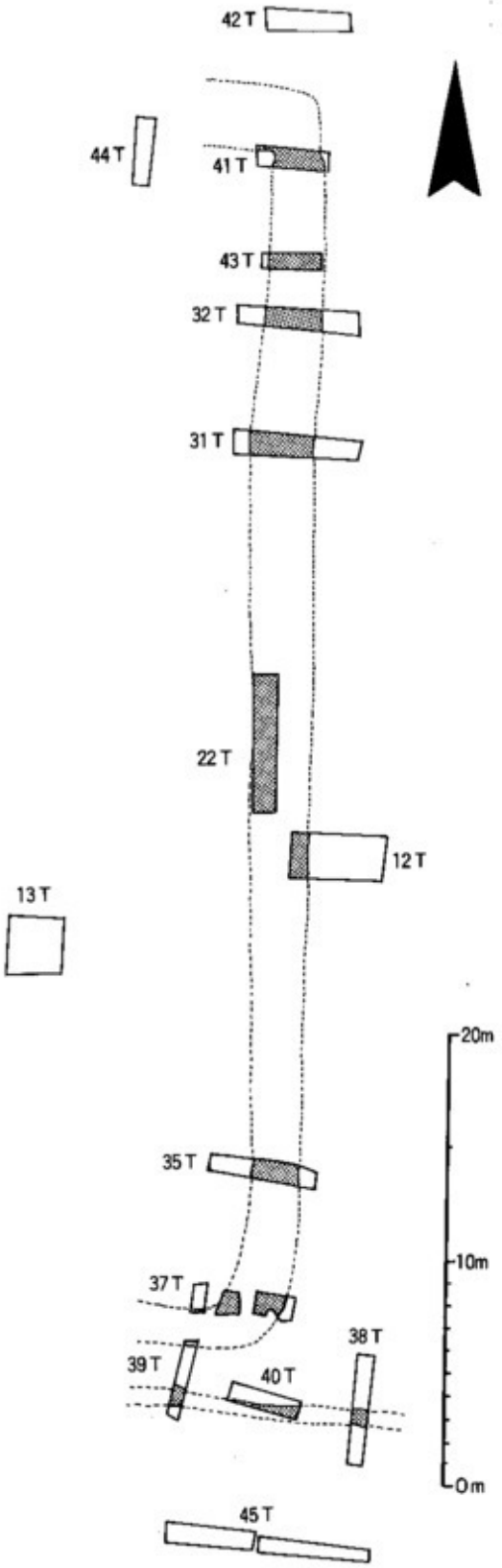


fig. 18 溝3・4平面図

チの東、北、南壁には、溝の断面を認めなかったので、このトレンチ内で溝1は終るとみてよい。（島津・豊崎）

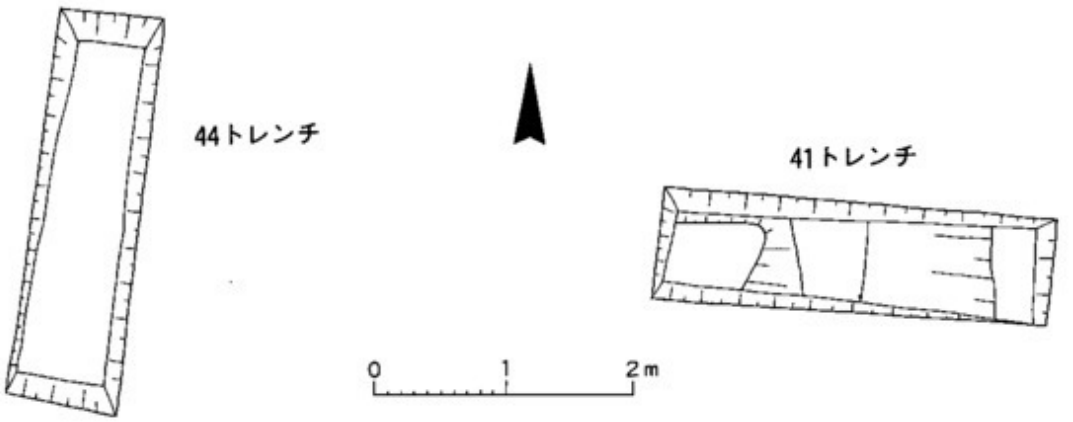
20トレンチ 溝1の東の延長具合を調べるため設定した。トレンチの北側に溝1の末端を検出した。末端は丸くならず、角ばってほぼ直立に立ち上がる。溝底は平でⅣ層に達していて、幅45cmを測る。溝の切り込み面は把めなかったがⅡ層以上にあると考えられる。

トレンチには畝状の遺構と24個のピットが見られた。（島津・豊崎）

iv 溝3 (fig.18~22)

12トレンチ 溝3の発見の端緒となったトレンチで、トレンチの西隅に溝の東端が見られた。（島津）

22トレンチ 12トレンチで確認された溝の走向に沿って、その長軸をとり設定した。その結果、溝のほぼ、西側半分を縦断する形となった。トレンチの位置は、37および41トレンチで確認された溝3の南北両コーナー部からほぼ等距離を測る箇所である。このトレンチでは、溝3の形状把握と、走向方向の確認ならびに溝内堆積土の堆積状況の観察をおこなった。溝内の埋土は、Ⅷ層上面まで掘り下げた結果、表土を含めて7枚を数える。すなわち、Ia、Ib、Va、Vb、Vc、Ⅵ、Ⅶ層である。土層は全体とし



て、ゆるやかな傾斜をもち、北から南へ低くなっている（6mいって20～25cm低くなる）。トレンチは溝3の西半分のほぼ中央部から、溝の掘り込み部（溝の肩）よりわずかに内側に入っているので、溝底部ならびに掘り込み部分を確認するには到らなかった。溝の傾斜は約57°の仰角（33°の伏角）をもっている。溝の時期を決定するような遺物は出土しなかった。（田中・島津）

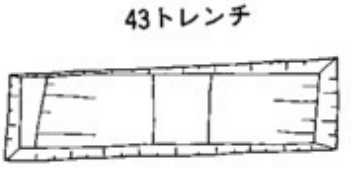


fig. 19　溝3平面図

32トレンチ　このトレンチは、溝3を東西に横断する形で設定された。溝のコーナーを検出した37トレンチから43.5m、同じく41トレンチから7.5mの位置にあたる。

このトレンチにおいては、12、22、31トレンチと同様に、溝3の走向方向と、コーナ部の確認ならびに、掘り込み部分と、溝内土層堆積の状況の観察を目的とした。

表土より、0.9～1.0mのⅣ層上面まで掘り下げた後、断面を観察しながら、転石が多く混入するⅥ層の中位まで掘り下げた。

この段階で、溝3の掘り込み部は、少なくとも、Ⅱ層中位より上位の面から始まることが予想された。

溝内を埋める土は、Ⅰa、Ⅰb、Ⅴa、Ⅴb、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ層の7層を数え、これらの堆積状況は22、31、35、43トレンチとほぼ同様である。

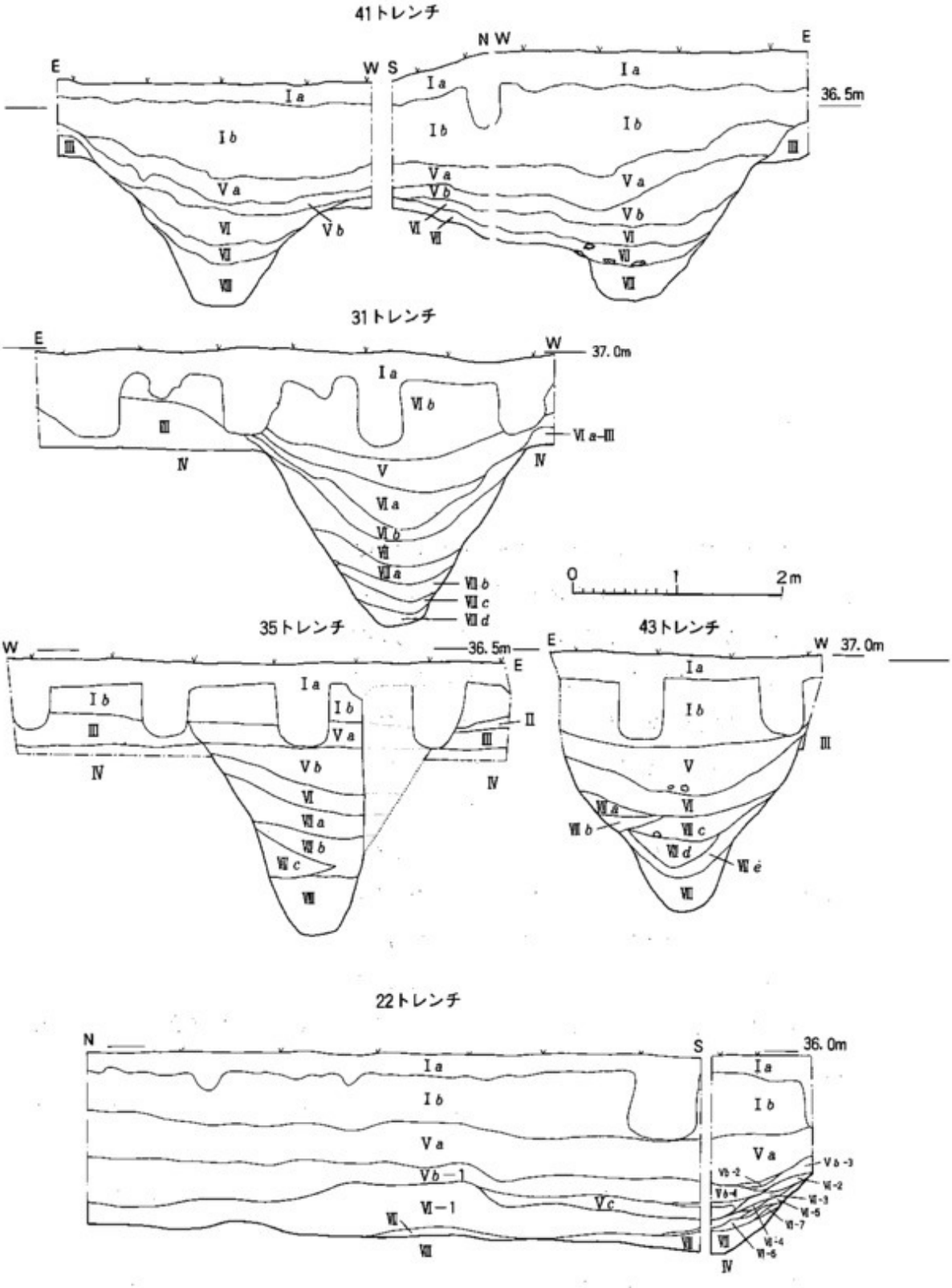

41トレンチ
E
W
S
N
W
E
36.5m
Ia
Ib
III
Va
Vb
VI
VII
VIII
31トレンチ
E
W
37.0m
Ia
VIb
III
VIa-III
IV
V
VIa
VIb
VII
VIIa
VIIb
VIIc
VIId
0
1
2m
35トレンチ
W
36.5m
E
Ia
Ib
III
Va
II
IV
Vb
VI
VIa
VIb
VIc
VII
43トレンチ
E
W
37.0m
Ia
Ib
III
V
VIIa
VI
VIIb
VIIc
VIId
VIIe
VII
22トレンチ
N
S
36.0m
Ia
Ib
Va
Vb-1
VI-1
Vc
VII
VIII
Vb-3
Vb-2
Vb-4
VI-2
VI-3
VI-5
VI-7
VI-4
VI-6
IV

fig. 20　溝3 断面図

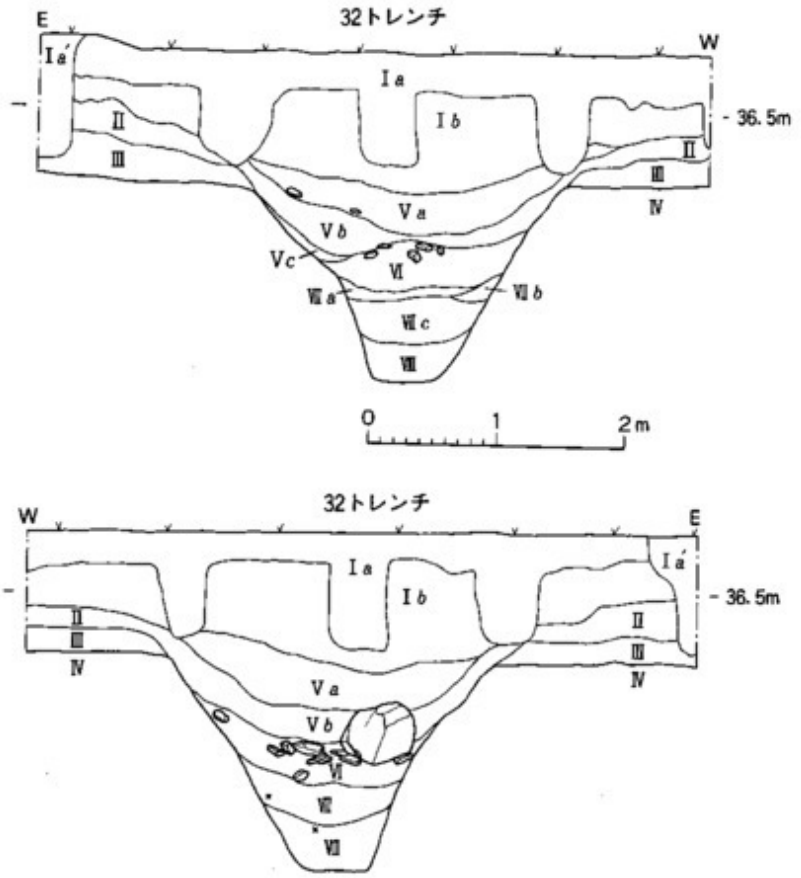


fig. 21　溝3断面図

Ia、Ib層は溝に関係なく全体的に堆積している。Va層は、溝のほとんどを覆う土層である。土質は、II層に若干似るが、軟質で、ふかふかした、土壌粒子の粗い暗褐色の土層である。Vb、Vc層は、Vaと同様な土色、ならびに土質を持つが、若干、粘性が高く、黄褐色のローム塊が混入する土層である。Vc層は特にそれが著しい。VI層は、溝3を検出したトレンチでは、共通してみられる層である。転石が多く混入する黒褐色の軟質でしまりのない土層である。転石は砂岩等の水成岩、凝灰岩がみられ、大きさは、拳大のものが多い。それらは敷きつめられたような状態であった。Vb層中位から、VIにかけて長径57cm、短径33＋αcm、厚さ45cmの凝灰岩の大石が北壁にかかって出土した。それは隅丸の立方形に近い形状を呈するもので、観察ができた二側面には、人為的打撃による大きな剥離痕がみられ、細かな打裂整形痕（整状工具によるものか）が残っている。先述の転石群と、この礫石状石製品は、同一時期に、溝中に埋められたものと思われる。このVI層には、土師器の小片と、青磁片とが出土している。VII層は、若干粘質のある暗褐色土層である。南壁では三枚の互層（Va、Vb、Vc層）に分けられる。全体的に均一性のない土層で、粘性にばらつきがみられ、また黄褐色ローム塊が点在する。VIII層は、溝の基底部を埋める土で、軟質の黄褐色ロームと、暗褐色土と

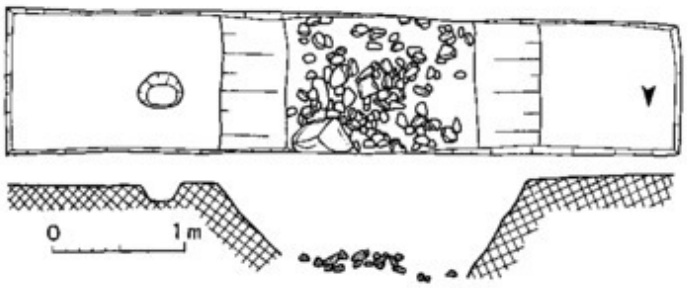


fig. 22　32トレンチ内の集石

が混入している土層である。この層の上位から中位にかけて、土師糸切り底片が出土した。この溝の上限年代を推定しうる性格のものである。

トレンチ北壁においては、Ⅱ層上面を基準にとると、溝３の掘り込み部の幅は2.90m、深さ1.89m、溝底幅0.46mを測る。溝底面の標高は34.4mである。

溝の東壁は、その中位置を境に、傾斜が二段となっている。壁のある程度の崩壊は考慮せねばならないが、溝の掘り込み部から、傾斜の変換点となっている面は溝掘削時の原面であり、溝の掘削時の状況を少なからず残しているものと思われる。溝壁面の傾斜は、西壁が仰角57°40′を測る。また東壁は、トレンチ北壁において、基底面から中位変換点までが仰角70°、それより上位面が、仰角50°を測る。トレンチ南壁においては、同様に、仰角70°強仰角56°を順次計る。

東壁と、西壁のなす角度は、最大値67°、最小値、55°、平均値、61°である。（田中・島津）

41トレンチ　コーナー部の確認と、溝３の時期ならびに、その性格の把握を目的として、溝の走向の推定延長線上に設定された。溝の南コーナーを検出した37トレンチからほぼ真北へ約51mの位置にあたる。溝３を埋める土は、Ⅰa、Ⅰb、Va、Vb、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ層の７層を数える。これらの各層の堆積状況は、溝３を検出した各トレンチとほぼ同様である。Ⅰa、Ⅰb層は溝に関係なく、全体的に堆積するⅠ層である。Ⅰb層の上位は、根が著しく多く、砂礫を含み撹乱を受けている。Va、Vb層は、溝を覆い若干溝外に拡がる土層である。トレンチ南壁ではゆるやかに西に向って上っており、トレンチ西壁、北壁に連続してみられる土層である。Va層より土師糸切り底片２、Vb層より土師底部（高台付）片１が出土している。Ⅵ層は、他のトレンチでは、転石を多く含んでいたが、ここでは確認されていない。この層からは、縄文後期土器片１、土師糸切り底片１が出土している。Ⅶ、Ⅷ層は、溝底部に堆積する土層である。Ⅶ層下位から、瓦質鉢形（こね鉢）土器底部破片、弥生高坏片1、土師糸切り底片２が出土している。

層は、全体的に、西南と、北東から、トレンチ中央に向ってゆるやかな傾斜をとって下りつつ堆積している。

溝東壁は、トレンチ南壁から、北壁にかけては、32トレンチ等で確認されたと同様に平均60°内外の伏角をもって続き、さらに北へ若干延びている。溝西壁は、この地点では、他のトレンチの場合とは異なり、かなりゆるやかな立上りとなって西南へ延びている。またこの地点においては、ほぼ平行を保ち続け対峙していた溝東西壁は北へ向って若干ひらいており、西壁はゆるやかなカーブを描きつつ溝南壁へ連なっている。

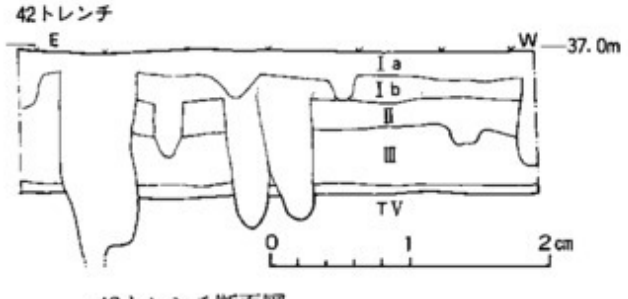
コーナー内側壁にあたる溝南西壁は、トレンチ両壁で観察されるVa層からⅦ層までの堆積状況からみて、溝底面よりゆるやかに立上りつつ、西南へ延長されることがわかる。ただし、これら両壁の掘り込み部は、未確認であり、その形状と、掘り込みの層的関係については、不明である。

溝の南北両壁の形状については、トレンチ北壁が、溝屈曲部の底部中央より若干南寄りにずれた箇所で、溝南壁の下場を縦断しているため、明確にしえなかった。

この地点の真北にあたる42トレンチにおいては、溝3は確認されなかった。先述した溝の東西南壁の諸状況をも加味して判断すると、溝3は、この43トレンチにおいて、断面「V」字を呈しながら、ほぼ直角に、南北から東西方向へ屈曲し、さらに西へ延長されるものと考えられる。ただし、西隣りの44トレンチにおいては撹乱が深く及んでおり、溝は確認されていない。

（田中・島津）

42トレンチ　41トレンチの北約5mのところに位置し、東西約3m50cm南北約1mを測る。同トレンチは、溝3の範囲確認のためのものであったが、溝は確認できなかった（のちに第41トレンチで北側のコーナー部分が検出されることになる）。ただ南側断面に、Ib層よりの掘り込み1個、Ⅱ層上面或はIb層よりの掘り込み3個を確認した。Ib層よりの掘り込みと思われるものは、確認できる範囲で幅約50cm深さ約150cm（推定）を測る掘立柱様のものであり、第45トレンチで確認した掘立柱と何らかの関連をもつかもしれない。Ⅱ層上面或はIb層よりの掘り込みと思われるものが3個あり内2個は複合しているが西側の掘り込みが新しいことが確認できた。層位は、黄褐色ローム層までIa、Ib、Ⅱ、Ⅲの4層よりなる。Ia層は耕作土であり樹根をかなり含む。一部では耕作のためⅢ層まで掘り込んでいるものもある。Ib層は、暗褐色層でやや樹根を含む。Ⅱ



42トレンチ断面図

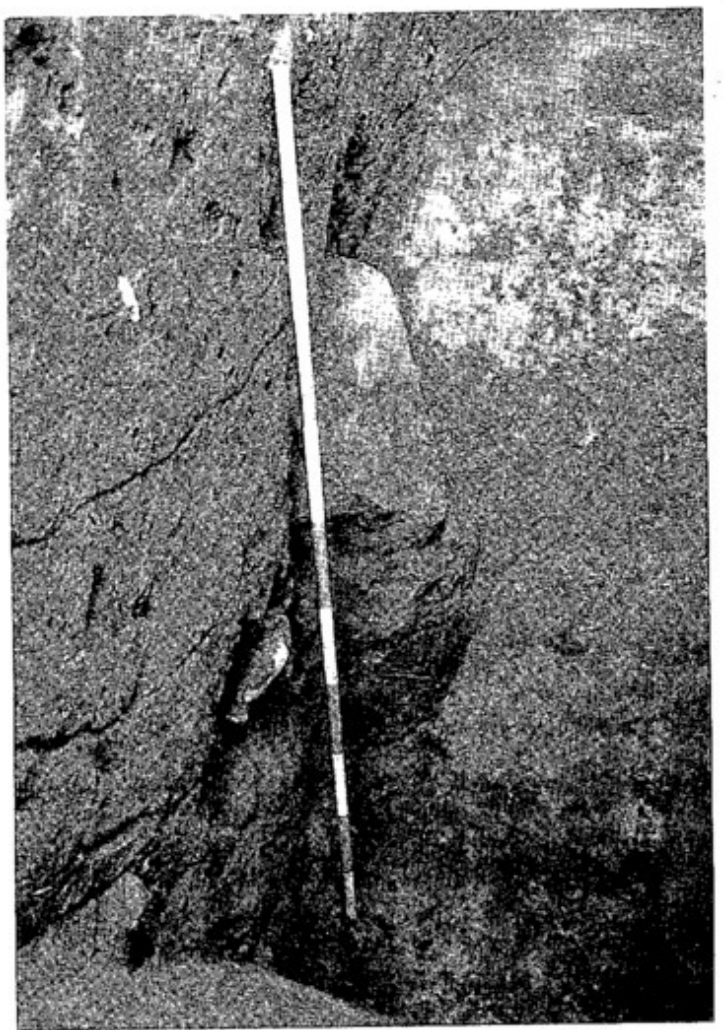
層は、黒褐色土層でありやや樹根を含む。Ⅲ層は、暗褐色土層であり灰褐色土壌がブロック状にはいる。Ⅳ層（地山）は、黄褐色ローム層である。出土遺物は、Ⅰa、Ⅰb、Ⅱの3層を含む層から、弥生土器の甕脚台部1片と土師器のカメ胴部片1片を検出したのみであった。また遺構については、その掘り込み状態からいずれも柱穴の可能性が強い。　（清田・島津）

43トレンチ　41トレンチと32トレンチのほぼ中間地点に位置し、東西約2m、南北約1mを測る。同トレンチは、溝3の範囲確認のためのものであり、基本層序は、次のとおりである。Ⅰa層は耕作土であり、樹根が多い。中には耕作のため表土下80cmの地点まで掘り込んでいるものもある。Ⅰb層は暗褐色で黄色粘土粒を含む。Ⅲ層は暗褐色土で暗褐色土壌を含む。この3層よりなりⅡ層は欠落する。このトレンチは、溝3の範囲内に含まれると思われる。溝はⅡ層或はⅠb層からの掘り込みが考えられる。確認できる範囲で上部幅約2.4m深さ約1.8mを測る。形状は、遺構内へ最上層から湾曲して底部にいたり、底部は砲弾形を呈する。遺構内の層序は、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷの4層に大別され、Ⅶ層にかぎっては、5層に細分される。Ⅴ層は、暗褐色土で黄色粘土粒を含む層であり、この層を含めⅠa—Ⅴ層より縄文後期土器片4片と土師器片9片、須恵器片1片を検出した。Ⅵ層は、暗褐色土でわずかに暗褐色土壌を含む。同層以下からの出土遺物は少数で、縄文土器1片、土師器4片の5片のみであったが、その層位については確認できなかった。Ⅶ層は、前述の通り5層に細分されてⅦa層—暗褐色土で黒色土がまだらにはいる。Ⅶb層—黄褐色及び暗褐色の混合土である。Ⅶc層—暗褐色土で土壌がブロック状にはいる。Ⅶd層—Ⅲ層に類似するが、土壌がはいらない。Ⅶe層—暗褐色土であり黄色粘土粒を含む。この粘土粒はⅠb層よりきめがこまかい。Ⅶ層は、黒色性土壌及び黄色性土壌がブロック状にはいる。底面は黄褐色粘土層で2～5cmの小円礫を含む。また同トレンチでは、第32トレンチなどでみられるような集石はみられなかった。　（清田・島津）

35トレンチ　12トレンチより南西へ約13.5m、13トレンチより南東へ約10mの地点に位置する。トレンチの西から約3.5mの地点に水道管が通っており、南北約1m、東西約0.5mにわたっては発掘出来なかった。このトレンチは、溝3確認のためのものであり、溝の延長を確認した。基本層序は、黄褐色ロームまでⅠa、Ⅰb、Ⅱ、Ⅲの4層よりなり、西側ではⅡ層が欠落する。Ⅰa層は耕作土であり樹根が多い。中には耕作のためⅢ層或いは遺構内Va層まで掘り込んでいるものもある。Ⅰb層は暗褐色土で樹根はほとんど入らない。Ⅱ層は黒褐色土である。Ⅲ層は暗茶褐色土で暗褐色土壌が混入する。遺物は、Ⅰa、Ⅰb、Ⅱ層及び遺構内のVa層まで縄文土器が多数をしめ、弥生土器1片、土師器2片、須恵器1片を出土した。溝は、2層或いはⅠb層より掘り込まれていると思われ、確認できる範囲で上部幅約2.6m、深さ約2mを測る。溝の形状は、中位から上部にかけてラッパ状に開き、中位以下は砲弾形を呈する。

遺構内の層序は、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷの4層に大別され、Ⅴ層及びⅦ層はさらに細分される。

Ⅴ層はⅤa・Ⅴbの2層に細分される。Ⅴa層は黒褐色で小円礫を含む。Ⅴb層は暗褐色土で黄色粘土壌及び粘土粒を含む。遺物は、Ⅴa層については前述した通りであり、Ⅴb層は、土器は含まないが、32トレンチ或は22トレンチにみられるような集石が確認された。ただし32トレンチのようにしっかりしたものではない。Ⅵ層は、暗褐色土でやや黄色粘土壌が混じる。遺物は、縄文後期土器片1片のみである。Ⅶ層は、Ⅶa・Ⅶb・Ⅶcの3層に細分される。Ⅶa層は暗褐色土で、やや粘土粒を含み、Ⅴb層或はⅣ層より暗い。Ⅶb層は黒褐色土で、黒色土がまだらにはいる。Ⅶc層はⅦa層に似ておりやや黄色の粘土粒を含む。遺物は、Ⅶa層より土師器3片・須恵器1片、Ⅶb層より、縄文後期土器1片・土師器1片・須恵器1片・Ⅶc層より縄文後期土器片1を出土した。Ⅷ層は暗赤褐色土で、径3㎜の粘土粒がブロック状にはいる。遺物の出土はない。地山は、黄褐色の粘土層で径3～5㎝の礫を含む。　（清田・島津）



32トレンチ(溝3）内の石の状態

v　溝 4 (fig.23・24)

38・39・40トレンチ　溝3の延長具合を調べるため40トレンチを設定した。トレンチの対角線の南側に溝4が検出された。溝の東西の状態を調べるため38、39トレンチを設定した。それぞれのトレンチに溝4の延長部分が見られた。溝の断面形は逆台形をなすが、39トレンチでは溝底の北側がやや深い。溝の上面幅は1～1.2m、溝端から底まで約90cmを測る。各トレンチの溝底に拳大の石が数個見られた。溝はⅠ層から切り込んでいてⅣ層に達している。溝に伴う遺物は出土しなかった。39トレンチの1番北側に溝3の南端が見られた。

（豊崎）

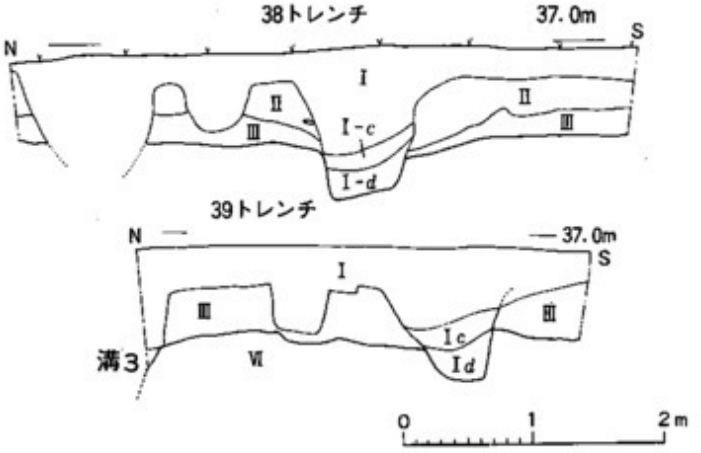


fig. 23　溝4断面図

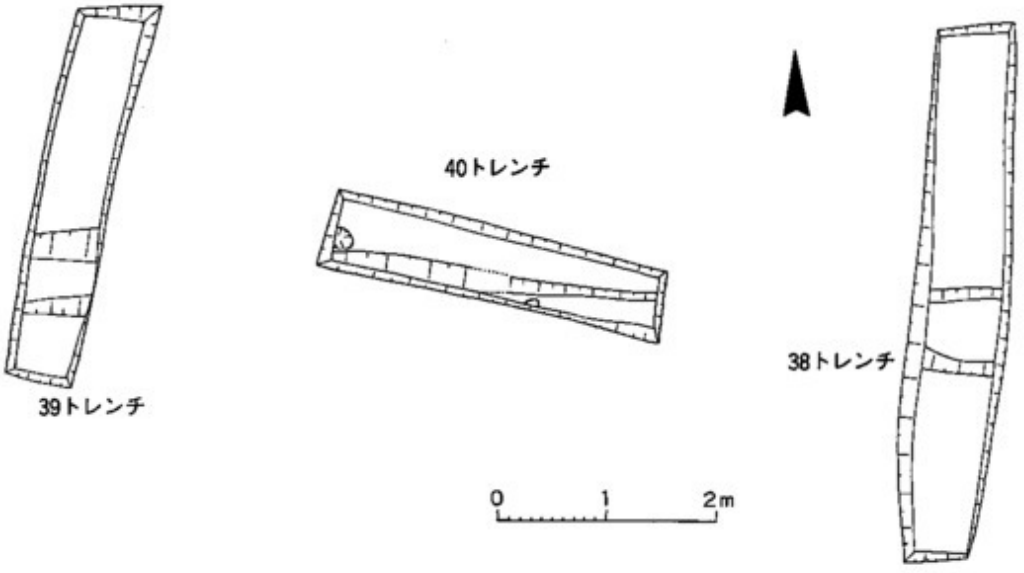


fig. 24　溝4平面図

vi 溝 5 (fig.25)

24トレンチ　トレンチの中央に東南から西北に延びる溝5を検出した。トレンチの中央部にパイプが通っていて未掘。溝は、二段に掘り込んでいる。上端の幅4.65*m*でゆるやか落ち下方の溝幅2.1*m*を測る。下端では斜めに直線状に掘り込まれている。溝底は平。上端から溝底まで1.1 *m*、溝底幅1.25*m*を測る。溝内の堆積土は5～10層で5枚を数える。　（島津）

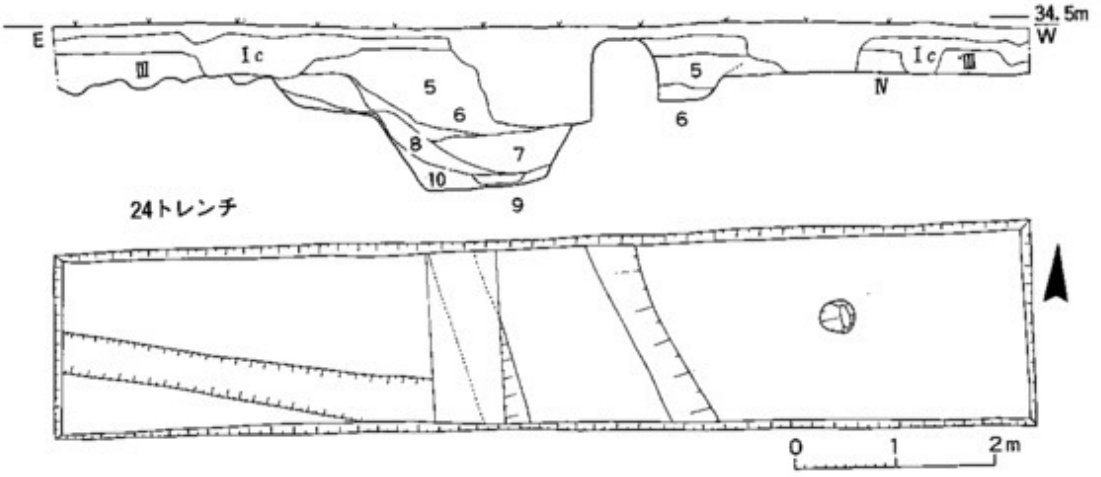
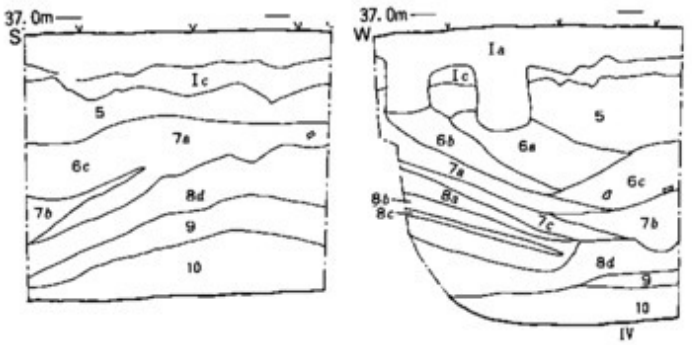


fig. 25　溝5 平面図・断面図



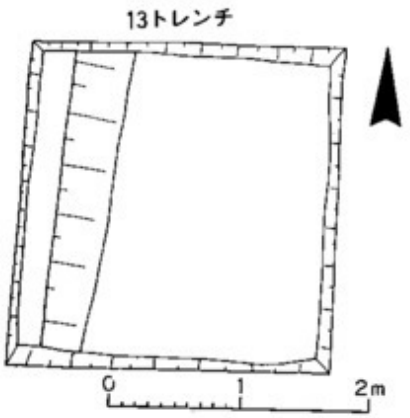


fig. 26　溝状遺構平面図・断面図

24トレンチの土層 (fig.25)

5　明褐色土
6　5層と似るが、色調やや暗く、粘性も弱い
7　褐色土（黄色粘土塊を含む。炭化物がみられる）
8　明褐色土
9　褐色土
10　暗褐色土

13トレンチの土層 (fig.26)

5　黄褐色土層（親指大の黄色粘土がブロック状に入る）
6a　黒色土層（わずかに黄色粘土層、小円礫を含む）
6b　黄色粘土層（小円礫を含む）
6c　5層よりやや黄色が強く、粘土塊が大きい
7a、7b　黒色土（黄色粘土塊を含む）
8a、8b　黒色土（7層と似るが密）
8d　6c層と同じ
9　黒色土と黄色粘土が均一に混合している層
10　黄色粘土層

vii 溝状遺構 (fig. 26・27)

13トレンチ　22トレンチより南西へ約13m、35トレンチより北西へ約14mの地点に位置する。溝状遺構の西の落ちこみ面を調査した。遺構は南断面の土層の堆積状態からすれば、推定幅2.6mを測る。深さは上端から約1.8m、溝底は平で、全体U字形をなす。東断面は、北から南にかけて順々に低くなっている。遺構はⅣ層を大きく切り込んでいるが、表層から、溝底まで6層に大別出来、さらに、それぞれ薄い互層がみられる。西天神原の基本層位であるⅠb層は欠落する。Ⅰa層は耕作土で褐色を呈し樹根を含む。Ⅱ層は黒褐色土でほとんど樹根を含まない。遺構内の土層は堆積状態が不規則で、Ⅱ層形成の時期に何らかの撹乱を受けたとみられる。地山のⅣ層は、遺構の切り込み面では、通有の黄色ローム状土であるが、遺構の底部分では、径2～5㎝の角礫を多く含む。遺物はⅠ層では、土師器、縄文土器片、6、7層からは弥生土器、縄文土器、10層からは縄文土器、打製石斧が出土した。　（清田）

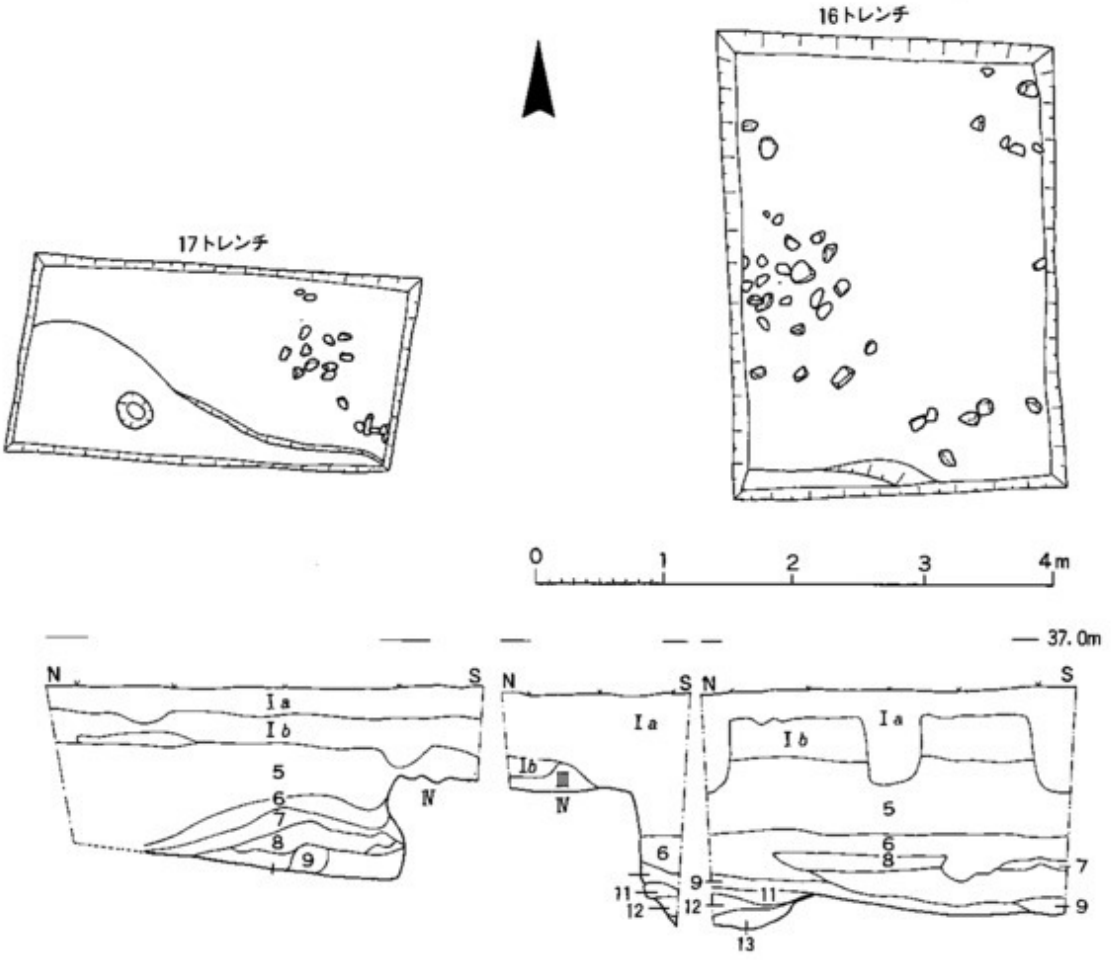


fig. 27　溝状遺構平面図・断面図

16・17トレンチ　両トレンチの南側に縁をもち、東西に延びる。溝状遺構で、一連のものだとみられる。縁から、まっすぐに底面に至るが、16トレンチでは逆に、壁内側に掘り込まれオーバー・ハング気味になる部分もみられる。底面は平である。遺構内の落ち込み土は5～9枚を数える。17トレンチの西側壁の観察によるとⅡ層が欠落する。遺構の中位層に、拳から人頭大の礫が散乱している。ちょうど6層の上面にあたる。　（清田）

30トレンチの遺物出土状態

viii　集 石 1 (fig.28・29)

27・28トレンチ　全体の形を明らかにし得ないが、両トレンチの間にある蜜柑樹の植付時には礫群が存在することを土地所有者が確認していることから推定すれば、27、28トレンチの礫群は一連のものと見ることができよう。これを復原すれば、この集石は、直径5 m前後の楕円形をなすとみられる。27トレンチの集石は蜜柑植付時に掘り返したという事であったので、礫の上面を露出させたのみで、下面の調査はおこなっていない。

28トレンチでは、土壙の南側は二段の掘り込みになっており、深さは一段目で約20cm、二段目で約40cmを測る。土壙底は平である。礫群は土壙の上面から見られ、黄褐色土を挟み上下2段に分れていて、拳から人頭大の円礫が雑然と並んでいる。上段のものは南から北にかけて数が多くなり厚みを増す。下段は土壙南側の壁部分が一番厚く北に向って薄くなる。上下の礫の間には粘性の弱い黒褐色が混じる。礫にまじって須恵器、磁器、甕棺などの破片が出土した。

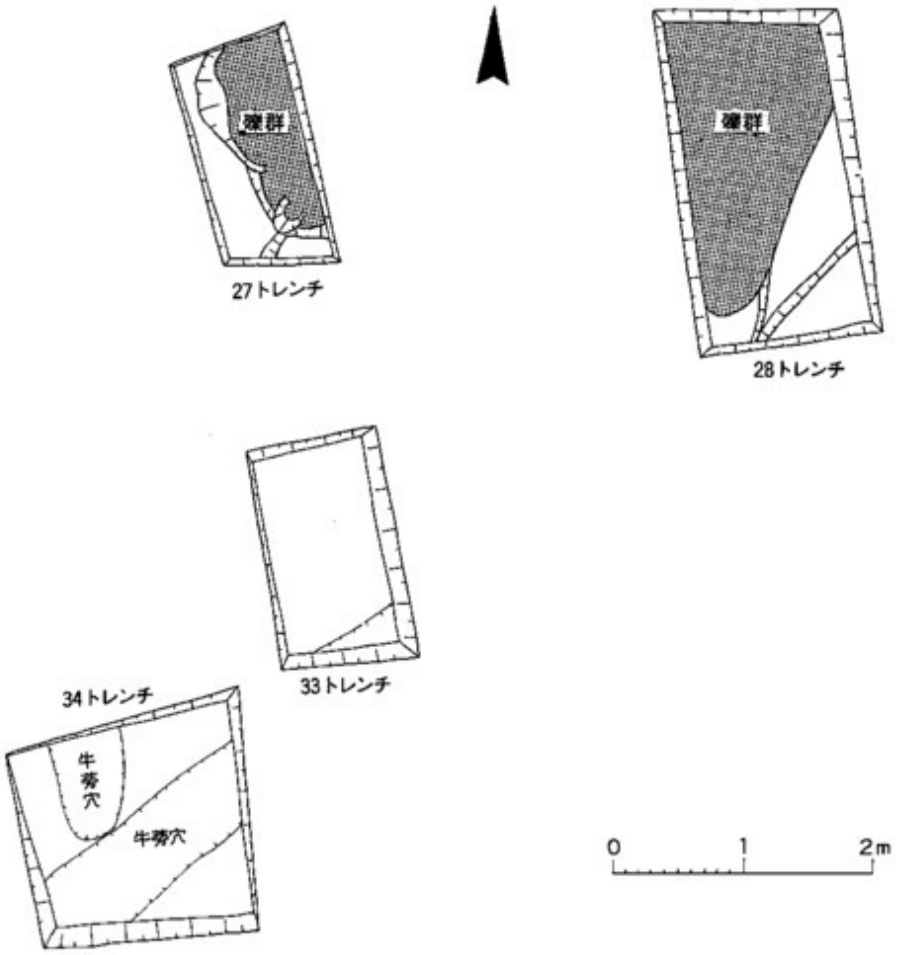
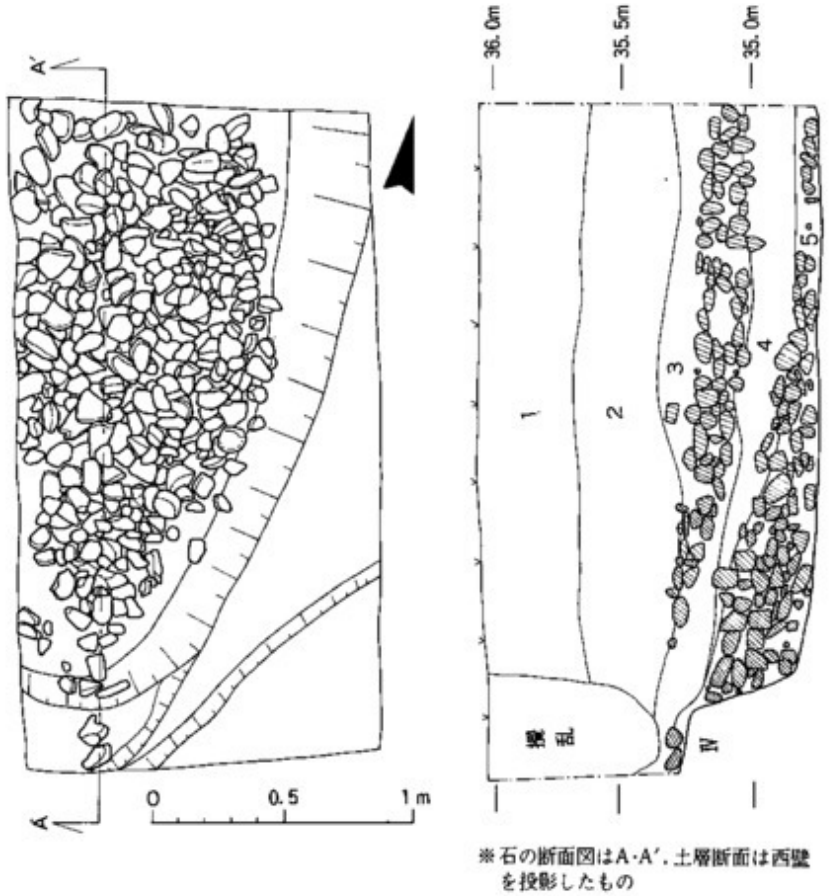


fig. 28　集石1 平面図

(中山・島津)

viiii　集 石 2 (fig.30)

14トレンチ　トレンチの南側に検出された集石で10～30cmの礫が約50個みられる。石の範囲は70cm四方で、石の並び方に規則は見られないが、2～3段に重なった部分がある。石を除く



※石の断面図はA-A'．土層断面は西壁を投影したもの

fig. 29　集石１平面図・断面図（28トレンチ）

とその下に径80㎝の方形で深さ約５㎝の浅い掘り込みがある。底は平でなく凹凸がみられる。南および東側は未掘。礫の中から土師質土器の底部が出土した。また、集石の西方には、長径60㎝、短径30㎝、深さ70㎝のピットがある。ピットの上から須恵器の高台部分が出土した。　（中山）

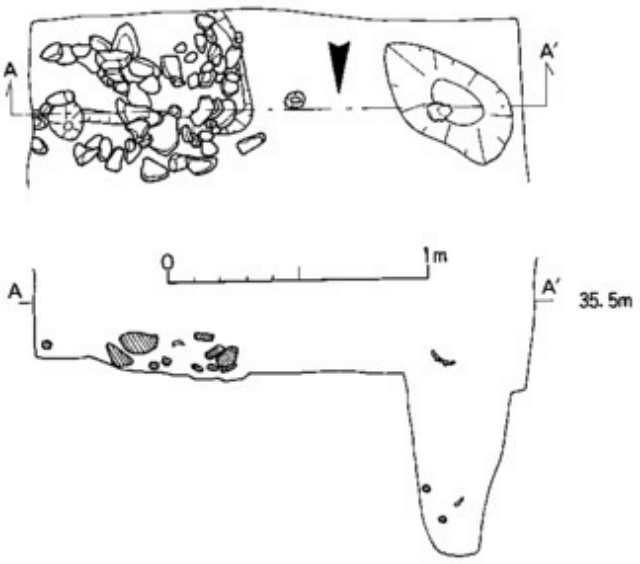


fig. 30　集石２平面図・断面図(14トレンチ)

28トレンチの土層（fig.29）

1　褐色土層（耕作土　樹根多し小石混入）
2　褐色土層（1層よりやや明るい黄色粘土塊混入）
3　黒褐色土層礫層（礫間にも黒褐色土が挟まる、粘性弱い）
4　黄褐色土（2層より多量に黄褐色粘土層が混じる粘性強）
5　黒褐色土層・礫層

x 小ピット群 (fig. 31・32 Tab. 4)

4トレンチ 蜜柑植付時に鹹水産の貝類の出土を見たという耕作者の教示に従いトレンチを設定した。Ⅱ層の下位から少量の貝類の出土があった。貝の分布の中心は、これよりやや東側に在ったらしいが、蜜柑の下になってすでに撹乱し、散乱しているようにみうけられる。小範囲に多くのピットを検出した。（島津）

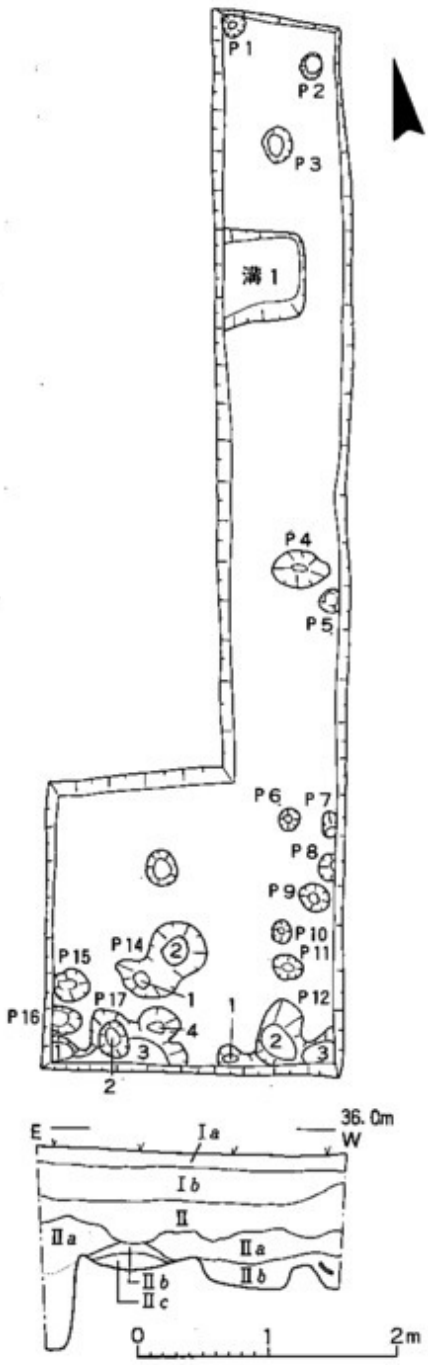


fig. 31 溝1の西限とピット群(20トレンチ)

5トレンチ 4トレンチの南側にあたり、多数のピットを検出した。縄文土器を出土したピットも幾つかある。4トレンチのピット群と関連あるものとみられるが、ピットの配列等を明らかにし得ない。（島津）

7・11トレンチ 4・5トレンチに比してピットの分布密度が低くなる。

以上のピットは、ピットを掘り込んだ層がⅡ層およびⅢ層であり、ピット内の埋土が、同じ黒色土であるので、切り込み面を正確に把握することができなかった。Tab. 4はⅢ層下面およびⅣ層上面において確認したピットの計測値を表記しているので、実際のものより若干少ない値を示している。（中山・島津）

4 トレンチ （単位cm）

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1 1			49		7	30	24	5	
1 2			45		8	33	28	44	
2	30	29	63		9	23	15	50	
3	13	9	33		10	53.5	13.5	16	
4	39	38	47		11	28	26	40	
5	23	22	31		12	66	40	32	
6	33	30.5	75		13	58	24	67	

5 トレンチ （単位cm）

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1	32	18	24		15	22	11	46	
2	24	22	12		16	45	23.5	39	
3	21.5	18.5			17	37	26.5	38	
4	23	21	22		18	9	8.5	3	
5	55.5	36.5	32		19	23	22.5	25	
6 1			64		20	22.5	19.5	34	
6 2			67		21	17	15.5	11	
7	60	34	39		22	26	25	31	
8	26	17.5	19		23	41	34	35	
9	32	31	42		24	62	35	46	
10	42	30	6		25	54	42.5	5	
11	19	15	29		26	26.5	21	23	
12	33	24.5	29		27	37.5	30.5	45	
13	14	10			28	49.5	48	69	
14	18	18	37						

7 トレンチ （単位cm）

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1	31	11	39		8	34	24.5	55	
2	41	33.5	41		9	59	28	50	
3	29.5	29	30		10	20	9.5	36	
4					11	44	26	51	
5	11	10.5			12	35	28.5	55	
6	43.5	36.5	22		13	41.5	33.5	37	
7	24	23	13						

11 トレンチ （単位cm）

ピットNo.	長	短	深	備考	ピットNo.	長	短	深	備考
1	42	35	85		4	51	29	73	
2	39	33	59		5	27	20	48	
3	23	20	40		6	40	28	47	

Tab. 4 ピット計測表

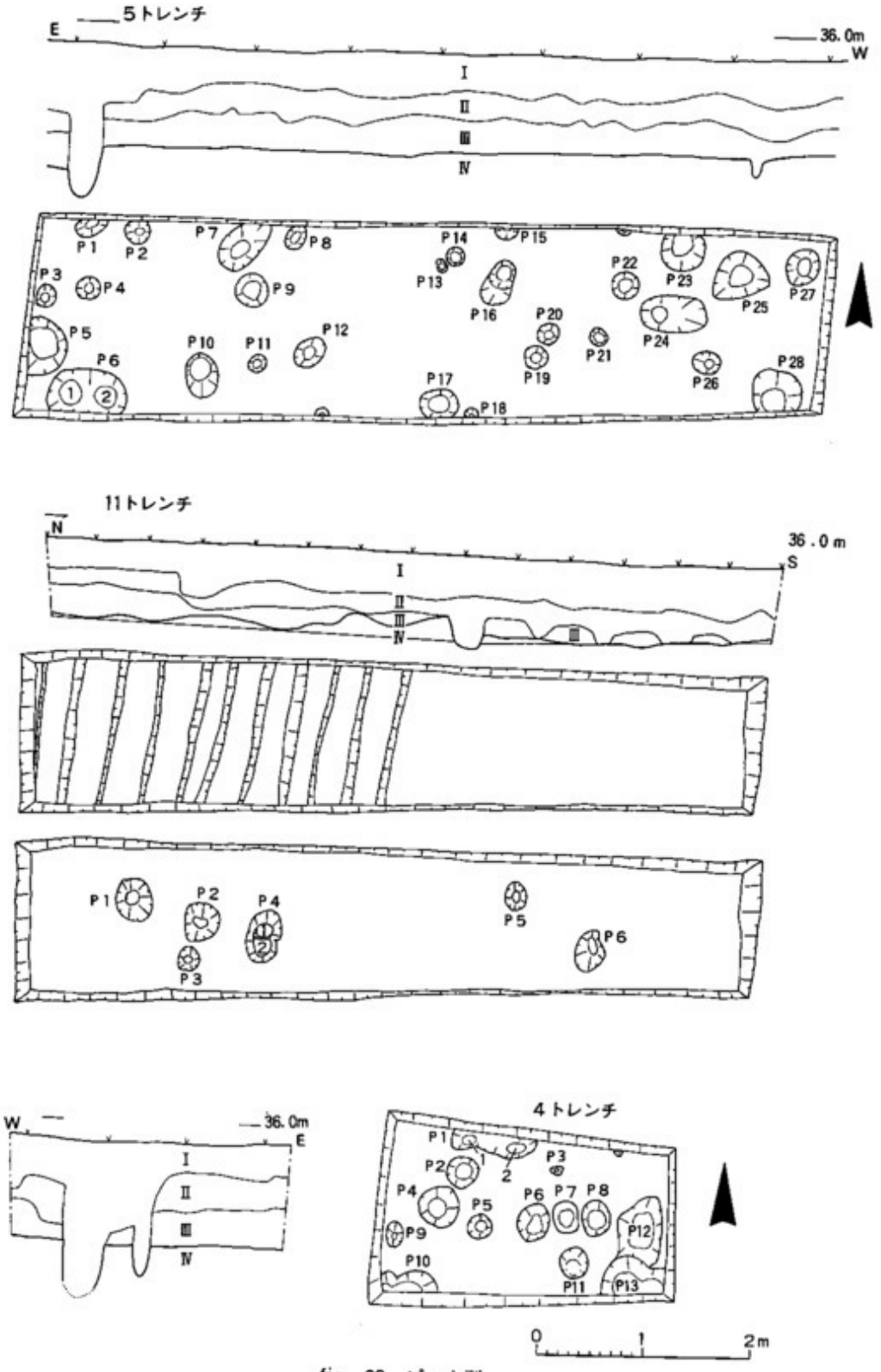

5トレンチ
E
W
36.0m
I
II
III
IV
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
11トレンチ
N
S
36.0m
I
II
III
IV
P1
P2
P3
P4
P5
P6
W
E
36.0m
I
II
III
IV
4トレンチ
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
1
2
0
1
2m

fig. 32 ピット群

xi 礎石状石製品

2トレンチ　土地所有者の教示に従ってトレンチを設定した。この礎石状石製品は既に昭和32年の松本雅明氏の調査で発見されて紹介されているものであるが土壙等の確認、および礎石状石製品の下底面の状態を調査するため再調査した。礎石状石製品の上面は現地表から40㎝下にあり、大略Ⅱ層の高さと一致し、下底面は、Ⅳ層に達する。石を据える四辺形の土壙がみられ、土壙を確認したⅣ層上面で、南北75～90㎝、東西約90㎝を測る。石を移動させて、土壙の中を調査したが直接石が据えられており何らの遺構、遺物は見られなかった。石の上面は水平をなす。石は短辺を正しく南北方向に合わせている。　（島津・豊崎）

xii 遺構を検出しなかったトレンチ

1トレンチ　神社の南側、境内の空地に設定した。地山までの全層が撹乱、移動している。地山も、西端の約50㎝を除いて東側は大幅削平されている。東端で地山まで約60㎝を測る。地山は南から、北に向って順次低くなっているが、これは天満宮再建時の人工的な整地と考えられる。昭和の初期まで、老松がこの地にあったと伝え、松老の破片が多くみられた。表土から地山の間に、須恵器、瓦、陶磁器、コンクリート片などが多く出土した。　（中山）

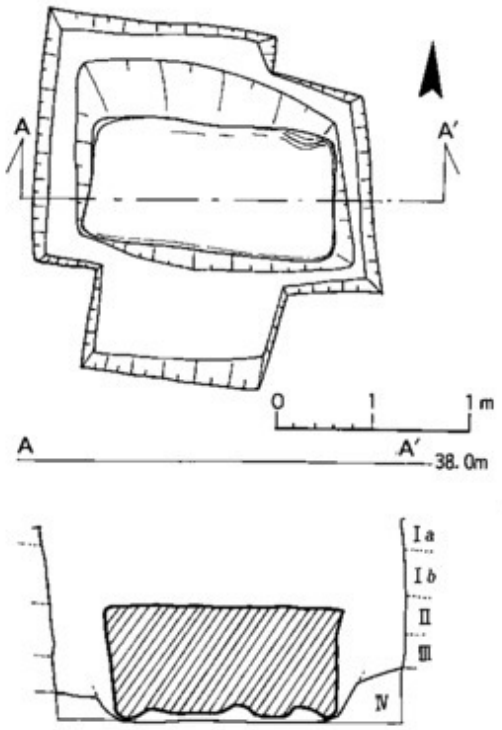


fig. 33　礎石状石製品出土状態

3トレンチ　神社の北側に設定した。東から西南に向って順次低くなっている。人工的な掘削と認められる。全層に撹乱がみられる。1トレンチに比して出土量は少なかったが、同様の種類の遺物が出土した。

9トレンチ　礎石を検出するため、土地所有者の教示により設定した。土層は地山まで達する撹乱がみられるが、これは誘導路を築くとき削平された為とみられる。遺物の出土と遺物の発見はなかった。（中山）

25・26トレンチ　調査区の最西端にあたり、天満宮より西南へ直線距離にして約150*m*ほどに位置する。ほぼ東西方向に沿ってその長軸を設定し、東西4.08*m*、南北

2.07mを測る。

25トレンチはⅡ層上面まで掘り下げた後、土層観察のため南壁に沿って幅70cmの試掘壙をあけた。Ⅳ層上面まで掘り下げたが遺物遺構は検出されなかった。層序は、地山（第Ⅳ層）まで4層を数える。Ⅰ層は表土層で、暗褐色の撹乱腐植土層である。現代の陶磁器片、弥生、土師等の土器片の出土をみる。Ⅱa層は黒褐色の腐植土層で、幾分粘性があるものの全体的にやや軟質の土層である。撹乱は、部分的にこのⅡa層の上位面にまで及んでいる。なおこの層の上位面から中位にかけて、縄文後期土器片、弥生終末期ないし土師器片等が出土している。それらはトレンチ中央のやや南寄りにかけて、東西に1.20m、南北に1.10mの範囲でまたレベルにして20cm内外の高低差をもって比較的集中的な出土状況を示して検出された。ただし、撹乱を受けておりⅡa層に確実に伴なったものではなかった。この層においては遺構は検出されなかった。Ⅱb層はⅡa層より幾分しまりがあり細砂を若干含む黒褐色土層である。Ⅲ層は下位の黄褐色ローム層の漸移腐植部にあたり、暗褐色を呈す粘性の高い土層である。土壌硬質部がブロック状にみられる特徴をもつ。Ⅱb層、ならびにⅢ層からは遺物、遺構は検出されなかった。なお土層は全体的に北東から西南へゆるやかな傾斜をもって低くなっている。

26トレンチには、遺構は認められなかったが、各層の状態は25トレンチと同様である。遺物は、縄文土器の小破片が約25片、弥生土器2片出土した。（田中）

---

fig. 34の出土場所

1　20トレンチ（ピット12）	2　30トレンチ（Ⅲ層）	3　30トレンチ（Ⅲ層）
4　30トレンチ（Ⅲ層）	5　30トレンチ（Ⅲ層）	6　30トレンチ（Ⅲ層）
7　8トレンチ	8　30トレンチ（Ⅲ層）	9　29トレンチ（Ⅲ層）
10　26トレンチ	11　30トレンチ（Ⅲ層）	12　30トレンチ（Ⅲ層）

G 出 土 遺 物

i 縄 文 土 器 (fig. 34・35, Tab. 5)

発掘調査区のほとんどの区から出土した。とくに多くみられるのは、調査地の西側29、30トレンチと東側の5、7、11、20トレンチおよび2、13トレンチである。出土層位はⅠ～Ⅲ層におよぶが、元来縄文期の生活層は、Ⅲ層であり、Ⅰ・Ⅱ層にみられるものは、撹乱等による移動の結果ではないかと考えられる。縄文土器の時期は、早期、前期、中期、後期、晩期のものが見られるが、主体をなすものは、後期、御領式土器である。主要なものを拓本で示した。

fig.34の1～3は条痕文土器で、1、2は口唇部に刻目をもつ。1、2は裏表黒褐色、3は赤褐色。以上は轟式とみられる。4はアナダラ属の殻頂部の圧痕をもつ。赤褐色を呈す。5～10、12は縄文をもつ土器群。10は裏表に縄文をもつ。5が黒色土である外、褐色～赤褐色を呈す。共通して薄手。11、12は脚部。ともに先端部には平な面をもつ。11は表面褐色、内は黒色。12は、上半には縄文がみられる。赤褐色で、もろい。5～12は船元式とみられる。

fig.35には後・晩期の土器を掲げる。出土した器種の内訳はTab.5に示した。1は3条の沈

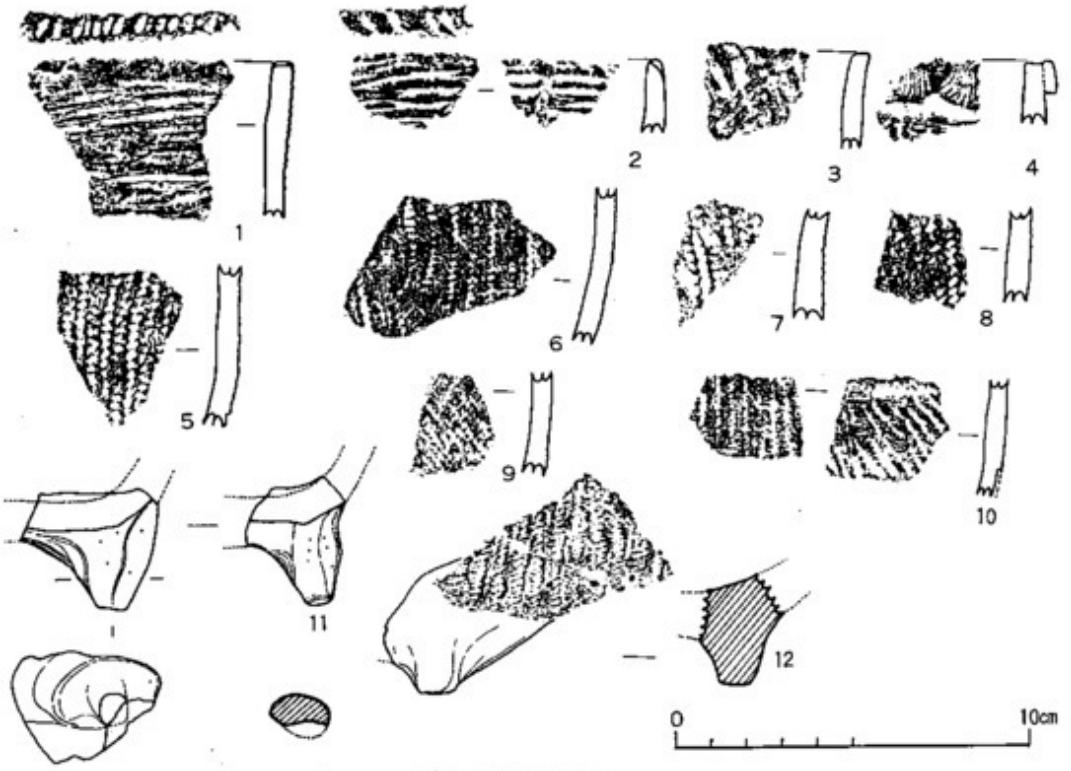


fig. 34 縄文土器実測図(1)

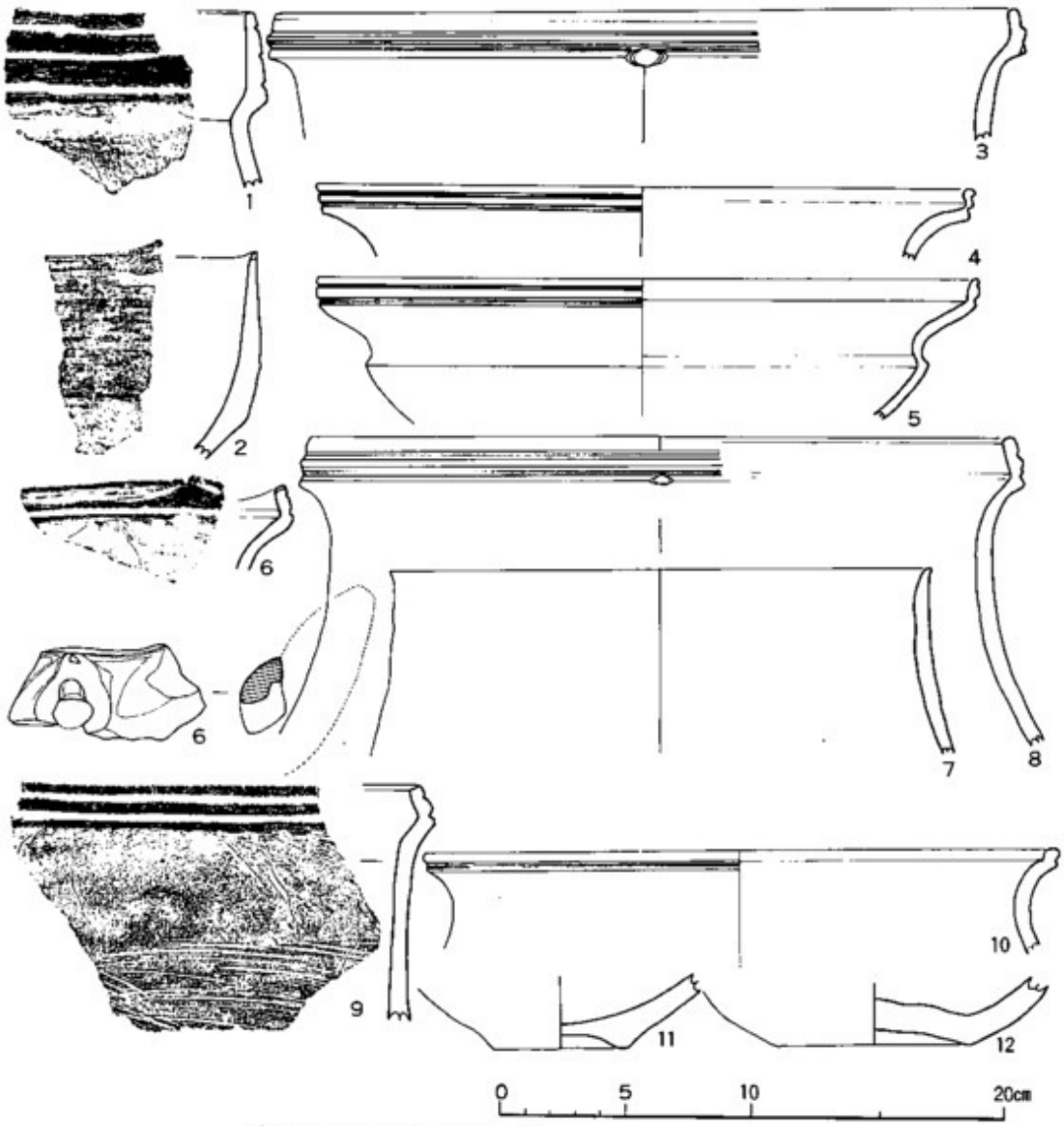


fig. 35 縄文土器実測図(2)

線をもつ深鉢形土器、3、7、8、9、10も深鉢形土器であるが、口縁に凹線文をもつもの、素文のものなどがある。口縁の凹線は、むしろ押線気味で二条を基本とする。4、5、6は浅鉢形土器。2は、口縁部に小突起をもち、胴部から底部にかけて湾曲して底に続く。6は、注口土器の体部で、注口部を欠失する。11、12は底部、いずれもあげ底を呈す。1、2は晩期で黒川式並行期。3～12は御領式土器である。 (清田・島津)

---

fig. 35の出土場所

1 15トレンチ(II層)	2 15トレンチ(II層)	3 29トレンチ(III層)
4 29トレンチ(III層)	5 30トレンチ(III層)	6 29トレンチ(III層上面)
7 30トレンチ(III層)	8 29トレンチ(III層上面)	9 29トレンチ(III層)
10 30トレンチ(III層)	11 29トレンチ(III層)	12 29トレンチ(III層)

Tab. 5　　縄文土器出土一覧表

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
2.	深鉢	口縁部	2	Ⅲ	
	浅鉢	口縁部	4	〃	
		頸部	4	〃	
	不明	胴部	20	〃	
3.	浅鉢	口縁部	1	表土	
4.	深鉢	胴部片	3	表土	
	深鉢	頸部片	3	Ⅱ	
		胴部片	4	〃	
	浅鉢	頸部片	2	〃	
		胴部片	1	〃	
	不明	胴部片	2	〃	
	深鉢	口縁部片	1	Ⅲ	
		胴部片	2	〃	
5.	深鉢	胴部片	5	表土	深鉢に貝殻条痕をほどこすもの1片
	浅鉢	頸部片	1	〃	
	不明	胴部片	3	〃	
	深鉢	胴部片	2	Ⅱ	深鉢に貝殻条痕をほどこすもの1片
	浅鉢	胴部片	1	〃	
	浅鉢	口縁部片	1	Ⅲ	
	不明	胴部片	2	〃	
	深鉢	胴部片	1		
	浅鉢	胴部片	1	Ⅰ	
	深鉢	胴部片	1	Ⅱ	
	浅鉢	胴部片	1	〃	
	不明	胴部片	3	〃	
	不明	胴部片	1	Ⅲ	
	浅鉢	口縁部	1	Ⅵ	
	深鉢	胴部片	1	〃	
	不明	頸部片	1		
		胴部片	1		
7.	深鉢	胴部片	2	表土	貝殻条痕をほどこしている
	深鉢	胴部片	2	ピット	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
7.	不明	胴部片	2	ピット	
	深鉢	胴部片	6		深鉢貝殻条痕をほどこしている
	浅鉢	胴部片	2		
	不明	胴部片	5		
8.	浅鉢	胴部片	1	Ⅰ	
	不明	胴部片	1	Ⅱ	
	深鉢	胴部片	5		
	浅鉢	胴部片	1		縄文をほどこしたものが1片含まれている
	深鉢	胴部片	1		
	不明	胴部片	1	ピット	
9.	深鉢	胴部	1	Ⅱ	
	不明	胴部	1	〃	
10.	深鉢	胴部片	2	住居址	貝殻条痕をほどこすもの1片
	深鉢	底部片	1	〃	
11.	深鉢	胴部片	4	表土	
	浅鉢	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	5	〃	
	深鉢	口縁部片	1	Ⅱ	
	浅鉢	口縁部片	1	〃	
		胴部片	3	〃	
	不明	胴部片	8	〃	
	深鉢	口縁部片	1	ピット	
		胴部片	6		
	浅鉢	口縁部片	1		
		胴部片	2		
	不明	胴部片	10		
12.	不明	胴部片	1	表土～Ⅰ・Ⅱ	
	深鉢	胴部片	3	溝内	
	浅鉢	頸部片	1	〃	
	不明	胴部片	3	〃	
13.	深鉢	胴部片	4	表土～Ⅰ・Ⅱ	深鉢貝殻条痕をほどこす
	浅鉢	口縁部片	1	〃	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
13.		胴部片	4	表土～Ⅰ・Ⅱ	
	不明	胴部片	16	〃	
	深鉢	胴部片	7	5	
	浅鉢	口縁部片	2	〃	
	深鉢	底部片	1	6a・6b・6c	
		胴部片	4	〃	
	不明	胴部片	20	〃	
	深鉢	口縁部片	1		
		胴部片	4		
	不明	胴部片	20		
	不明	胴部片	1	底面	
14.	深鉢	胴部片	2	Ⅱ	
	浅鉢	胴部片	1		
15.	深鉢	口縁部片	3	Ⅰa	
		胴部片	8		
		底部片	1		
	浅鉢	胴部片	4		
		胴部片	10		
	深鉢	口縁部片	3	Ⅱ	
	浅鉢	口縁部片	1		
		胴部片	2		
		胴部片	5		
16.	不明	胴部片	1	Ⅰa	
	不明	胴部片	1	〃	
	深鉢	胴部片	2	Ⅱ	
		頸部片	1		
18.	深鉢	底部片	1	Ⅰa	深鉢に貝殻条痕をほどこす
		胴部片	3		
	浅鉢	頸部片	2		
	深鉢	胴部片	1	Ⅱ	
20.	深鉢	底部片	1	ピット	
	浅鉢	胴部片	1		
	不明	胴部片	6	ピット	貝殻をほどこすもの1片

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
20.	深鉢	口縁部片	2	攪中	
	不明	胴部片	2		
	深鉢	口縁部片	2	ピット	轟式土器
17.	深鉢	胴部片	2	Ⅲ	貝殻条痕をほどこす
22.	深鉢	底部片	2	溝内	
		胴部片	8		
		口縁部片	1		
	浅鉢	口縁部片	3		
		胴部片	2		
	不明	胴部片	10		
21.	深鉢	胴部片	1	表土～Ⅰ・Ⅱ	
		胴部片	1		
23.	浅鉢	口縁部片	1	表土～Ⅰ・Ⅱ	
		頸部片	2		
	不明	胴部片	1		
24.	深鉢	口縁部	1	溝内	
	不明	胴部片	2		
25.	浅鉢	頸部～胴部	2	Ⅰ	
	不明	胴部片	3		
26.	深鉢	胴部片	2	表土～Ⅱ	貝殻条痕をほどこす
28.	不明	胴部片	1		
	深鉢	底部片	1		
		口縁部片	1		
	不明	胴部片	1		
29.	深鉢	底部片	3	表土～Ⅰ・Ⅱ	
		口縁部片	3	〃	
	浅鉢	口縁部片	2	〃	
	不明	胴部片	50	〃	
	深鉢	口縁部片	1	Ⅰ～Ⅲ	
		胴部片	10		

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
29.		底部片	2		
	浅鉢	頸部、胴部	5	Ⅰ～Ⅱ	
		口縁部片	1		
	不明	胴部片	20	〃	
	深鉢	口縁部片	2	Ⅱ	
		底部片	1	〃	
	浅鉢	口縁部片	5	〃	
	深鉢	口縁部片	15	Ⅲ	貝殻条痕をほどこすもの1
		胴部片	160	〃	押型文1片、全縄文1片
		底部片	10	〃	
	浅鉢	口縁部片	28	〃	
		頸部、胴部	9	〃	
	不明	胴部	120	〃	
	注口土器			〃	
30.	深鉢	底部片	2	Ⅲ	
		胴部片	11	〃	
	浅鉢	頸部	5	〃	
		口縁部	2	〃	
	鉢形	脚部片	1	〃	
	不明	胴部片	50	〃	
	深鉢	口縁部片	2	Ⅱ	
		胴部片	6	〃	
		底部片	1	〃	
	浅鉢	口縁部	4	〃	
		頸部	1	〃	
	不明	胴部片	4	Ⅱ	
	深鉢	口縁部片	29	Ⅲ	
		底部片	8	〃	
		胴部片	200	〃	
	浅鉢	口縁部片	25	〃	
		胴部片	200	〃	
	不明	胴部片	290		轟式土器3片
32.	深鉢	胴部片	3	溝上層	
	深鉢	胴部片	3	表土～1.2層	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
35.	深鉢	口縁部片	1	Ia～Va	
		胴部片	5	〃	
	浅鉢	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	5	〃	
41.	深鉢	胴部片	1	V字溝内	
42.	不明	胴部片	2	Ia・Ib・II	
43.	深鉢	底部片	1	Ia・Ib・V	
	不明	胴部片	3	〃	
44.	深鉢	胴部片	6	I～III	
		頸部片	2	〃	
	不明	胴部片	1	〃	

ii 弥生土器 (fig.36・37, Tab. 6)

調査区の大多数から出土した。とくに6、10トレンチには弥生期の住居址が存在したため出土量は多い。大多数が甕の破片である。代表的なものを図化して掲げた。

fig. 36の1は、T字形の突帯に刻目をもつ。2はぶ厚く、甕棺の口縁部とみられる。3～5およびfig37の3、6は甕の口縁部で、外面に刷毛目、内面に刷毛目および刷毛目をなで消した調整痕をもつ。fig.36の9、10およびfig37の7～12は甕の底部で、脚台と平底気味の丸底がある。fig 36の6は縦位の調整をもつ土器で、壺の口縁部か。fig 36の7、8は壺、8は焼成良好。fig. 37の1、2、4、5は高坏。1、2は坏部で1には中央に断面三角の突帯をもつ。4、5は脚部で、4には下半に一穴を見る。以上、図示したもののうち、fig36の1、2は中期、fig.37の1は中期～後期前半期、その他後期後半～終末期に比定出来る。 (島津)

---

fig.36の出土場所

1 9トレンチ（II層） 2 28トレンチ 3 10トレンチ
4 10トレンチ（住居址） 5 10トレンチ（住居址） 6 10トレンチ（住居址）
7 13トレンチ 8 6トレンチ（II層） 9 10トレンチ（住居址）
10 6トレンチ

fig.37の出土場所

1 29トレンチ 2 10トレンチ 3 29トレンチ
4 29トレンチ 5 10トレンチ（住居址） 6 6トレンチ
7 6トレンチ 8 10トレンチ（住居址） 9 10トレンチ（住居址）
10 10トレンチ（住居址） 11 10トレンチ（住居址） 12 9トレンチ（II層）

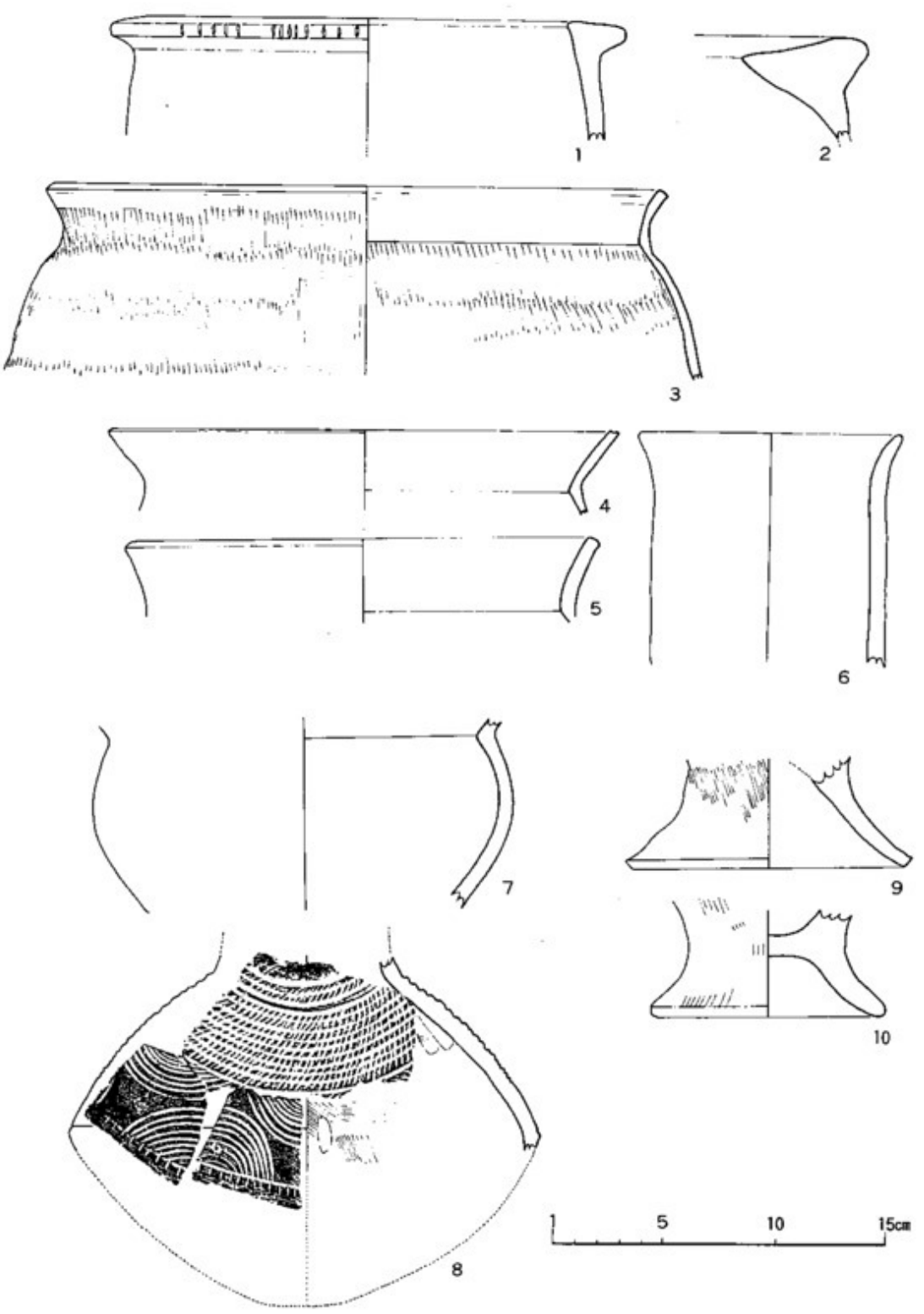


fig. 36 弥生土器実測図(1)

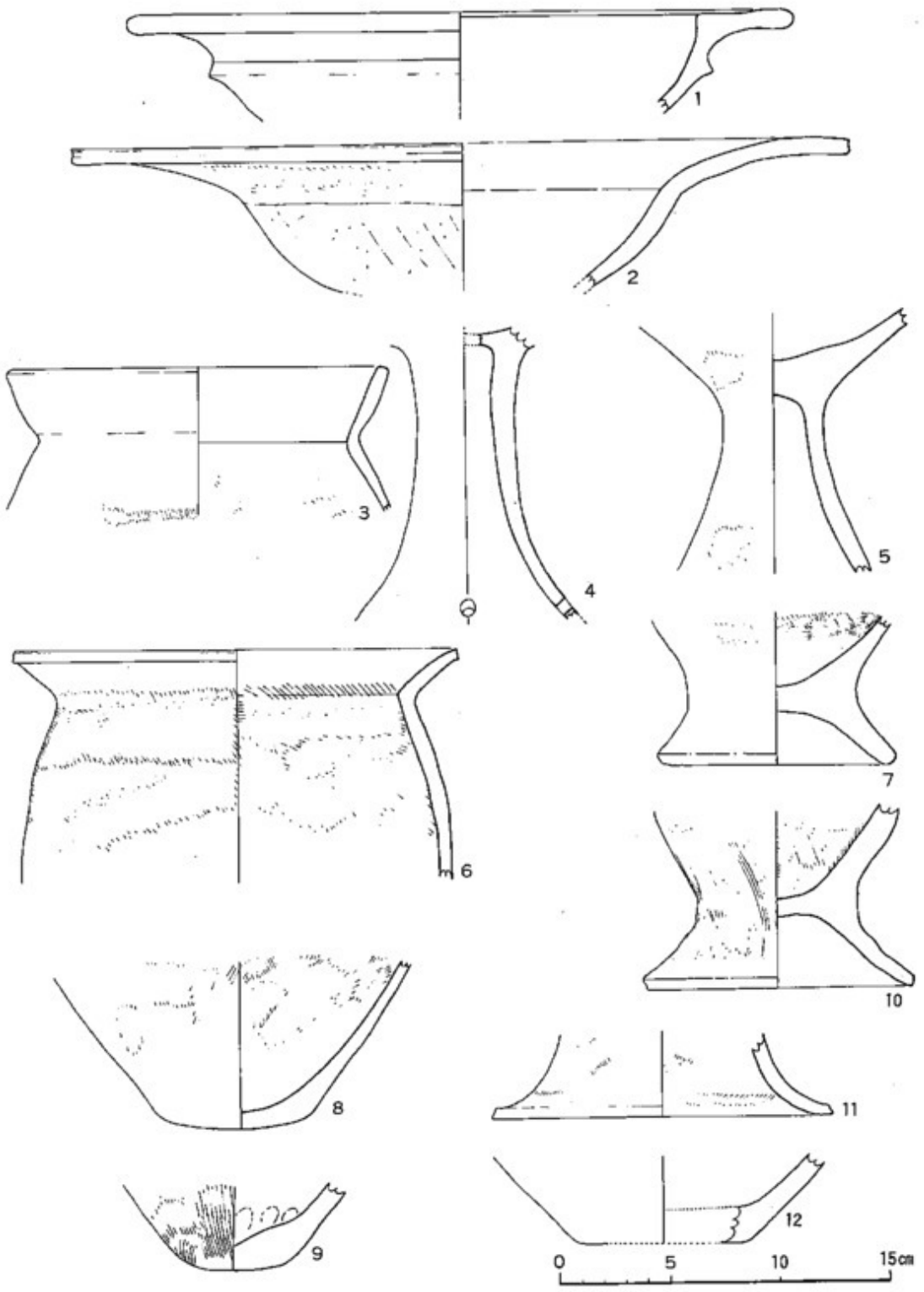


fig. 37 弥生土器実測図(2)

Tab. 6　　弥生土器一覧表

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
1.	甕	胴部片	2		
2.	甕	胴部片	3	Ⅲ	
3.	壺	胴部片	2	Ⅰ	
4.	甕	胴部片	1	Ⅱ	
	壺	口縁部	1		
5.	甕	口縁部	2	Ⅰ	
	〃	脚台部	1	〃	
	〃	胴部片	2	〃	
	甕	胴部片	1	Ⅲ	
	甕	胴部片	3	ピット	
	甕	口縁部片	1	ピット	T字形口縁
	〃	胴部片	1	〃	
	壺	口縁部片	1	〃	
	甕	胴部片	1	〃	
6.	甕	口縁部片	5		
	〃	胴部片	20		
	〃	胴台部	1		
	壺	底部	1		
	〃	胴部片	6		
	不明	胴部片	4		
竪穴	甕	脚台部	3		
	〃	胴部片	4		
	壺	胴部片	1		
	甕	胴部片	1	ピット	
	甕	口縁部		〃	
8.	甕	胴部片	1	Ⅱ	
	〃	胴部片	1		
	不明	胴部片	3		
9.	甕	脚台部片	1	Ⅱ	
10.	甕	脚台部片	1	排土中	丹塗り

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
10.	甕	胴部片	10数片	排土中	
	碗	口縁部片	1		
	甕	口縁部	2	Ⅱ	
	〃	脚台部片	3	〃	
	〃	胴部片	12	〃	
	壷	口縁部片	1	〃	
	高坏	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	8	〃	
	甕	口縁部片	1	Ⅲ	
	〃	胴部片	30数片	〃	
	甕	口縁部片	25	住居址内	甕胴部片には一個体も含まれる
	〃	脚台部片	14	〃	T字形口縁1片
	〃	胴部片	180数片	〃	丹塗りのもの2片
	〃	底部片	2	〃	壷胴部に凸帯をほどこしたもの1片
	壷	口縁部片	5	〃	胴部に重弧文をほどこすもの
	〃	胴部片	5	〃	
	〃	底部片	3	〃	
	高坏	坏部片	7	〃	
	〃	脚部	1	〃	
	碗	口縁～胴部片	5	〃	
	不明	胴部片	40	〃	
	〃	口縁部片	3	〃	
11.	甕	口縁部片	1	Ⅰ	
	〃	胴部片	1	Ⅱ	
13.	不明	胴部片	1	表土～Ⅰ・Ⅱ	
	甕	脚台部片	1	Ⅶa	
	〃	胴部片	3	Ⅶb	
14.	甕	胴部片	2	表土	
	〃	胴部片	2	Ⅱ	
	不明	胴部片	2	〃	
	甕	頸部片	1	ピット	
15.	甕	頸部片	1	表土	
	〃	胴部片	2	Ⅱ	
	〃	胴部片	1	Ⅲ	

出土地点（トレンチ名）	器	形		層位	備考
16.	壷	胴部片	1	Ⅰa	重弧文1片
	甕	口縁部片	1	〃	
		胴部片	8	〃	
	〃	口縁部片	2	Ⅰb	
		胴部片	5	〃	
	不明	胴部片	1	〃	
	甕	口縁部片	2	Ⅰb・Ⅱ	
	〃	胴部片	8	〃	
	〃	口縁部片	1	Ⅱ	
	〃	胴部片	8	〃	
	〃	脚部片	1	〃	
	不明	胴部片	3	〃	
	壷	頸部から胴部	2	落込みの上の石の部分	
	甕	口縁	3	〃	
	不明	口縁部片	1	〃	
	甕	胴部片	2	最下層？	
17.	甕	脚台部片	1	遺構内	脚台と胴部の接合に凸帯がつく
	〃	口縁部片	1	〃	
	〃	胴部片	8	〃	
	壷	口縁部片	1	〃	
18.	甕	胴部片	2	表土	重弧文をほどこす
	壷	胴部片	1	〃	
	不明	胴部片	1	遺構内	
20.	甕	脚台部片	1	うね中	
	〃	胴部片	1	ピット	
	〃	胴部片	2	不明	
	不明	胴部片	2	〃	
22.	甕	頸部片	1	溝内	
	〃	胴部片	2	〃	
23.	甕	口縁部片	1	表土～Ⅰ・Ⅱ	
24.	甕	口縁部片	3	溝内	
	〃	胴部片	14	〃	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
24.	甕	脚台部片	1	溝内	
	不明	胴部片	4	〃	
25.	甕	口縁部片	2	表土	中期中葉
	〃	胴部片	1	〃	
	〃	口縁部片	1	表土～Ⅱ	
	〃	脚部片	2	〃	
	〃	胴部片	8	〃	
	〃	口縁部片	10	Ⅱ	
	〃	脚部片	1	〃	
	〃	頸部片	3	〃	
	〃	胴部片	8	〃	
	碗	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	7	〃	
26.	不明	胴部片	2		
26（拡）	不明	胴部片	4		
27.	壺	口縁部片	1	表土	二重口縁がかった土器
28.	甕	脚台部片	1	水糸下0～40cm	胴部に2条の凸帯をみる（中期）
	〃	胴部片	8	〃	丁字形口縁2片
	〃	口縁部片	2	〃	
	壺	胴部片	1	〃	
	不明	口縁部	1	〃	
	甕	頸部片	3	水糸下40cm～底面	胴部に凸帯をほどこしたもの1片
	〃	胴部片	4	〃	
	〃	口縁部片	1	〃	甕棺口縁部
	甕	胴部片	1	2	
	〃	胴部片	1	礫層の直上	
29.	甕	口縁部片	12	表土～Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	T字形口縁一3片
	〃	脚台部片	1	〃	
	〃	胴部片	28	〃	
	高坏	坏部	1	〃	
	碗	胴部片	1	〃	
	不明	胴部片	5	〃	

出土地点（トレンチ名）	器	形		層位	備考
29.	甕	口縁部片	1	Ⅱ	
	〃	口縁部片	1	Ⅱ、ピット	
	甕	口縁部片	3	Ⅲ	T字形口縁1片
	〃	胴部片	30	〃	
	〃	脚台部片	3	〃	
	〃	底部片	1	〃	
	碗	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	10	〃	
	甕	底部片	2	Ⅱ	
	〃	脚部片	2	〃	
	〃	口縁部片	1	〃	
	甕	口縁部片	9	Ⅲ	T字形口縁部1片
	〃	胴部片	30	〃	胴部に凸帯をほどこすもの1片
	〃	脚台部片	1	〃	
	不明	胴部片	10	〃	
		口縁部片	1	〃	
29・30T間のあぜの中	甕	口縁部片	1	Ⅰ・Ⅲ	
		胴部片	3	〃	
	不明	胴部片	2		
30.	甕	口縁部片	1	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	
	〃	胴部片	2	〃	
	〃	脚台部片	1	〃	
	壺	口縁部片	1	〃	
	不明	胴部片	1	Ⅱ	表面に丹塗り
	不明	胴部片	1	Ⅱ	
	甕	口縁部片	1	Ⅲ	
	〃	胴部片	6	〃	
	不明	胴部片	3	〃	
32.	甕	胴部片	1	Ⅰ・Ⅱ	
35.	甕	口縁部片	1	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	
37.	甕	口縁部片	1		
41.	甕	胴部片	1	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
41.	甕	胴部片	1	溝内	
	高坏	坏部片	1	〃	
42.	甕	脚台部片	1	Ⅱ	
44.	甕	胴部片	3	Ⅱ	
不明	不明	縁部片	1	不明	
	甕	口縁部片	2	〃	

iii 須恵器・土師器・黒色土器・陶磁器 (fig.38~41, Tab7~9)

須恵器（fig.38・39・40の1～5）出土したのは、小破片が多い。

出土した須恵器の大多数は甕の破片である。ぶ厚く外面に格子、および平行叩きをもち、内面に円心円文をもつものが多い。また、甕の口縁部（fig.39の2）も見られ、頸部に退化した波状文を施す。甕以外には壺、杯が出土している。fig.40の1は壺の胴部で中央に櫛歯状具で上下を刺突し、その中央に小豆大の円文を付す装飾がある。2～5は坏で2、3は坏身、蓋受の立ちあがりが高く、口唇部に段を見る。4は坏蓋。5はやや外に向く高台をもつ。

土師器・黒色土器（fig.40の6～12）6は内面黒の黒色土器で底部を欠く。7～12は土師器で大小法量に差がある。いずれも糸切り痕が底部にみられる。

陶磁器（fig.41）中国産の青磁の破片が少量出土した。少破片で図示出来ない。宋～明時代に比定出来るもので、竜泉窯系、同安窯系のものがみられる。

fig.41は、日本産の磁器で九州内の窯のものとみられる。近世～現代を含む。fig.41の5は、神社の献具の一種であるか。外面に茶色の釉を見る。これ等は全て神社の左右の1、3トレンチから出土した。

なお、少量の瓦質土器が出土したが、図示できるものは無い。こね鉢、擂鉢の破片などである。

（島津）

---

fig.38の出土場所

1 14トレンチ（集石 3層）　2 35トレンチ（Ⅶ6層）　3 1トレンチ（1層）
4 29トレンチ（Ⅱ層）　5 4トレンチ　6 28トレンチ（集石3層）
7 22トレンチ（Ⅱ層）　8 1トレンチ（Ⅰ層）

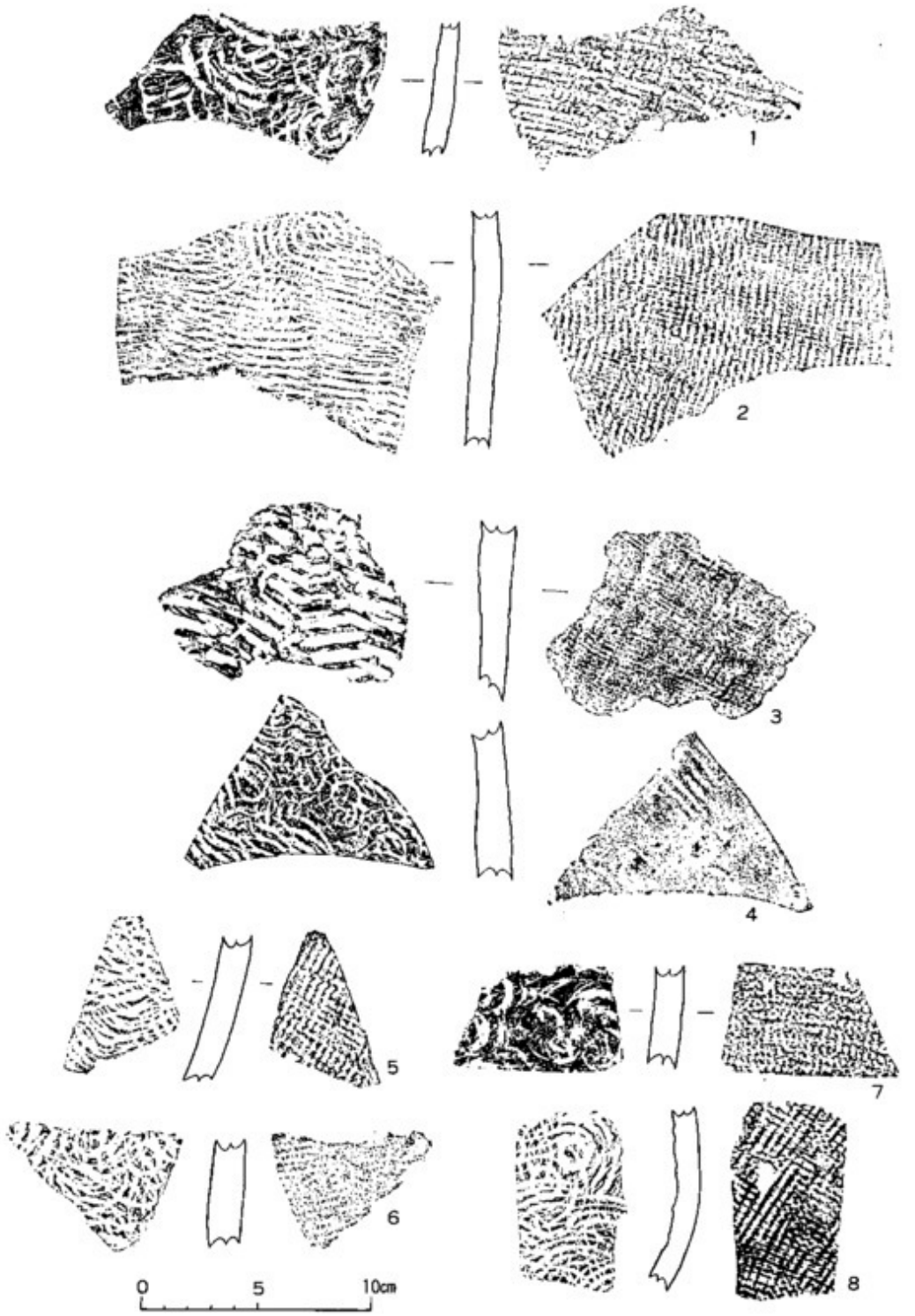


fig. 38 須恵器拓影 (1)

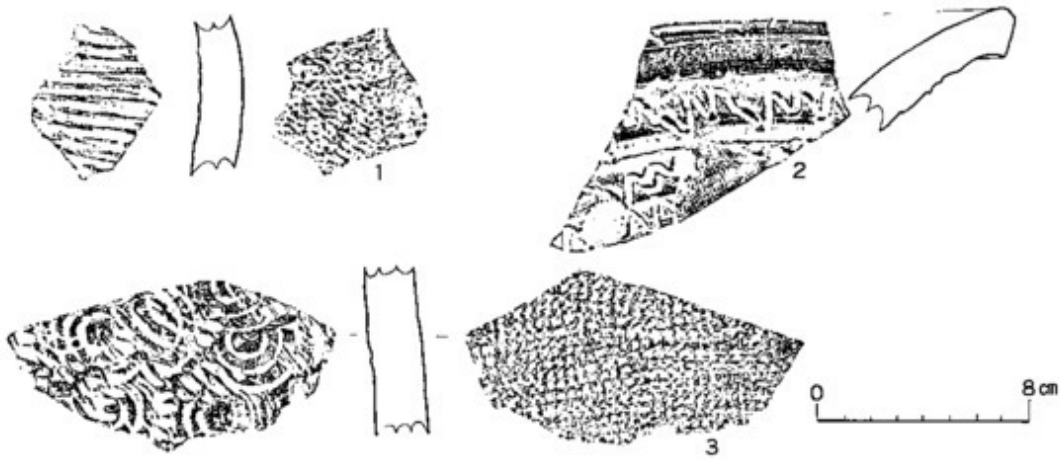


fig. 39　須恵器拓影 (2)

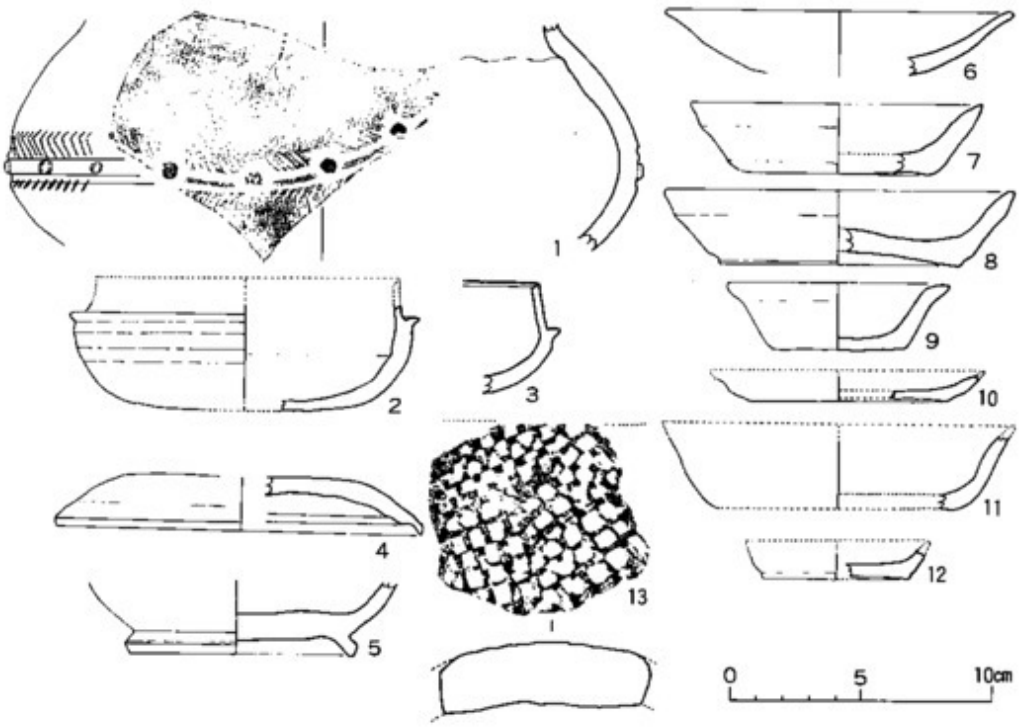


fig. 40　須恵器・黒色土器・土師質土器・瓦

fig.39の出土場所

1　28トレンチ（集石3層）　2　28トレンチ（集石　3層）　3　1トレンチ（1層）

fig.40の出土場所

1　37トレンチ（2層）　2　29トレンチ（Ⅱ層）　3　29トレンチ（Ⅱ層）
4　48トレンチ（Ⅱ層）　5　14トレンチ（集石　3層）　6　20トレンチ
7　37トレンチ　8　37トレンチ　9　24トレンチ
10　43トレンチ（Ⅱ層）　11　41トレンチ　12　41トレンチ
13　14トレンチ（集石　3層）

fig.41の出土場所

1　3トレンチ（Ⅰ層）　2　1トレンチ（1層）　3　1トレンチ（1層）
4　1トレンチ（1層）　5　1トレンチ（1層）

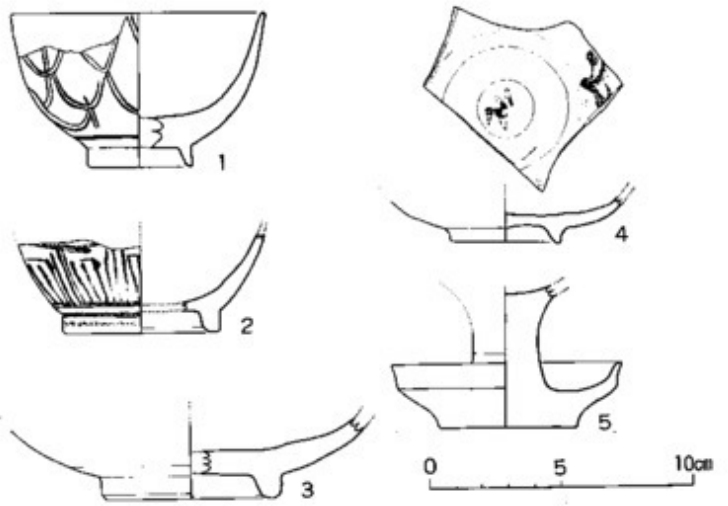


fig. 41 陶磁器

Tab. 7 須恵器一覧表

出土地点(トレンチ名)	器形			層位	備考
1.	胴部	片	1	I	
	肩部	片	1	〃	
2.	部位不明		2	II	
3.	瓦質土器	底部	1	I	
	〃	口縁部	1	〃	
	脚	部	1	〃	
5.	胴部	片	2	I	
6.	部位不明		2	I	
8.	大甕	肩部破片	1	III	
	部位不明		1	溝中	
10.	部位不明		4	I	
	部位不明		1	住居址内	
11.	壺	肩部破片	1	I	
	部位不明		1	〃	

出土地点(トレンチ名)	器形		層位	備考
13.	部位不明	1		
14.	高台付底部片	1		
15.	坏片	1	Ⅱ	
	底部高台	1	〃	
16.	部位不明	3	Ⅰ	
	坏(身)	1	Ⅱ	
	部位不明	4	〃	
	瓦質土器片	1	〃	
17.	部位不明	1	Ⅰ	
	部位不明	1	Ⅲ	
18.	部位不明	1	Ⅰ	
20.	口縁(坏身か)	1	Ⅰ	
	部位不明	1	〃	
	坏身	1	ピット	
28.	底部(高台)	2	2	
	部位不明	4	2	
	大甕片 頸部	1	水糸の下0～40cm	
	大甕片 口縁部	3	〃	
	大甕片 肩部	3	〃	
	大甕片 胴部	4	〃	
	部位不明	5	水糸の下0～40cm	
	杯	6	〃	
	瓦質土器鉢(とね鉢)口縁部破片	5	〃	
	底部片	1	〃	
	部位不明	1	〃	
	高台付底部片	1	集石上面	
	片底部	1	集石中	
29.	部位不明	12	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	
	部位不明	2	Ⅲ	
	壷胴部片	2	撹乱	

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
32.	壷形土器肩部	1		Ⅱ	
35.	大甕肩部破片	1		Ⅵ	
41.	部位不明	1		Ⅵ	
	瓦質土器片	1		Ⅶ	
43.	部位不明	1		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	

Tab. 8 土師器出土一覧表

出土地点（トレンチ名）	器形			層位	備考
2.	糸切り底	1		Ⅱ	
	部位不明	4		〃	
	壷口縁	1		〃	
	部位不明	17		〃	
5.	部位不明	7		Ⅰ	
	坩	1		〃	
6.	高台	6		Ⅰb	
	糸切り	1		〃	
	ヘラ切り	1		〃	
	底部不明	10		〃	
	壷	2		〃	
	口縁不明	7		〃	
	坏	1		〃	
8.	坏	片	1	Ⅰb	
10.	高台	5		Ⅰ	
	糸切り	1		〃	
	底部不明	2		〃	
	部位不明	20		〃	
	高台	1		Ⅰb	
	糸切り	1		〃	
	底部不明	7		〃	
	坏	片	2	〃	

出土地点（トレンチ名）	器形		層位	備考
10.	部位不明	15	Ⅰb	
	口縁片	2	住居址内	
	高台	2	〃	
	底部不明	2	〃	
	部位不明	3	〃	
	壺肩部片	1	〃	
	高坏口縁片	1	〃	
11.	高台	1	Ⅰ	
12.	高台	2	表土～Ⅲ	
	底部不明	2	〃	
	口縁片	4	〃	
	部位不明	11	〃	
	高台	2	溝内	
	糸切り	1	〃	
	底部不明	3	〃	
	坏片	1	〃	
	口縁部	1	〃	
	部位不明	8	〃	
13.	高台	7	表土～Ⅴ	
	糸切	2	〃	
	底部不明	3	〃	
	部位不明	23	〃	
	坏	3	〃	
	口縁不明	1	〃	
14.	底部片	1	Ⅱ	
15.	口縁片	6	Ⅱ	
	糸切り	1	〃	
	ヘラ切り	2	〃	
	部位不明	16	〃	
16.	高台	2	Ⅲ	
	ヘラ切り	2	〃	
	坏	3	〃	

出土地点（トレンチ名）	器形		層位	備考
16.	口縁	2		
	部位不明	34		
	高台	7	Ⅲ	
	糸切り	9	〃	
	ヘラ切り	5	〃	
	底部不明	14	〃	
	坏口縁片	10	〃	
	坩口縁片	3	〃	
	口縁不明	5	〃	
	部位不明	96	〃	
	糸切	1	落ちこみ上位	
	高坏脚部片	1	最下層部	
	高台	1	〃	
	ヘラ切り	1	〃	
	糸切り	1	〃	
	底部不明	2	〃	
	口縁片	1	〃	
	部位不明	1	〃	
17.	底部	2	Ⅰ	
	部位不明	3	〃	
	高台	2	Ⅱ	
	底部不明	2	〃	（遺構内第Ⅲ層）
	坩	1	〃	〃
	口縁不明	3	〃	〃
	部位不明	19	〃	〃
18.	糸切底	1	Ⅰ	
	部位不明	3	〃	
	口縁	1	〃	
20.	壷口縁	1	Ⅰ	
	坏	2	〃	
	高台	2	〃	
	底部不明	1	〃	
	高坏口縁片	1	畝中	
	壷口縁片	1	〃	

出土地点（トレンチ名）	器形		層位	備考
20.	高坏	1	ピット	
	坩	1	〃	
	坏	3	〃	
	部位不明	5	〃	
22.	高台付底部	1	溝内	
	丹塗布壺肩部破片	1	〃	
	底部片	1	〃	
24.	灯明皿	1	溝中	
	手づくね土器		〃	
25.	壺肩片	1	Ⅱ	
	部位不明	1	〃	
26.	部位不明	2	水糸下0～40cm	
28.	高台	1	2	
	底部不明	2	〃	
	部位不明	9	〃	
	部位不明	4	水糸下0～40cm	
	不明底片	1	集石上面	
29.	糸切り	2	Ⅰ Ⅱ	
	口縁片	1	〃	
	部位不明	24	〃	
	口縁片	2	〃	
	手づくね土器片	1	〃	
	混滑石土器片	1	(M—12) ⅠⅡⅢ	
	部位不明	19	Ⅲ	
	底部	3	〃	
	壺肩	3	〃	
	高坏脚片	2	〃	
	坏片	1	攪乱	
	片	6	〃	
32.	壺形土器肩部片	1	Ⅱ	

出土地点（トレンチ名）	器形		層位	備考
35.	甕	2	Ⅰ Ⅱ Ⅲ	
41.	糸切り底片	2	Ⅴa	
	部位不明	1	〃	
	高台付底部片	1	Ⅴb	
	部位不明	1	〃	
	糸切り底片	2	Ⅶ	
	坏	1	Ⅵ	
	盤	1	〃	
	部位不明	1	〃	
	糸切り底片	2	Ⅶ	
	弥生片	1	〃	
	高坏	1	〃	
42.	甕胴部	1	Ⅰ Ⅱ Ⅲ	
43.	糸切り底片	1	Ⅰ Ⅱ Ⅳ	
	底片不明	3	〃	
	部位不明	4	〃	
	坏片	1	〃	

Tab. 9 青磁器出土一覧

出土地点（トレンチ名）	器形		層位	備考
2.	口縁部片	1	Ⅲ	龍泉窯
	胴部片	1		同安窯
22.	高台部片	1	溝内	龍泉窯
	胴部片	1		
28.	口縁部片	1	礫層直上	同安窯
	胴部片	1		
	高台部片	3	礫層内	龍泉窯
	胴部片	1		同安窯
	高台部片	1	集石上面	〃
30.	底部片	1	Ⅱ	同安窯
	高台部片	1	Ⅱc	龍泉窯
32.	高台部片	1	Ⅵ	龍泉窯

iv 瓦 (fig. 40・42・43)

fig. 42 瓦銘文

瓦は、1.3トレンチより多く出土した。丸瓦平瓦が多数出土したが、ここでは、3種の瓦を紹介する。1、2、5は鬼板で、5はその右の脚部。素朴な作りであるが、丁寧に作られている。1の裏面に、把手を中心として、右に1行、左に2行の銘文がある。

慶応四
辰九月
北□

と記し、最後の北以下は欠失している。筆状具で一気に書かれて力強い。

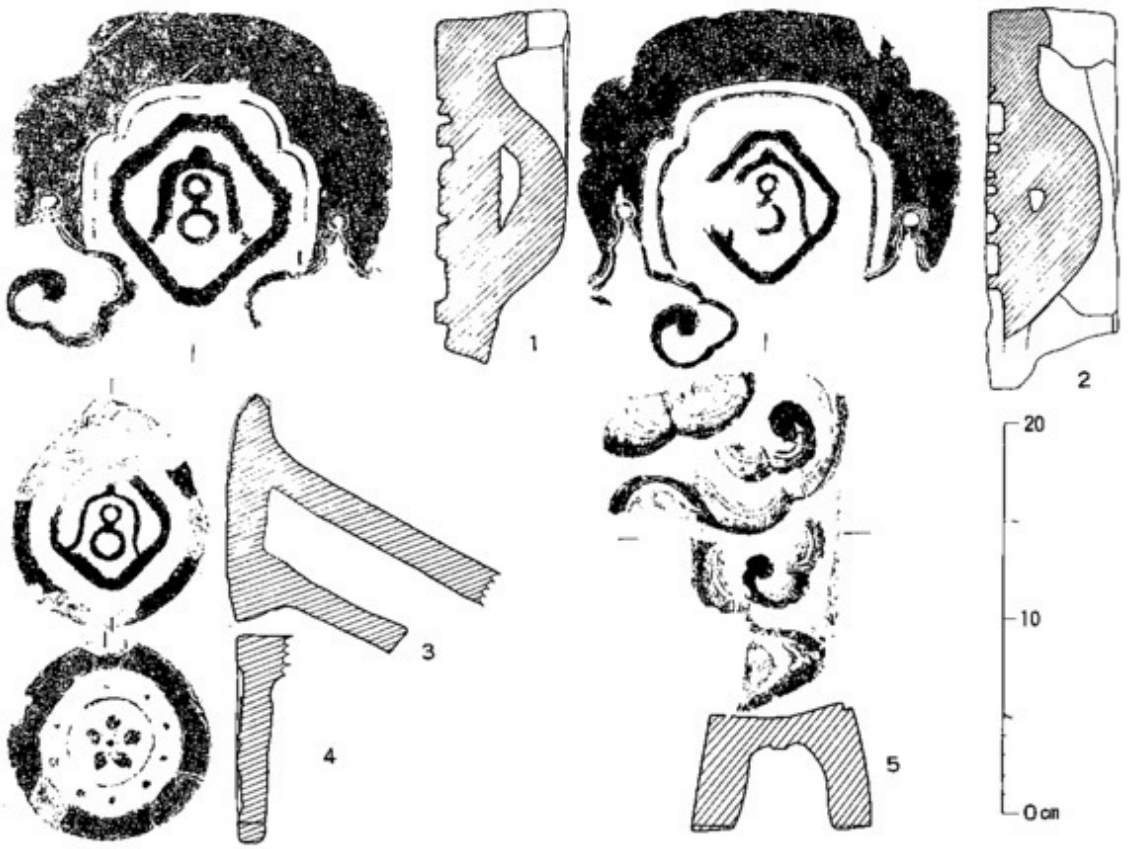


fig. 43 瓦拓影

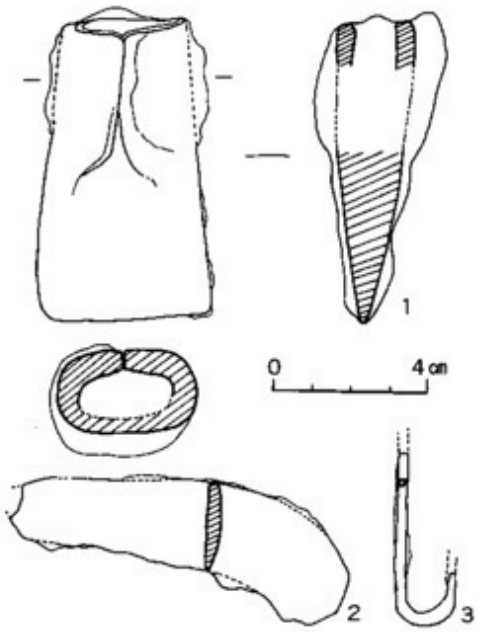


fig. 44 鉄製品

3は鳥衾の先端部で、「宮」を表わす。4は丸瓦で、天満宮を示す梅鉢を表わす。これらの瓦は、現在の神社が建立される前の尾根瓦である。

fig.40 の13は布目瓦で外面に大きい格子目、内面に布目をもつ。焼成悪く黄褐色を呈す。磨耗が著しい。　（島津）

v　鉄器・鉄製品（fig. 44）

1は斧で、ソケット部をもつ。全長7.5cm、刃部幅4.3cmを測る。全体に保存状態は良好。2は鏃状の鉄製品。先端を欠失する。全長8.5cm。全体ややそり気味になっている。3は釣手状の鉄製品。断面は蒲鉾状をなす。幅0.5cm、厚さ0.25cmを測る。　（島津）

---

fig. 43の出土場所

1・2・3・5　1トレンチ（I層）　2 3トレンチ

fig. 44の出土場所

1　24トレンチ（II層）　2　22トレンチ（II層）　3　32トレンチ（VIIc層）

fig. 45・46の出土場所

1　30トレンチ（III層）　2　30トレンチ（III層）　3　29トレンチ（III層）　4　29トレンチ（III層）
5　30トレンチ（III層）　6　34トレンチ　7　24トレンチ（III層）　8　13トレンチ
9　30トレンチ（III層）　10　29トレンチ（III層）　11　30トレンチ（III層）　12　30トレンチ（III層）
13　29トレンチ（III層）　14　13トレンチ　15　24トレンチ（II層）　16　6トレンチ（住居址）
17　8トレンチ（I層）　18　30トレンチ（III層）　19　30トレンチ（III層）　20　26トレンチ
21　26トレンチ（II層）

vi 石器・石製品 (fig. 45・46, Tab.10)

石器の記述は図面、表で表現したものは極力これが重複を避けた。

1　研磨は平坦面のみで四周の剥離面にはない。ただ、上・下端の一部に磨耗と擦痕におおわれた小剥離面があり、それら使用痕のない剥離面は使用一時期の再調整剥離と考え得る。2　両端とも刃様であるが、使用痕は下端に限定され、少なくとも廃棄時の刃部は下端とみなし得る。刃部は数次の再研磨が行われており、斜刃はそれが原因であろう。3　使用痕は上・下端に観察できる。研磨は調整剥離後に行っているが、縁辺には及んでいない。4　正、背面ともに研磨痕が走っているが、背面の研磨度がやや荒い。ただ調整剥離面の残存は正面が多い。背面に自然面が残存している。5　研磨は正面の略々全面にわたるが、背面は刃部近辺に限られる。弱ではあるが最も顕著な研磨痕は両側面にみられ、稜線も鮮明である。刃部の剥離面は使用による磨耗があり、再調整剥離かもしれない。6　正面が使用による刃こぼれが著しく、本具の対象物主接触面となる。背面刃部周辺にも磨耗がみられる。7　下半が折損しているが、上端周辺にも磨耗があり、両端使用の石器であろう。上端の剥離面は使用中に生じた破損を再調整したものである。8　上端は頂部に相当しようが、調整剥離面よりも後次の剥離が集中している。「刃」機能はないが、おそらく、破損後の再調整剥離であろう。下半も折損している。9　縄文時代晩期に出るという柱状片刃の抉入石斧に近似した形態を呈していると言う。出土地周辺も後期～晩期の遺物しか出土していない。しかし、打製であり、パティナも後述の10・11に比較して相当深い。時期的に異和感を感じる。なお、両側面ともに自然面である。10・11は匙形石器である。10は上端近くに対称的な一対のノッチがある。他に調整剥離はない。エッジは打面側の側縁にある。11　ノッチ部分の調整剥離は粗い。使用痕は観察不能。12・13は打欠き形錘器である。ポンチ状工具で抉りを入れている。13にはその痕跡がミゾ状に残り中央を走っている。14　正背面ともに横位の擦痕が顕著に走る磨石である。小林行雄氏『図解考古学辞典』「石皿」における「円運動」用法は考えられない[4]。この種「前後運動」磨石の例はかなり普遍的であるようである。磨盤・磨石の類型的対応関係ではなく、遺物観察を基にした実質的組み合せを考える必要がある。15　上端に弱い色濁した磨耗部、下端に強い磨耗と刃こぼれがみられる。下端背面には磨耗による強い稜線も現出している。あるいは「ノミ」的用法を兼用していたものであろう。17～21は黒曜石の剥片石器である。17は残核の一類ではあろうが、立面にみられる剥離が刃潰し状であることからCore toolの可能性を否定し得ない。18～21の使用位置は図示した。16は弥生時代の石器である。自然石ではあるが、出土状態から類推して男根様自然石を選択して住居内に持ち込み、その役割を与えたものと思われる。なお、亀頭部先端に3㎝四方の磨耗・擦痕部もある。磨石の役割を得た一時期もあったようである。

（西田道世）

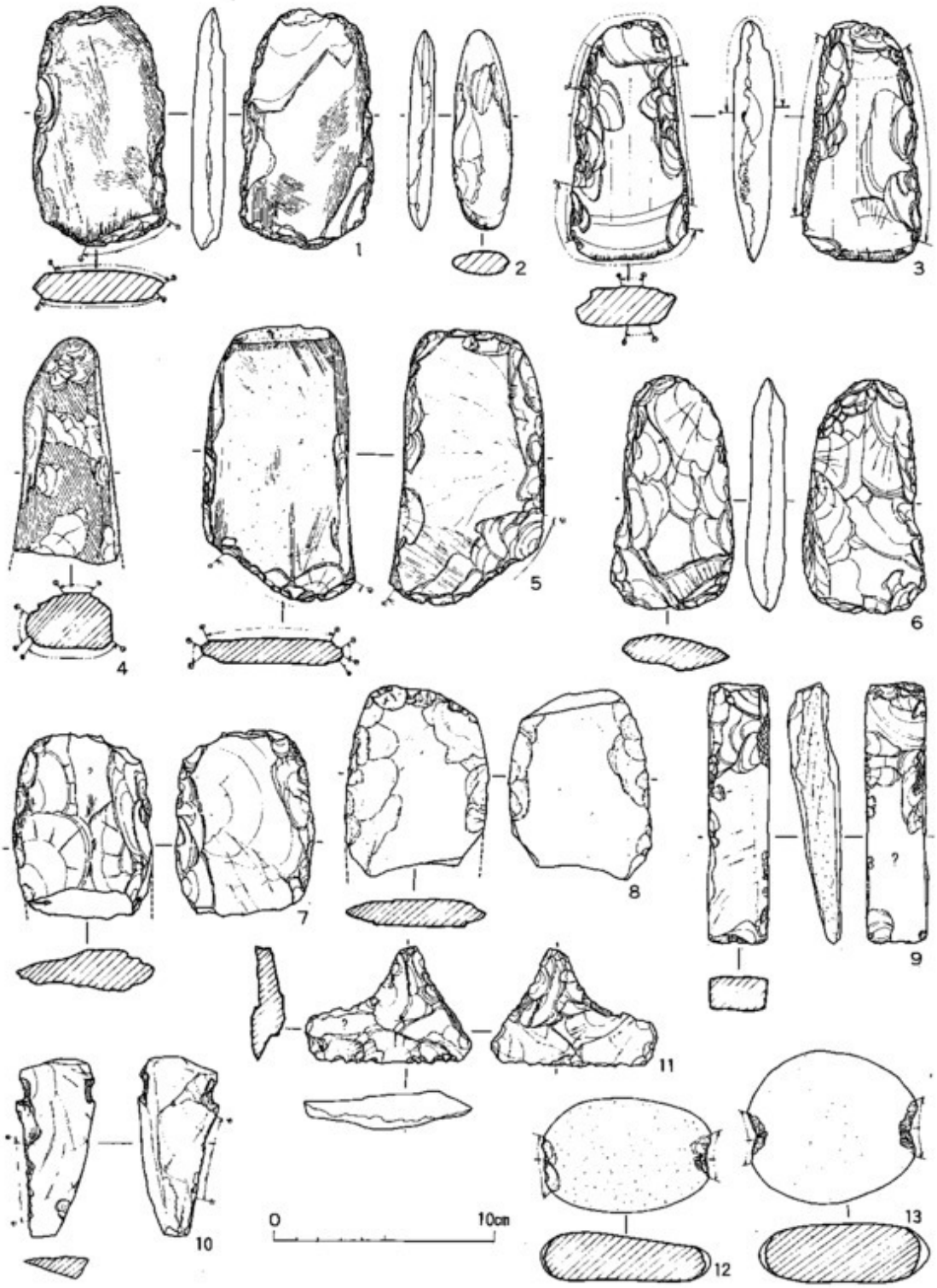


fig. 45　石器実測図 (1)

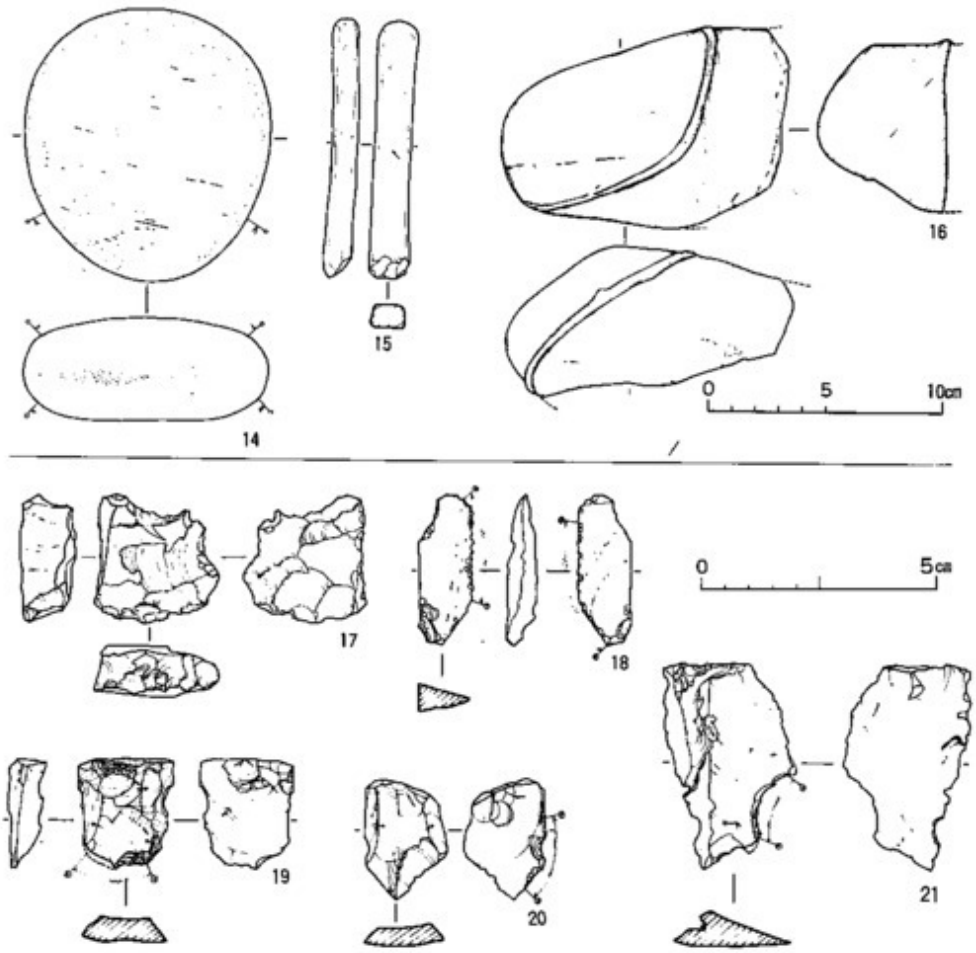


fig. 46 石器実測図(2)

出土地点(トレンチ名)	種類	石質	層位	重さ(g)	備考
1.	石なべ片	滑石	I	97.80	
2.	剝片	サヌカイト	III	7.85	
5.	剝片	黒曜石	I	2.82	
	磨製石斧	安山岩	II	89.09	
6.	男根状石器	緑泥変岩	III	739.22	住居址内 fig.46—16
8.	剝片	黒曜石		7.14	3区 fig.46—17
13.	磨石	砂岩		802.34	fig.46—14
	打製石斧	安山岩		108.62	fig.45—8

出土地点（トレンチ名）	種類	石質	層位	重さ（g）	備考
14.	打製石斧	?	Ⅳ	125.30	集石遺構中
16.	剥片	黒曜石	Ⅱ	1.88	
20.	剥片	黒曜石	Ⅳ	99.22	ピット
24.	打製石斧	?	Ⅱ包含層	124.35	fig.45—7
	磨石	砂岩	Ⅱ包含層	45.70	fig.46—15
26.	剥片	黒曜石	拡張	6.54 1.90	fig.46—21 fig.46—15
29.	たたき石	砂岩	表ⅠⅡⅢ	127.60	
	石錘	砂岩	Ⅲ	201.60	fig.45—13
	石斧	砂岩	Ⅲ	48.40	
	剥片	黒曜石	Ⅲ（上）	7.50	
	石匙	サヌカイト	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	33.10	fig.45—10
	磨製石斧	粘板岩	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	145.80	fig.45—3
30.	磨製石斧	緑泥変岩	Ⅲ	145.19	
	石匙	サヌカイト	〃	40.68	fig.45—11
	石錘	砂岩	〃	127.50	fig.45—12
	石器?	安山岩	〃	36.25	
	石斧	礫岩	〃	60.06	
	磨製石斧	粘板岩	〃	78.10	集石遺構中fig.45—4
	剥片	チャート	〃	1.80	
	石器	礫岩	〃	28.70	
	磨製石斧	粘板岩	〃	168.70	fig.45—9
	のみ状石器	サヌカイト	〃	108.20	
	のみ	緑泥変岩	〃	45.68	
	剥片	サヌカイト 黒曜石	Ⅲ（上）	1.90 3.60	
33.	打製石斧	サヌカイト	Ⅰ	43.30	
34.	打製石斧	?		122.20	fig.45—6

Tab. 10　石器・石製品一覧表

vii　礫石・礫石状石製品（fig. 47～49）

2トレンチの礫石状石製品は、方形をなし、全面に盤状工具による打痕が認められる。また部分的に研磨が施されている。石の上面は、大略水平であるが、長軸両端（A・A′）は1㎝程低くなる。また短軸（B・B′）は北側が高く、南縁では5.1㎝下がって、やや曲面をなす。上面全体は南西方向にわずかに傾いている。

打痕や調整痕は、その残された盤状工具の幅から① 2㎝、② 3～4.5㎝、③ 5㎝以上の3タイプに分類できる。これは、調整に使用された盤状工具の小型、中型、大型の種類に対応する

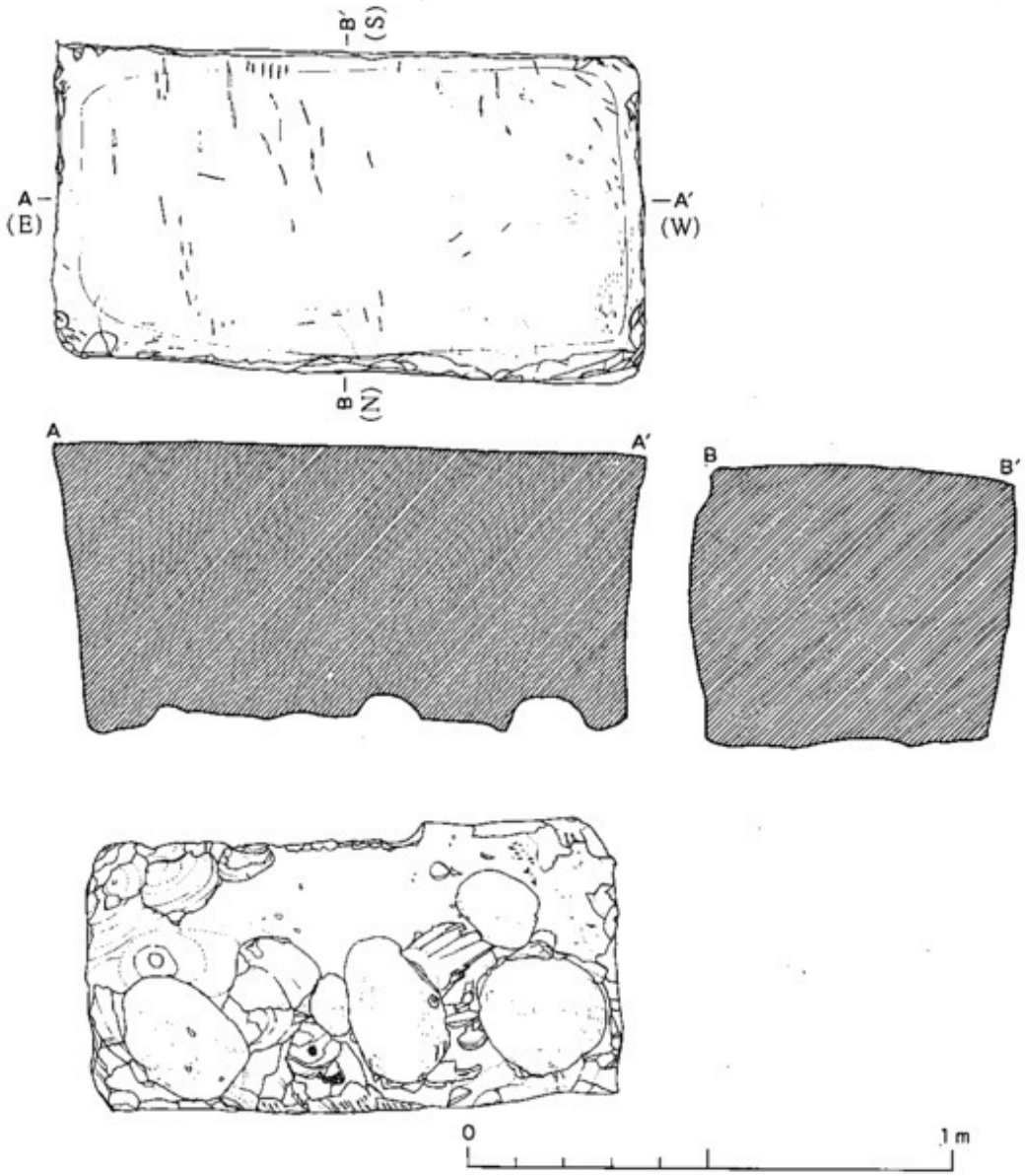


fig. 47　礫石状石製品実測図(1)

とみられる。打痕や、調整痕の切り合い具合から、これらの工具の用途を、推定することは可能である。

小型鑿状工具は、全面にその痕が見られ、大型の鑿状工具の上面に施されているので、仕上整形に使用すると考えられる。中型、大型の工具は原石から大雑把に形を作る時に使用されたと考えられる。北面の上半には大型鑿状工具による打痕がそのままの状態で残っている。

石の西側面の中央部、西端から20㎝の部位に幅40㎝のひろがりをもって、集中的に小型鑿状工具痕がみられる。上面の中央部には、打痕が少ないが、これは一応研磨により消されたものとみられるが、研磨痕は観察出来ない。意識的に研磨されているのか、偶然、結果的に研磨痕が残っているのか明らかではない。上面の打痕は、大小約250個を数えることが出来る。打痕の方向は石の長軸方向およびそれと直交するものが多い。

側面は、上面に比し、概して表面が荒い。東西南面には、部分的に研磨痕がみられるが北面は、中央部上面に長さ5㎝の大きな剥離面が見られ、研磨はみられない。

底面は荒けずりのまま調整を加えていない。7個の円形、楕円形の凹みが見られる。径は16～30㎝を測り、10～20㎝の深さをもつ。この凹みの内面は、平滑に研磨されており、人工的に作られたものと判断される。

石の平面形は、ほぼ正四辺形をなし、長軸線で122.4㎝、短軸線で60.2㎝を測る。

石の断面形は、下方にいくに従い狭くなり、全体として逆台形状を呈する。下端の長軸線上で111.1㎝、同短軸線上で57.1㎝を測る。

石の東西の側面は、やや内弯気味になり、南北の側面は逆に外弯気味になる。底面は、東西両端が高く、中央部が凹む。

石材は固い良質の凝灰岩を使用している。　　（豊崎・島津）

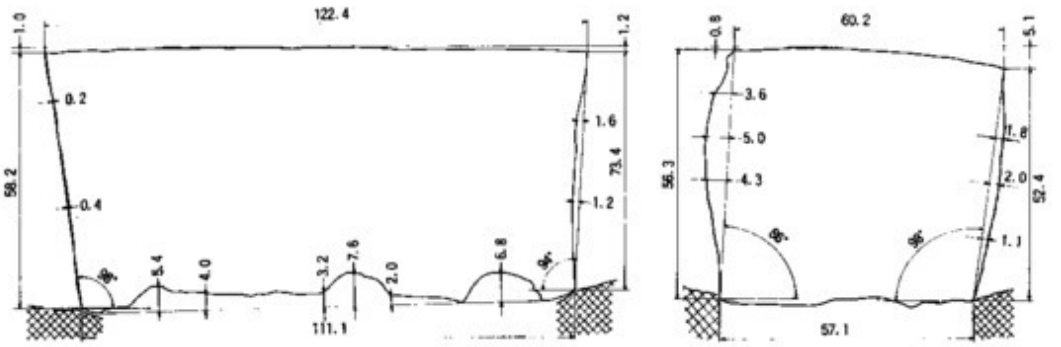


fig. 48　礎石状石製品計測図　　※単位(cm)

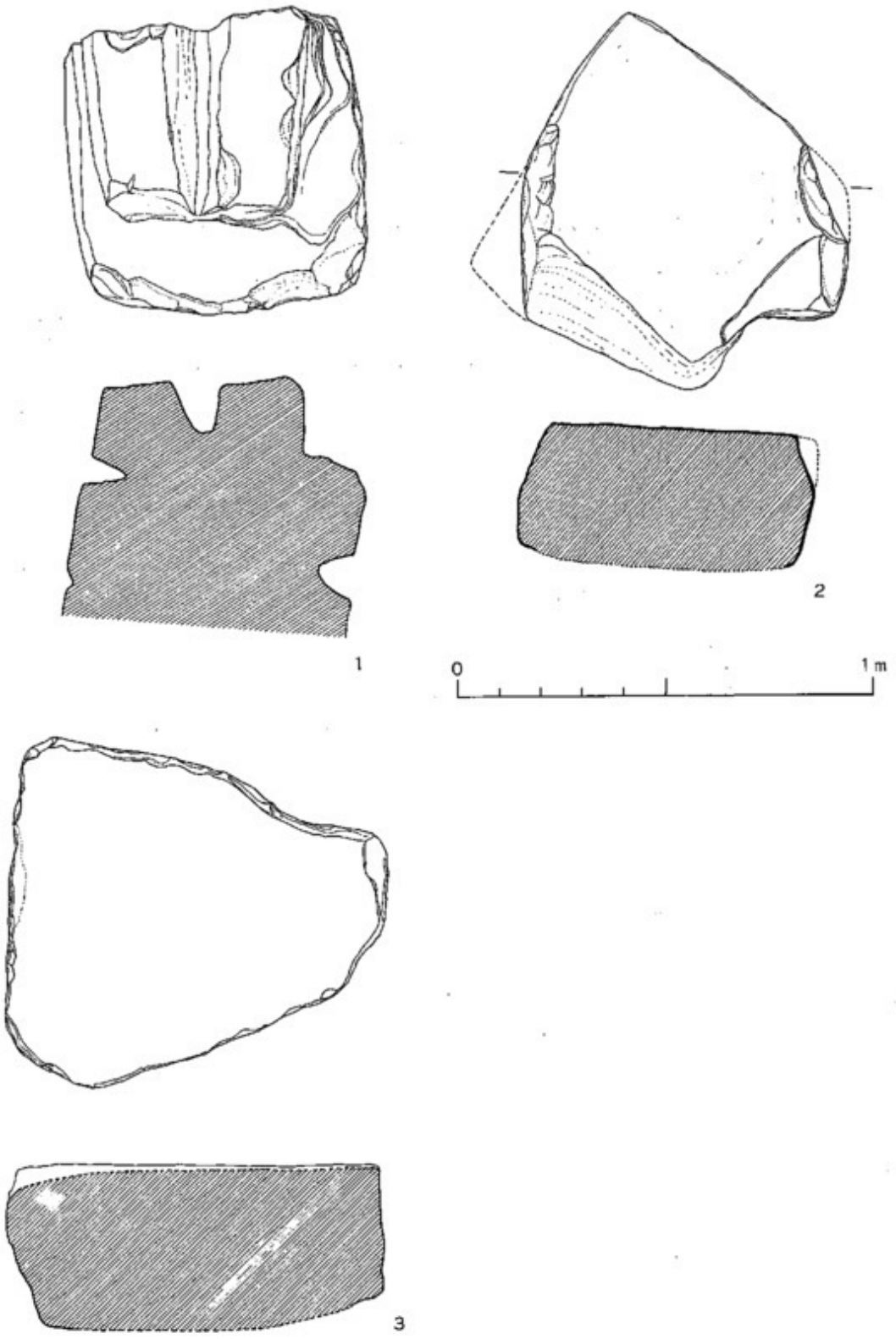


fig. 49 礎石・礎石状石製品実測図 (2)

fig. 49の1　この礎石状石製品は、吉田振作氏宅の中庭に現存するものであり、『城南町史』においては9番のものに該当する。石質は軟質の凝灰岩で、風化が進んでいる。長径73.2㎝、短径72.4㎝、厚さ64＋α㎝を測る。礎石状の下石の上に、最大幅14㎝、最小幅11㎝、深さ12㎝前後のV字溝を中央にもつ上石が造り出されている。また下石にも、左右両側面、前側面にV字溝が彫りこまれており、下石の三側面を廻っている。右側面のV字溝は、幅10㎝、深さ8㎝ほどで、左側面のそれは、幅7㎝、深さ3㎝ほどを測る。これらのV溝は、いずれも、鑿状工具により彫りこまれたものである。その性格については判然としないが、それらの彫りこみの状況から、石材切り出し用の溝ではなかったかとも推定される。（田中）

fig. 49の2　この礎石は、現在神社の西南約50mほどに位置する貯水槽の土台石として用いられている。原位置は留めていない。『城南町史』においては1番のものに該当する[5]。石質はやや軟質の凝灰岩で、表面は風化が激しい。長径88㎝、短径78.5㎝、厚さ34＋α㎝を測る。四側面ならびに上面には、部分的に、鑿状工具によると思われる調整打痕が観察される。一部自然面を留めた隅丸方形を呈し、礎石としては適当な大きさと安定感のあるものである。（田中）

fig.49の3　この礎石も吉田振作氏蔵のものである。『城南町史』においては7番のものに該当する[6]。石質は、火成岩の一種と思われる。多孔質でかなり硬質のものである。長径85.4㎝、短径84.8㎝、厚さ40＋α㎝を測る。上面にはセメントが塗られておりその状況は不明である。また側面も、表面が磨耗しており、人為的な加工の有無については不明である。形状は、隅丸の三角形を呈しており、安定感がある。（田中）

1957年の松本雅明氏による礎石の調査結果を記す（『城南町史』P165～P166）。なお上述の4個の礎石、礎石状石製品の記述は除く（fig. 52分布図を参照）

2. 1879番地、桑畑。砂岩、大きさは前者とほぼ同じ。未発掘、誘導路のためやや動く。
4. 1901番地、桑畑。原位置、未調査。
5. 1881番地、桑畑。原位置、未調査。
6. 1884番地、蜜柑畑。現在、平野の吉田幸助宅礎石。砂岩、長径98㎝、短径48㎝、高不明。
8. 1876番地、ラミー畑。地主脇坂氏によると、径1m余に、割石と川石を敷きつめたものが、飛びとびに数か所あり、大きい1つは径2mに及んだ。また割石や川石を40㎝幅くらいに、南北1列に数m敷いたところが3か所あった、という。これは明らかに礎石をぬいたあとの根石と、軒下の雨落の石敷であると思われる。

H 遺構の年代と性格

i 住居址

6、10トレンチで検出した竪穴は、床面の状態や遺物の出土状況から住居址と判断してよい。遺物は6トレンチの1、2、3号竪穴および10トレンチ竪穴の4カ所の竪穴のうち、1号竪穴を除いて床面直上から出土をみている。いずれも弥生後期後半～終末期のものである。それぞれの土器の示す年代を住居址の製作年代として考えてよければ、住居址は

6トレンチ ＜ 3号 → 2号
　　　　　 ＜ ……1号……
10トレンチ……

という先後関係になる。したがって、最大3か所住居址の同時存在が考えられるが、恐らく実数はこれ以上に及ぶとみられる。この期の住居址は城南町では奥野遺跡[7]にある。中九州全体を見ても、終末期の集落は竪穴の重複関係が多く知られている[8]。西天神原の今回検出のものもその通例にもれない。29、30トレンチの住居址様遺構も、遺物の出土状態、炉穴の存在などから住居址と考えてよい。出土遺物は御領式土器である。炉穴を中心にみると4㎡の拡がりが考えられる。また、この住居址が、天神原の台地周縁部に発見されたことも、従来知られている例と共通する。縄文期の住居址の発見は、数を増しつつあるが、既知の調査例からすると、この期の住居址は方形になる例が知られている[9]。（島津）

ii 溝・溝状遺構

5か所の溝は、溝1が全長を明らかにした他は、部分的な確認に留まる。溝の年代を知るためには、溝の切り込み面の土層の確認と溝に伴う遺物の検出が必要である。溝1、2、4の溝内からは、それぞれ少量の遺物が得られたが、溝底が浅く、溝内の出土遺物が溝に伴うという確認が得られない。切り込み面は、それぞれⅠ層からの切り込みである。溝1、2、4を比較してみると下記のようになる。

トレンチ		溝幅(m)	溝底高(m)	溝底の層位	溝内層数
溝1	20	0.53+α	34.81	Ⅳ	1+α
	8	0.9+α	35.14	Ⅳ	1
	14	1.05	34.69	Ⅳ	7
	18	1.05	34.90	Ⅳ	3
	19				
溝2	8	1.00+α	35.18	Ⅳ	1+α
溝4	38	1.20	35.81	Ⅳ	2
	39	1.00+α	35.89	Ⅳ	2
	40	—	—	—	—

Tab. 11　溝1・2・4 比較表

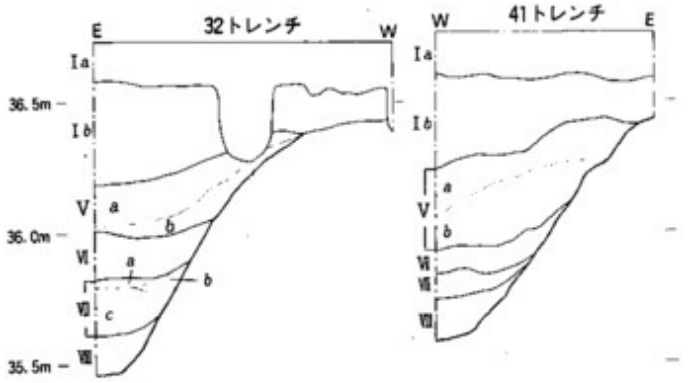


fig. 50　32・41トレンチ溝内土層図

溝1、2、4は規模に於てほとんど共通する。また、溝底の各所に拳大の石が散乱している溝内の堆積土から見て、水路としての機能は考え難く、全く時期の決め手を欠き、土地所有者の記憶にも、このような溝が存在したことは無い。或る時期の土地の境界溝などと考えられるが、古い図面等の傍証史料は無い。

溝3は41、37および39トレンチで、西側に屈折する。コーナー部を確認したので、コ字形をなすのは確実である。溝の南北の長さは、溝の内側で51mを測る。溝幅は南端でやや狭くなり1.65m（35~39トレンチ）、2.65m（35トレンチ）北端で1.7~1.95m（41トレンチ）を測る。溝はII層上面から、IV層に掘り込まれている。断面形は「V」字状を呈して、底に近くなるにつれ傾斜が急になる箇所もある（32トレンチ）。また概して外側（東側）が急で、内側（西側）がやや緩やか傾向にある。溝底は、やや丸味をもち幅約30cm前後を測る。溝底高は、ほぼ一定で北側の41トレンチで34.58m、南側の35トレンチで33.8mを測る。35、32トレンチの中位には、トレンチいっぱいに拳大、人頭大の角礫が多数見られた。溝の製作年代については、記録類は残っていない。溝内の土層と出土遺物から判断することとする。32、41トレンチを例にとると、溝内には4枚の堆積土が観察できるが、それぞれの層の出土遺物は下記のようになる。

層		32トレンチ		41トレンチ
V	a	土師器（糸切り底）	a	土師器（糸切り底）
	b		b	土師器（高台付坏）
VI				土師器（糸切り底） 縄文土器
VII	a			瓦質土器（こね鉢）
	b			土師器（糸切り底）
	c	U字形鉄製品・ガラス		弥生土器
VIII		土師器（糸切り底）		

Tab. 12　32・41トレンチ出土遺物

両トレンチとも、同一の堆積様式がみられるので撹乱とは考えられない。したがって32トレンチⅦ層出土の土師器をもって、この溝の製作年代を推定することが可能であろう。そうすると溝3の、出土遺物の示す年代は古代末～中世である[10]。しかし、この事は直に溝3が古代末～中世に示すことにはならないであろう。溝内の排土や部分的な修復等が考えられないわけではないからである。これらの事を確認するには、今回の調査地は、少範囲に過ぎると言わねばならない。このような溝がどのような機能を果していたかについて考察してみる。まず、溝内の土層が示すように、この溝は排水および用水の為の溝でないことは確実である。さらに溝がコ字形あるいはロ字形に、巡らされていると想定してよければ、溝内に存在するものに対する防御施設とみられるのではあるまいか。そう考えると溝幅が平均2.57mであるのも首肯できるのである。溝の方向が南北を示すことも、内部に存在する建造物の方向と関係あると考えられよう。溝が立地する箇所は、現状でみるなら、西天神原の最高所に位置する。溝3の37トレンチと41トレンチを結ぶ一辺は、32トレンチで、37mコニターと直交するが、溝3は41トレンチで西に折れ、直線状に続くと予想される。こう見れば、溝3は北辺では、37mコニターとほぼ並行する。このように、西天神原の最高所を溝が囲繞することらしいことも内部に有力な施設があることを予想させるのである。

溝5は、南東から北西方向に延びているとみられるが、延長の状態を確かめていない。掘り込み面はⅡ層上面かⅠ層中に存るとみられる。遺物は土師器、弥生、縄文土器が出土したが、溝内の層からの出土はなく時期は明らかでない。溝3に比して、溝の規則性が少ないようにみられる。

17、16、13トレンチの溝状遺構は、遺構の一端を検出したと留まったので、全体を明らかにしていない。遺構に直接伴う遺物が無いので年代の想定する手掛を欠く。このような大きな溝状の遺構は、同じ舞ノ原台地の南端で調査された沈目立山遺跡でも知られている[11]。調査者は、これを古代の生活用水を求めるための、天水の湛水施設ではないかと推定している。（島津）

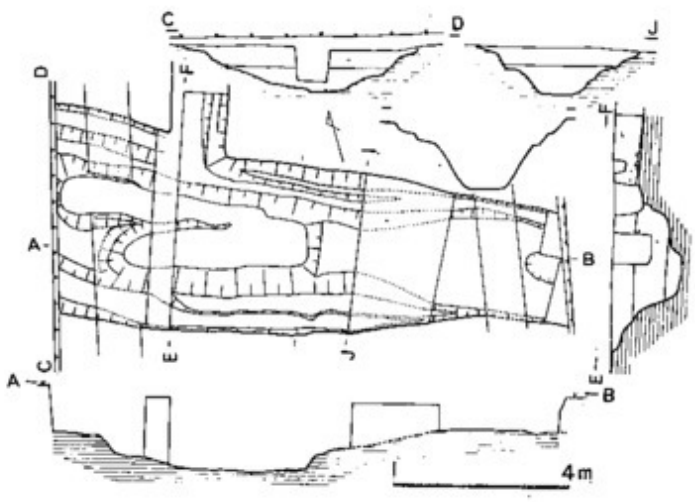


fig. 51 沈目立山遺跡 水溜め実測図

（単位m）

トレンチ名	溝 Ⅱ層上面	幅 Ⅲ層上面	深 Ⅱ層上面	さ Ⅲ層上面	溝底幅	溝底標高	深さ※	東壁伏角 最大	東壁伏角 最小	西壁伏角 最大	西壁伏角 最小	東西壁間角度 最大	東西壁間角度 最小
41 北				1.69	0.55	34.58	1.74	54°	52°				
41 南				1.63	0.51	34.68	1.89	66°	64°	59°	51°	57°	55°
43 北													
43 南		2.34		1.71	0.53+α	34.56	2.47						
32 北	3.0	2.65	1.92	1.75	0.45	34.46	2.13	69°	56°	59°	56°	68°	52°
32 南	2.94	2.68	1.83	1.63	0.48	34.42	2.07	70°	57°	59°	51°	72°	51°
31 北													
31 南		2.75		1.76	0.45	34.38	2.56						
22 北													
22 南						33.95	2.10			48°	44°		
12 北													
12 南													
35 北		2.57		2.30	0.34	33.8	2.73	70°	60°	67°	62°	58°	43°
35 南													
37 北													
37 南													
平均		2.57		1.78	0.47	34.34	2.21	65°8′ 57°8′ 61°48′		58°4′ 52°8′ 55°36′		69°24′ 55°48′ 62°6′	

※ 深さは36.5mを0とする。

Tab. 13 溝 3 の 計 測 値

iii 集　石

集石１は、楕円形の土壙の中にみられる集石で、全掘はしなかったが、土地所有者からの聞取りやボーリング棒による探索の結果から考えると、土壙全面に礫は存るらしい。25トレンチの上下の礫の中、および土壙底から出土する須恵器は、どちらも同質のものであるので、土壙を作って、ほどなく礫を入れたものと考えられる。出土の須恵器は、ぶ厚く口頸部の波文の雑な大甕の破片であり、古墳時代以降の所産と考えられる。また、１片ではあるが布目瓦も出土しているので留意される。このような集石が、どのような性格を持つものか不明である。

集石２は小範囲の集石であり、下に浅い皿状のピットを認めた。礫の間から土師器、須恵器が出土し、その形態より平安時代の所産だとみられる。さらに、礫群の西側のピット上から出土した須恵器は、上半を欠失しているが、やはり同期のもので、共者には有機的な関連があると想定される。埋葬遺構などに関係あるものであろうか。　（島津）

iv 礎石・礎石状石製品

調査した４個の礎石、礎石状石製品は、自然石にわずかに手を加えたもの（fig.49の２、３）と、原石に大幅に手を加え 原面を留めないもの（fig. 47、fig. 49の１）がある。 前者については、これを１種の自然石礎石とみることは可能であるが、後者については、これを礎石とする決手を欠く。

２トレンチ出土のものは、先述のように側面および底面の仕上げが雑であるのに対し、上面は平滑で丁寧に調整されている。また上面を水平にし、長軸が東西方向と一致することが偶然でなければ、この石は上面が使用され、しかもある種の規定性を有していたと考えることが可能である。

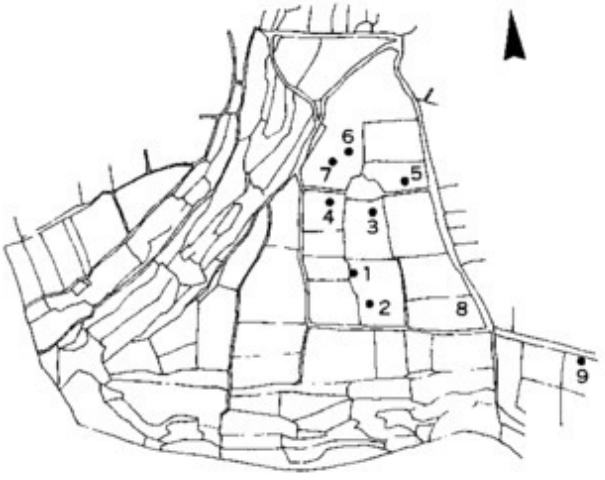


fig. 52　礎石分布図(松本雅明氏に拠る)

この石と土壙の層位関係についてみてみると、石の上面はⅡ層とほぼ同じ高さである。仮にⅡ層の中位～下位面に、この石を掘えた時期の文化面が存するとしても、当初から石の大部分は埋没していたことになり、通有の礎石とは据

え方を異にする。

西天神原の礎石、礎石状石製品については松本雅明氏により分布図が作成されている。[12] それによれば8個の礎石、礎石状石製品が存し、礎石下の根石や軒下の雨落の石敷様の遺構も知られている（fig. 52）。今回の調査では、それ等の方向や配列状況を把握することは出来なかった。

註

(1) 松本雅明「古代」『城南町史』 1965年 熊本

(2) 佐賀大学 日野尚志助教授の説。昭和52年の熊本県内条里総合調査の折の所見。未発表

(3) 鞏倉克伸「塚原周辺の地形地質」『塚原』 1975年 熊本

(4) 小林行雄「いしーざら」『図解考古学辞典』（創元社） 1959年 東京

(5) (1)の松本氏の論考

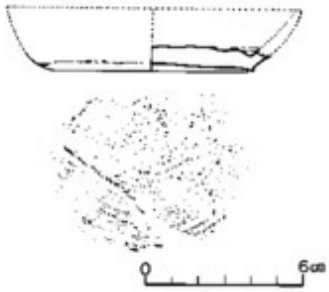
(6) (1)の松本氏の論考

(7) 丸山武水・松村道博編『沈目奥野遺跡』 1975年 熊本

(8) 緒方勉『諏訪原遺跡発掘調査概報』 1971年 熊本

(9) 島津義昭「熊本県の考古学」「九州考古学」№52 1976年 福岡 の表1熊本県内縄文時代住居址一覧表を参照

(10) 出土の土器について説明する。土師器の坏で、上半を欠失する。底径 7.8cmを測る。やや底部の中央部はあげ底気味を呈す。糸切り離し痕が明瞭に残る。赤褐色を呈し、作りは丁寧ではない。底部内面に黒色有機物の付着をみる。熊本県内の古代末から中世にかけての土師器の編年は未だ着手されていないが、大宰府および周辺での研究を参照すれば、土師器における糸切り離し技法の出現は、11世紀末～12世紀頃とみられるという。中九州においても近似の時期が推定される。



32トレンチ（溝3の溝底）出土土師器

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」「同(2)」『九州歴史資料館研究論集2』『同3』 1976年・1977年 福岡

(11) 緒方勉編『沈目立山遺跡』 1977年 熊本 所収 緒方勉「歴史時代（溝）」および斉藤林次 城南町沈目含土器地質報告（中間報告）

Ⅳ まとめ

A 嘉島町の調査結果

嘉島町大字上六嘉字益城の発掘調査では、ごく少量の土器類を検出したのみで、そこに人間生活の有力な痕跡を見い出すことは出来なかった。考古学的所見による限り、ここに何らかの遺構が存在したことは証明出来なかった。

しかし、この地が「益城」（ましき）と呼ばれることは事実であり、そのことの意味について考えておかねばならない。益城郡の歴史的な変遷については、既にいくつかの論考がある[1]が、ここで問題になるのは嘉島町大字上六嘉字益城が古代の益城郡でどの郷に属していたか、である。

古代の益城郡には8郷が存していたが、その比定地については諸説があり一定していない[2]（Tab.15）。益城郷は、郡名を負う郷として注目される。鄮岡良弼氏は、益城郷を郡家の存在する郷とし、阿蘇家文書、建久6年（1195）の鼈宮などにみえる甲佐宮領域をもって、郷域と想定された[3]。すなわち中世の甲佐郷内の23か村が相当する。一方、松本雅明氏は、旧豊田村鰐瀬大明神遺跡を郡家に比定し、さらに近くに肥後最古の寺院、隅内廃寺の存するところから、この一帯を益城郡と想定された[4]。

両氏の説とも、益城郷を益城郡内の政治、文化の中心地とみる点で、共通している。郡名を背う郷は、古代の九州諸国に散見できる[5]が、郡家の存在の有無については、考古学的調査が未着手で今後の大きな課題となっている。

小字「益城」を周辺地名との関連で考えてみたい（fig.3）。小字「益城」は、西側の南北に延びる小さな水路を境として、大字「鯰」、大字「上島」と接する。また、大字「上島」を除いて、鯰、下六嘉、上六嘉のそれぞれに小字「花田」（はなだ）が存在することが注意される。土地の人は、それぞれに大字名を入れて呼び区別する。（例えば「鯰の花田」「下六嘉の花田」「上六嘉の花田」といった具合にである）何故、このように大字を異にして、同一の小字が多数存在するのであろうか。

「花田」の意味については、先端を意味する「はな（鼻）」が、表記される段階で「花」と表記されたと解することが可能である[6]。そうしてみると、小字「花田」が、各大字境に接して存在する理由が合理的に解釈できるのである。すなわち、小字「花田」は各大字の中心地から、最も遠い所にあり、まさしく村の鼻にふさわしいのである。

次に小字「益城」が、小字「花田」に取りかこまれている理由が問題になる。「花田」の命

郷名	渋江松石（1801）	八木田政名(1841)	吉田東伍（1901）	邨岡良弼（1902）	松本雅明（1977）
雷麻	たうさ→かうさ 甲　佐	不分明	タイマ 今詳ならず 御船木倉の辺？	多岐萬 未審	とうま 豊野村糸石字田馬 豊野村・中山村 中山郷・豊田荘・甲佐郷の一部
子按	こもち→ともち 砥　用	不分明	コクラ(子枝) 今詳ならず 子佐の誤 →甲佐？	木乃久良（木鞍） 南木倉、西木倉、北木倉 （御船・瀧川・荒瀬・小坂・高木・小池・田代・上野等　19邑） 木倉手永――郷域	このくら 御船町、木倉 木倉・御船・豊秋・陣・白旗　甘木荘の南部
加西	かにし→わにせ 鰐　瀬	不分明	カ　セ 今詳ならず、不審 加勢川→六嘉村、上島村が加西郷の旧域？ （上島は託麻郡上島郷）	可　世 加勢は加西 加勢川は一名木山川 （福原・木山・宮園・安永・馬水・総領・福富・廣崎・沼山津・牟田等　15邑） 沼山津手永　木山郷	か　せ 加勢川 杉上村の西北部 杉合村の北部 大島村仲間付近
坂本	古のまま 坂　本	中山、杉島、手永に坂本村あり	サカモト 杉上村（大字阪本） 杉合村（大字釈迦堂） 守富村	佐加毛登 下益城郡坂本村 （拂川・樺・草野・岩野・水早・河内・中村・松野原・白石野・長尾野・佐俣の18邑） 中山郷	さかもと 杉上村坂本（平野と合体して現在坂野） 杉上村の北部、隈庄町 豊秋村・陣村付近 隈牟田荘
益城	不　詳	不分明	マシキ 今詳ならず 隈荘豊田？	萬志岐 甲佐宮領 （小鹿・上揚・寒野・豊内・横田・府領・田口・中郡・堅志田・萱野・岩下等23邑） 甲佐郷	ましき 豊野村・乙女村の北部 豊野村の北部 豊田荘
麻部	まべ→なべ 南部（託麻郡）	不分明	ヲ　ベ 今詳ならず 小熊野郷、堅志田 中山の旧名？	乎美部 甘木荘麻生原村一邉名 （荒原・山出・八町・古閑・早川・糸田・麻生原の諸邑） 甲佐手永　甘木荘	あさべ・あさうみべ・おうみべ 乙女村麻生原一邉名 甲佐町・竜野村・宮内村・年魚村　付近 甲佐郷
富神	とかみ→ちかみ 近見（託麻郡）	不分明	トムチ 砥　用	萬加美 富は真の譌 （古保山・曲野・大野・萩尾・蒲河内・松橋の諸邑） 河江手永　豊田荘 登牟知→砥用村	とむち 砥　用 砥用町（原町、西砥用村） 東砥用村 甲佐郷
宅部	矢　部	矢　部	や　べ 矢　部	也加倍 矢部（濱町） （下市・長原・犬飼・津留・荒谷・萬坂・猿渡・蘆屋田・山田・杉本・轟等75邑） 矢部荘	やかべ 矢　部 浜町・下矢部村・清和村・龍水村・白糸村・御嶽村・中島村・名連石村 矢部郷

Tab. 15 益城郡郷比定一覧表

名が先に推定したとおりであれば、「花田」の成立は、各大字境が確定した段階であると想定できる。「益城」は「花田」に先行して存在した地名であると想定してもよいのではあるまいか。そうすると、現在より広範囲に「益城」が存在した可能性も考えられる。

最後に、この地一帯に分布する条里型地割と小字「益城」の関係について述べておきたい。嘉島町の水田地帯には、条里制地名が残存し、条里型地割がみられるが、復原すると、南隅を1坪とし、西隅が36坪の千鳥式で、条里の方向はN22°Wを計る。[7] それからすれば小字「益城」は、25・26坪に相当することになる。

熊本県内には、益城を付す名称は、郡名（上・下益城郡）町名（益城町）の他に鮑託郡天明町大字海路口に小字「益城開」がある。これは、干拓事業に伴う、近世の地名で、占有地名の一種とみられる。（島津）

B 城南町の調査結果

城南町大字坂野字西天神原の発掘調査では、多種の遺構を検出した。それぞれの性格については、前述のとおりである。遺跡全体に、近世の撹乱が多く見られ、充分な成果をあげることができなかった。ここでは軍団と溝3について考えてみたい。[8]

軍団は、大化改新によって成立した律令的軍事体制の基本をなす組織である。養老令の規定によると、兵士は各戸の正丁のうちから3丁に1人の割で徴兵され、近地の軍団に配属された。通常、兵士1000人を基本とし、大毅・少毅などの指揮官がおかれた。大毅、少毅、毅などは軍毅と総称され、その段位、勲位などは国司が選任し、毎年考第を立てて兵部省に送った。また兵士は隊伍に編成され、弓馬の巧みな者は騎兵隊、その他は歩兵隊となった。

このような、律令的軍団制は、大宝令の施行前後には整備され、8世紀全般を通じて全国的に配置され、兵士の徴発がおこなわれた。

しかし一方では墾田永世私財法の制定（天平15年・743）前後から大土地所有の動きが活発化し、没落した班田農民が大土地所有者（地方豪族）に隷属していく傾向に拍車をかけ、律令制の動揺が始まる。また国司、軍毅による軍兵の私化のため、数度の大政官奏をもって、諸国の兵士の減少を計ったが、ついには、延暦11年（792）に陸奥、出羽、佐渡、大宰管内諸国を除き軍団を廃止した。[9] 廃止した諸国には郡司の子弟等より構成する健児を設置したが、大宰管内では、天長3年（826）に兵士、軍団を停止して選士を置いている。[10]

肥後国には、4軍団が設置され、4,000人の兵士が配属していたが、弘仁4年（813）には

2,000人に減少せしめられた。[11]

軍団の肥後における設置場所については、明らかでないが、松本雅明氏は、益城郡、託麻郡、玉名郡か菊池郡、および八代郡に軍団の設置を考えられている。[12]

さて、西天神原の調査で検出された溝3は、建物の外郭に巡らされているのではないか、と想定したが、内部の状態については明らかにすることは出来なかった。この溝は東側の一辺の長さは51.0mを測り、大略半町の値を示す。

この溝の廃絶せられた時期は、溝底の出土遺物の年代より古代末から中世と推定され、軍団の時期より下降するといわねばならない。

松本雅明氏の提出されている「益城軍団」については、これを直に肯定および否定する資料を得ることは出来なかった。

今回の調査を基にした、今後の考古学的調査が期待されるのである。　（島津）

註

(1) 阿蘇品保夫「古代中世の益城郡と甘木荘」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告　18集　1975年　熊本
圭室諦成『熊本の歴史』　（日本談義社）　1954年　熊本

(2) 表の作成にあたっては、以下の論考を参照した。
渋江松石「肥後郷名考」　1801年（熊本県立図書館蔵　上妻文庫）
八木田政名『新撰事蹟通考』1841年　『肥後文献叢書』第3巻　（歴史図書社版）　1971年　東京
吉田　東伍『大日本地名辞典』　（冨山房）　1901年
岡　良弼『日本地理志料』　1902年
松本　雅明「木原氏の益城国府説批判」「熊本史学」第49号　1977年

(3) (2)の岡氏の論考

(4) (2)の松本氏の論考

(5) 大宰管内の諸国で郡名を有する郷が存するのは以下の通りである。正宗敦夫編纂・校訂『倭名類聚鈔』（風間書房）1970年　東京　による。

筑前國	志摩郡	早良郡	那珂郡	筑後國	竹野郡	三猪郡	山門郡
	穂浪郡	御笠郡					
豊前國	なし			豊後國	直入郡	大野郡	
肥前國	基肄郡	養父郡	神埼郡	肥後國	阿蘇郡	合志郡	益城郡
	杵島郡	彼杵郡			天草郡	葦北郡	
大隅國	菱刈郡	大隅郡	熊毛郡	薩摩國	甑島郡	阿多郡	頴娃郡
					揖宿郡	給黎郡	
壹岐島	石田郡			對馬島	なし		

(6) この見解は、1978年1月9日の現地検討会の時、阿蘇品保夫氏により提示されたもので、氏の教示を深く感謝する。

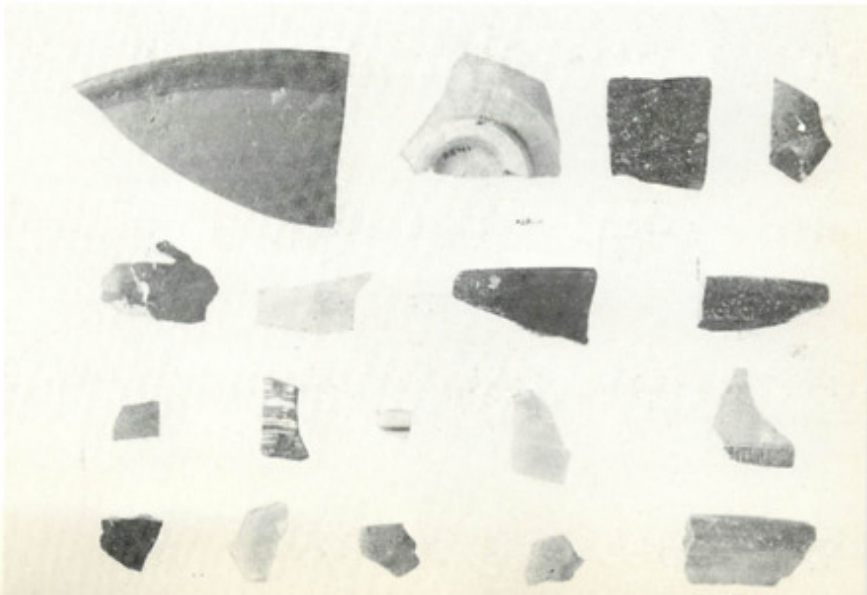
(7) 牧野洋一「各地の条里復原（益城郡の条里）」『熊本県の条里』　熊本県文化財調査報告　第25集　1977年　熊本

(8) 軍団の記載については、主に笹山晴生「日本古代の軍事組織」『古代史講座（古代国家の構造下）』5　（学生社）　1961年　東京を参照した。

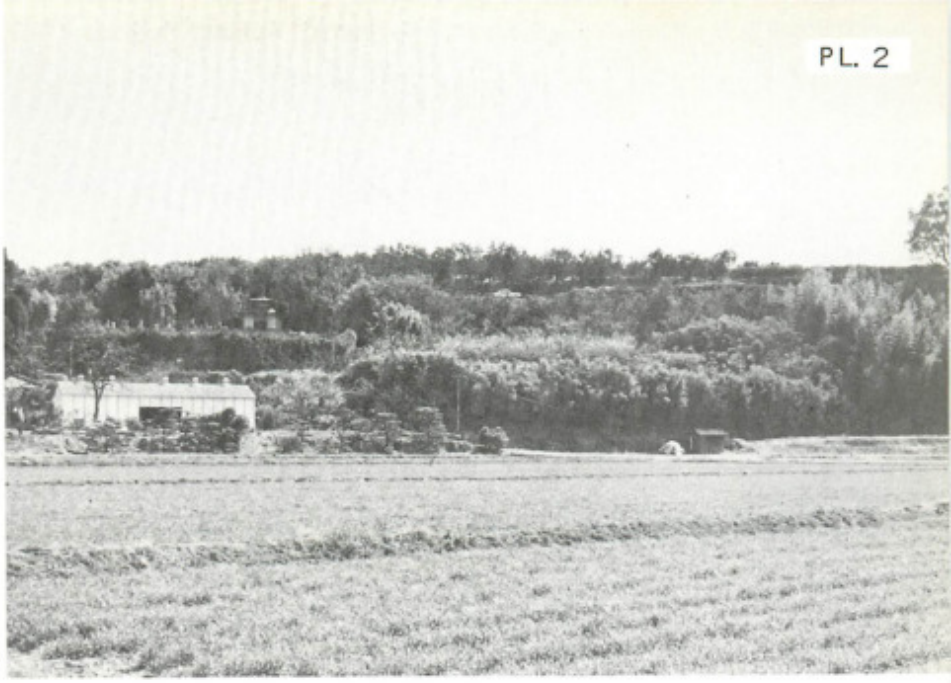
(9) 太政官符　應差健兒事　延暦11年6月14日　黒板勝美・國史大系編修會編『類聚三代格』巻第18（吉川弘文館）　1972年　東京
(10) 太政官符　應徴兵士置選士衛卒事　天長3年11月3日　黒板勝美・國史大系編修會編『類聚三代格』巻第18　（吉川弘文館）　1972年　東京
(11) 太政官符　應減定諸國兵士事　弘仁4年8月9日　黒板勝美・國史大系編修會編『類聚三代格』巻第18　（吉川弘文館）　1972年　東京
(12) 松本雅明「古代国家の確立（軍団）」『熊本縣史（総説編）』　1965年　熊本

1．益城調査風景

2．益城調査地
（ヤ3地点）



3．出土遺物



1．西天神原遠景
（北より南を見る）

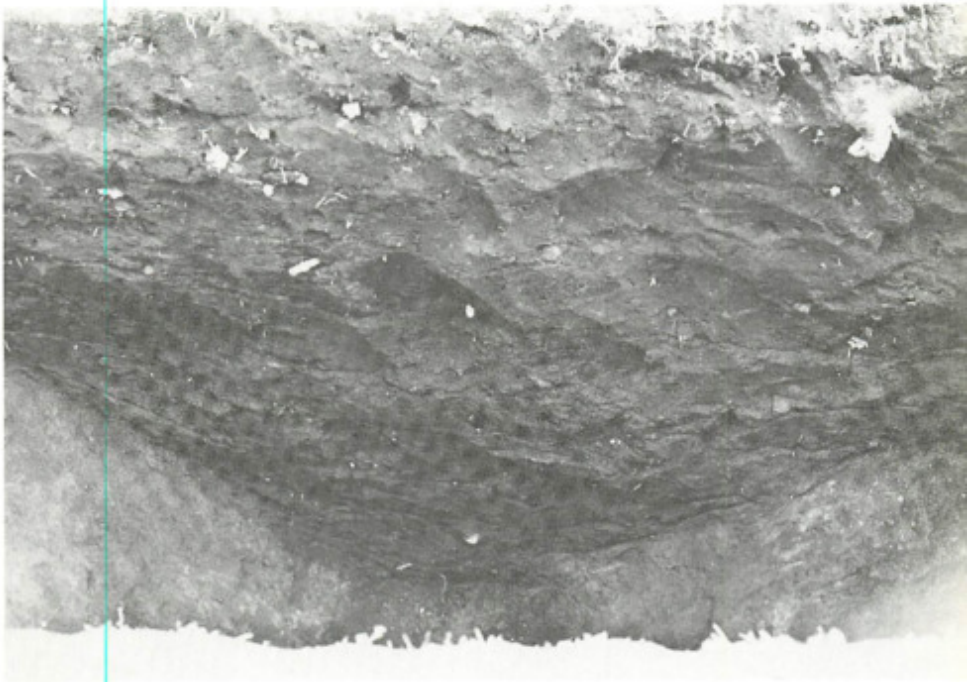
2．西天神原遠景
（南から北を見る）

1．20トレンチ(北より)

2．11．7トレンチ
(東より、むこうが11
手前が7トレンチ)

3．1トレンチ(南より)

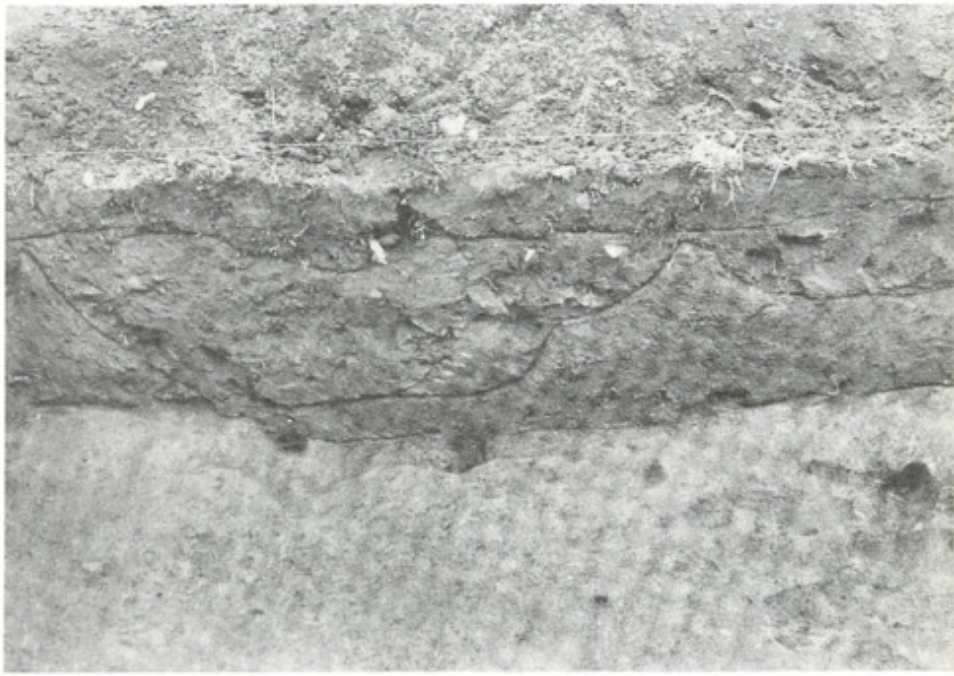
1．28トレンチ
（北壁）



2．32トレンチ
（北壁）

3．14トレンチ
（東壁）

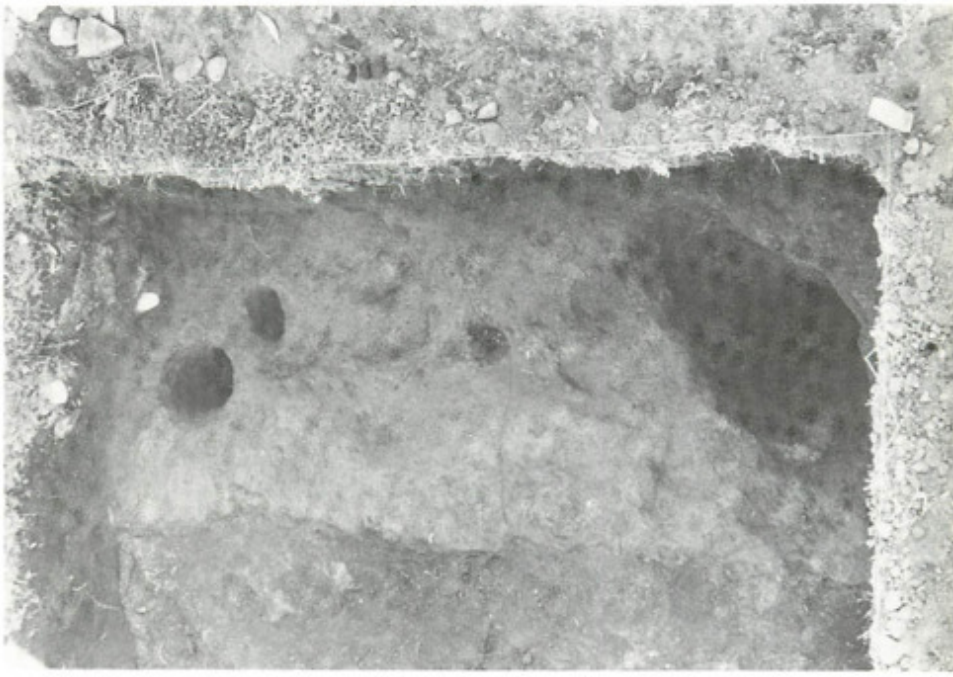
1．18トレンチ（東壁）



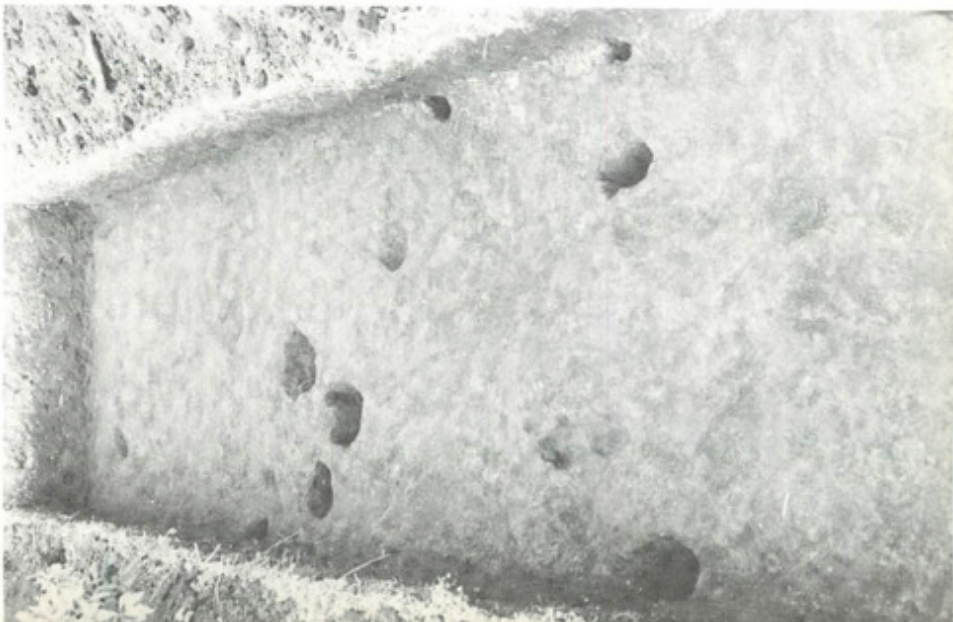
2．1トレンチ（南壁）

3．13トレンチ（南壁）

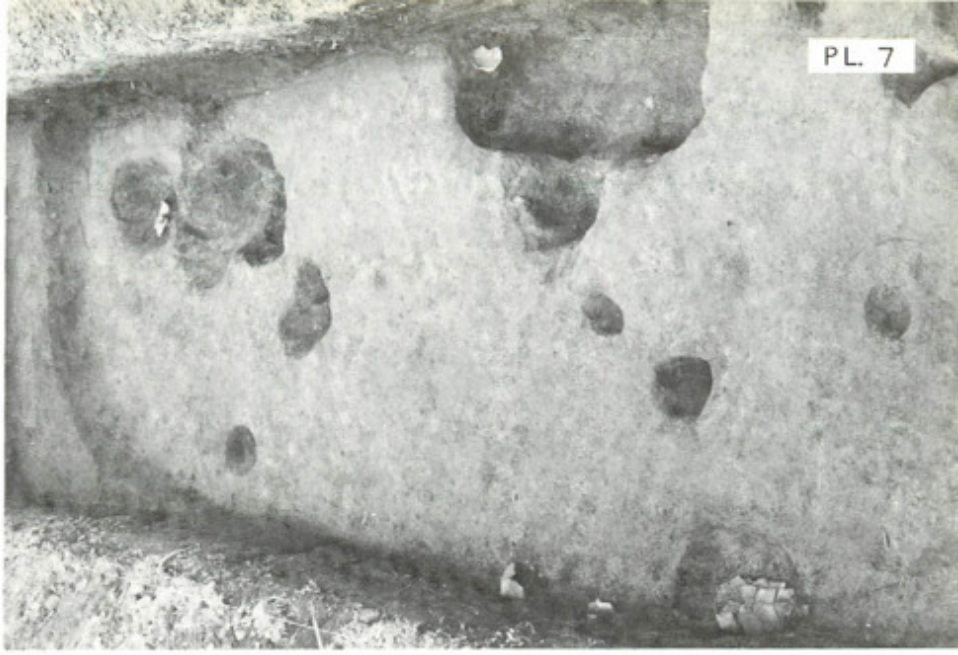
1．8トレンチ(西より)



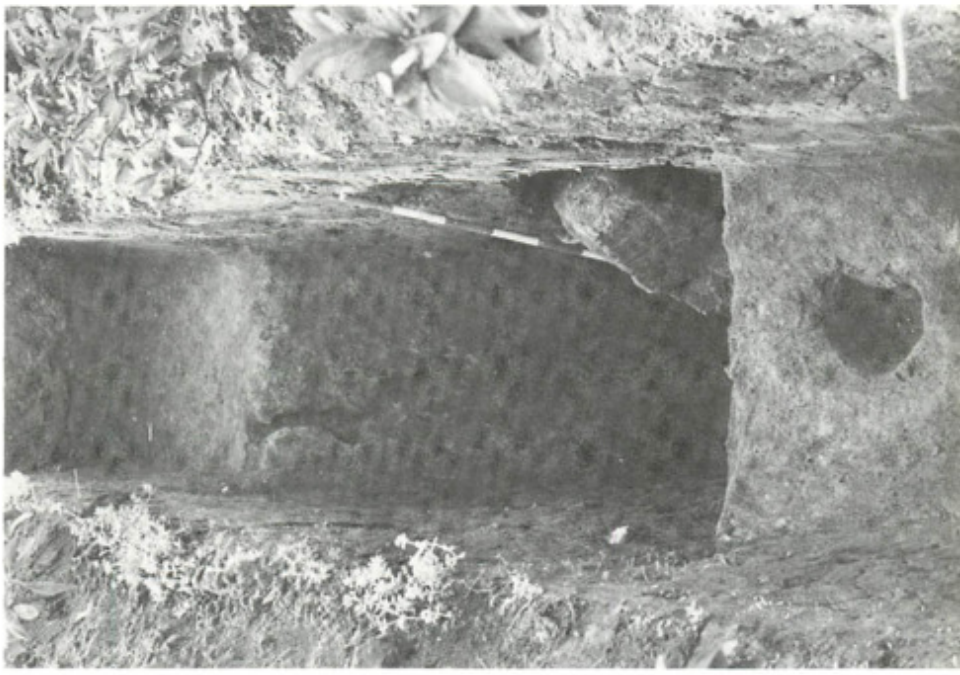
2．14トレンチ(東より)



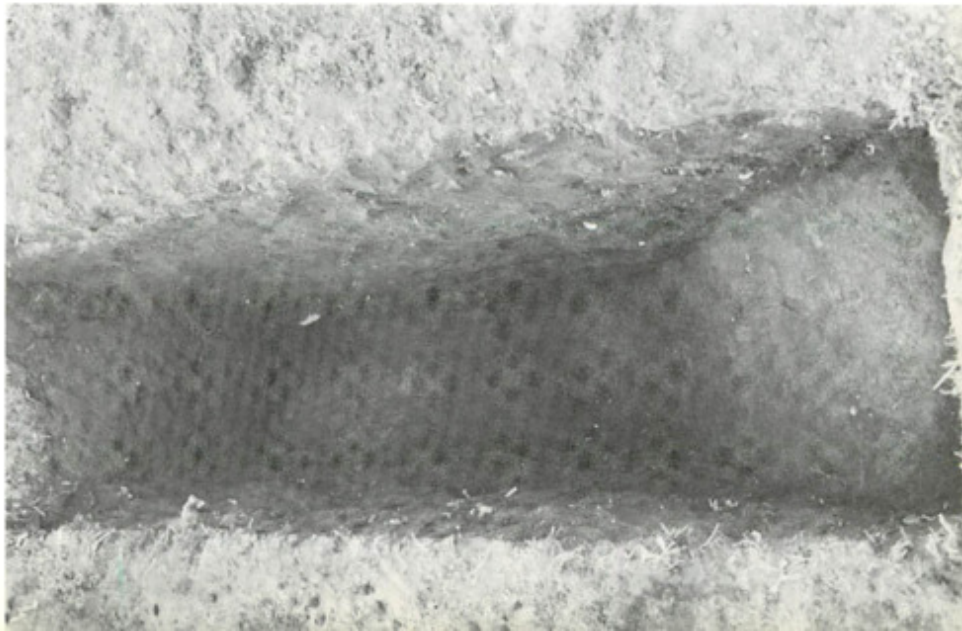
3．7トレンチ(南より)



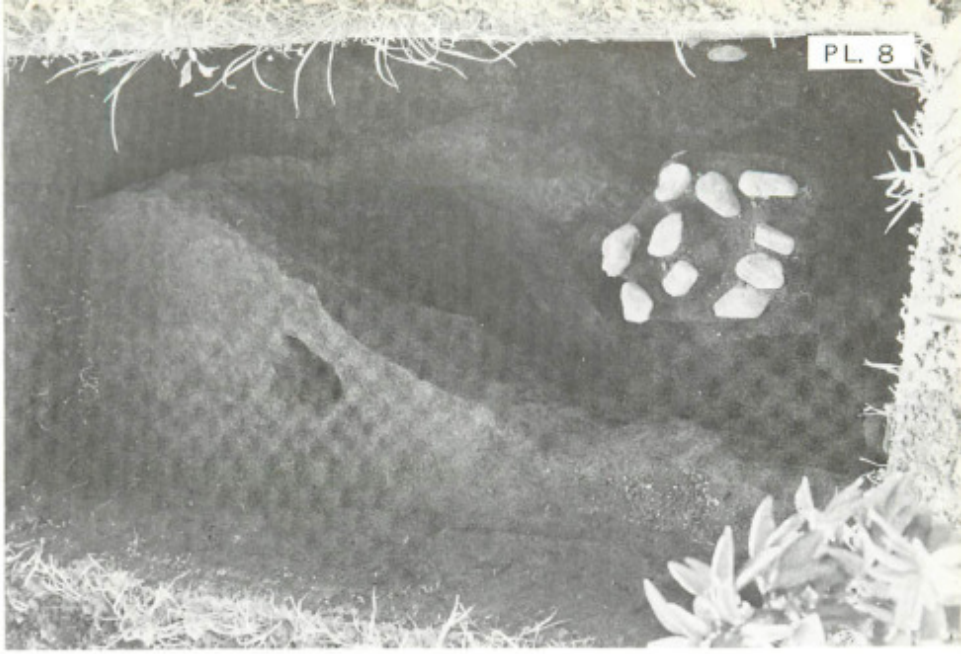
1．10トレンチ
（東より）



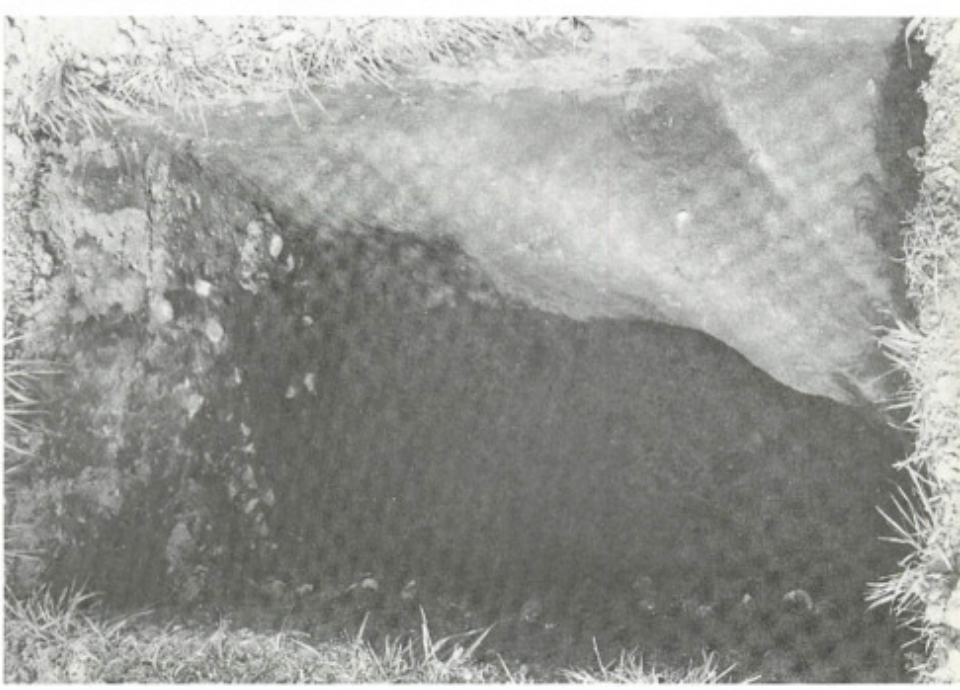
2．43トレンチ
（東より）



3．41トレンチ
（東より）

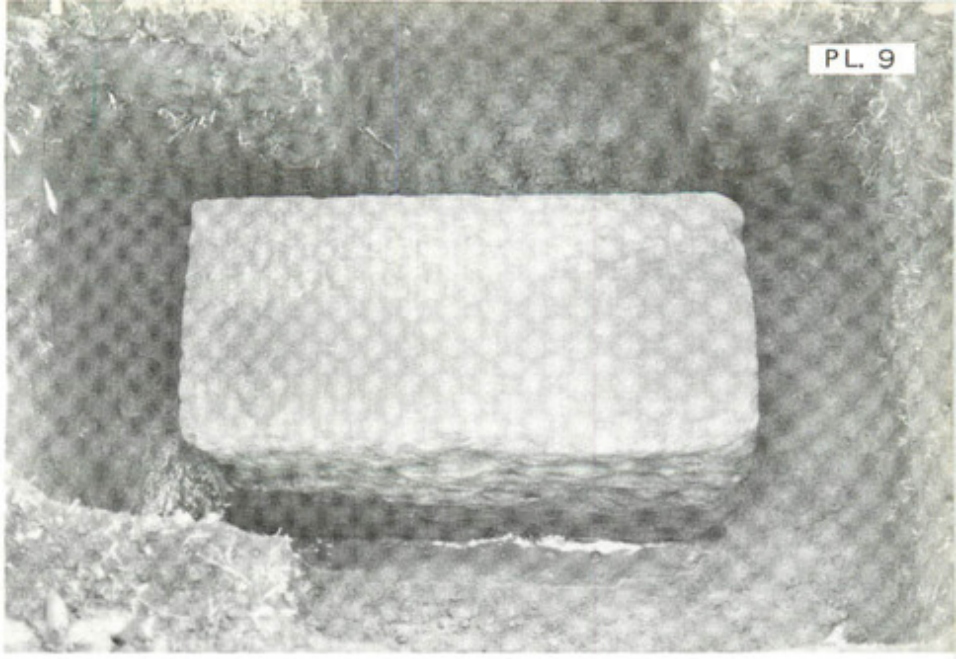


1．17トレンチ（東より）

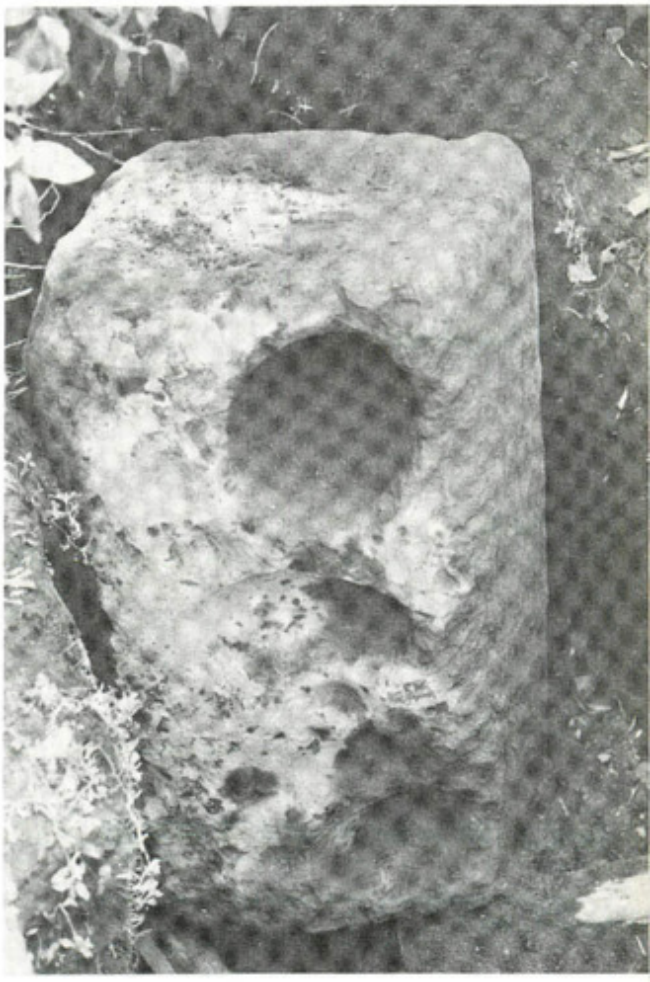


2．28トレンチ（南より）

3．28トレンチ（南より）
集石上面

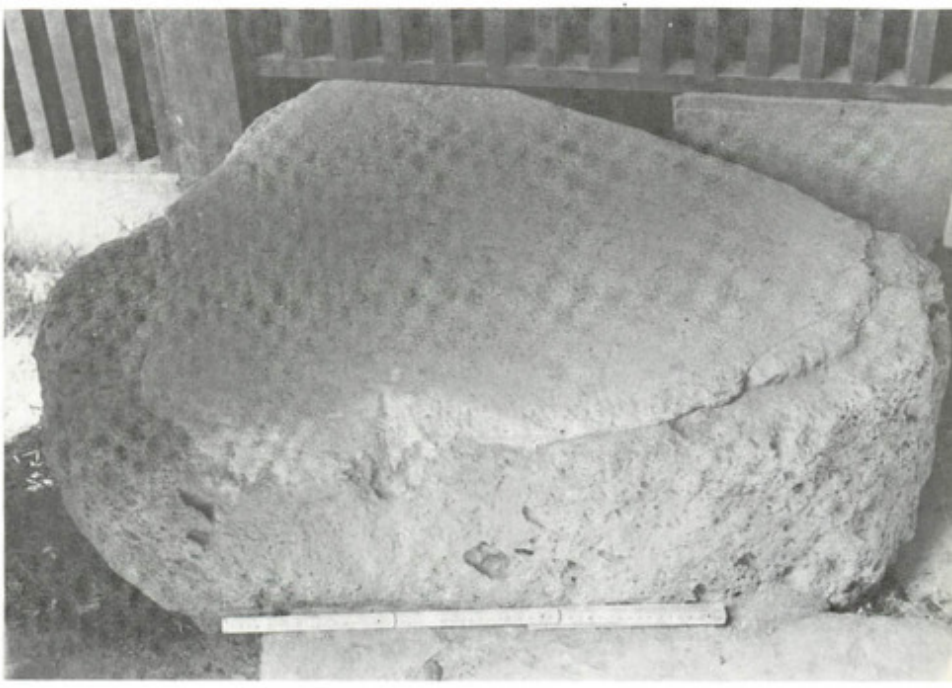


1．2トレンチ(北より)



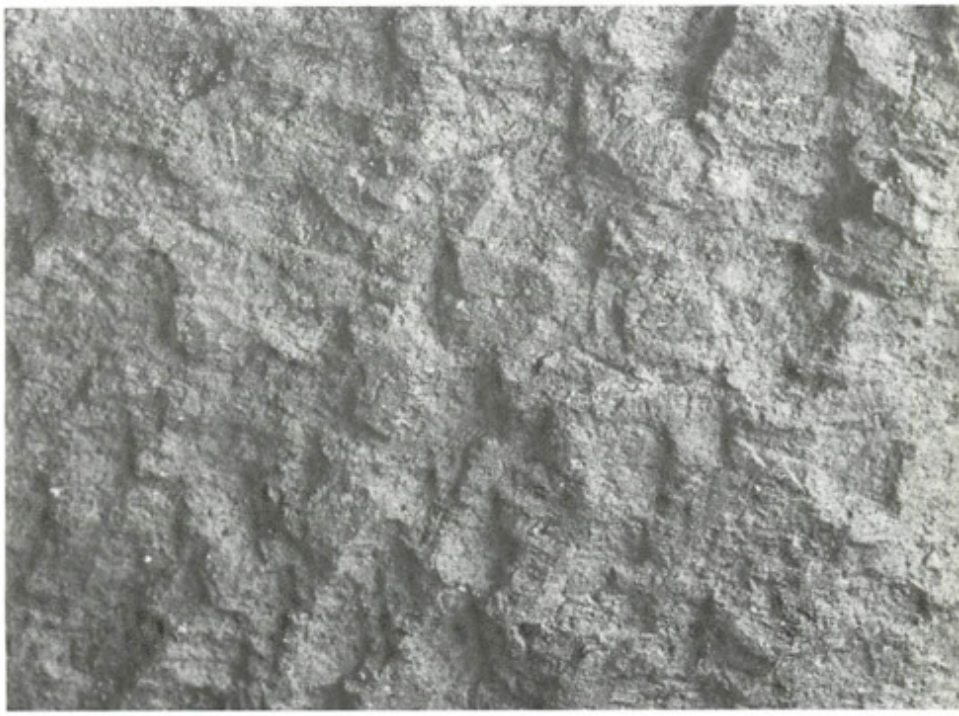
2．礎石状石製品(裏面)

1．礎石状石製品
（吉田振作氏宅）

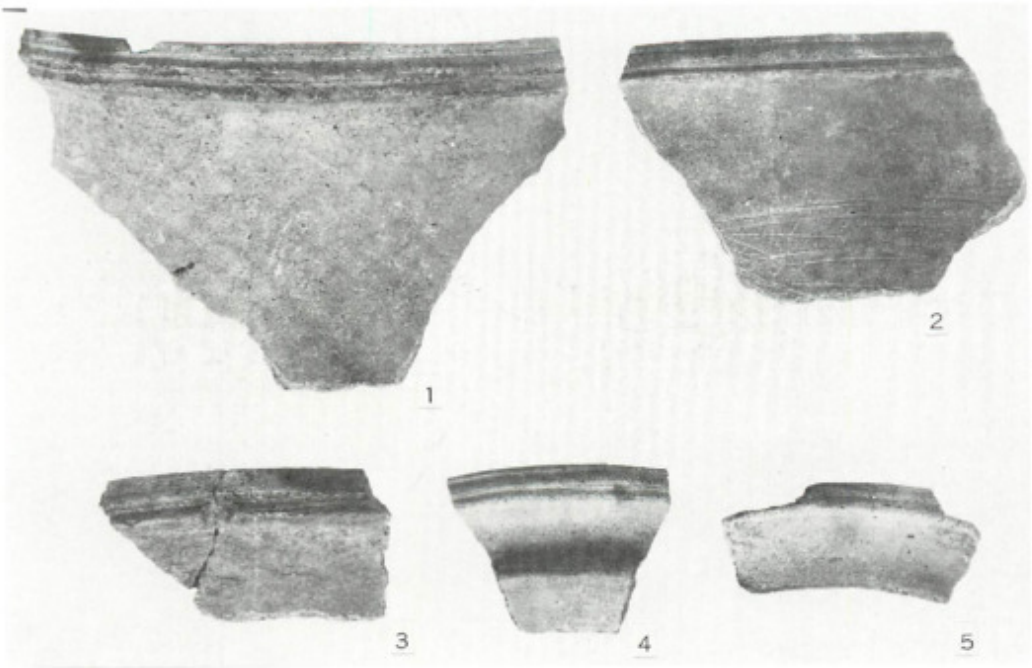


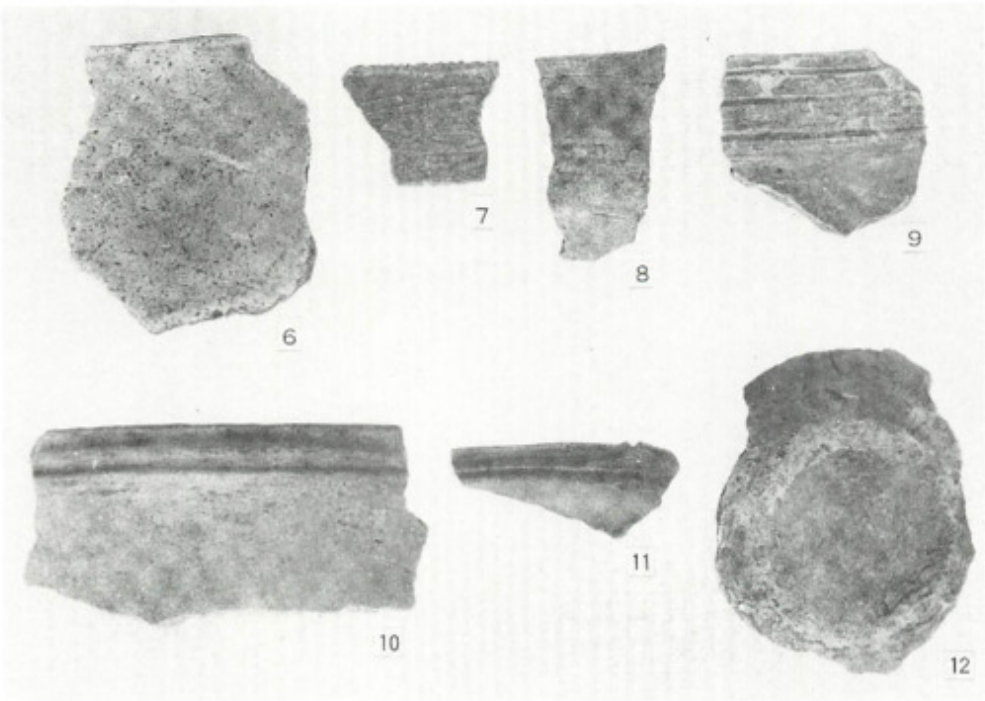
2．礎　石
（吉田振作氏宅）

1．礎石状石製品
側面部分図

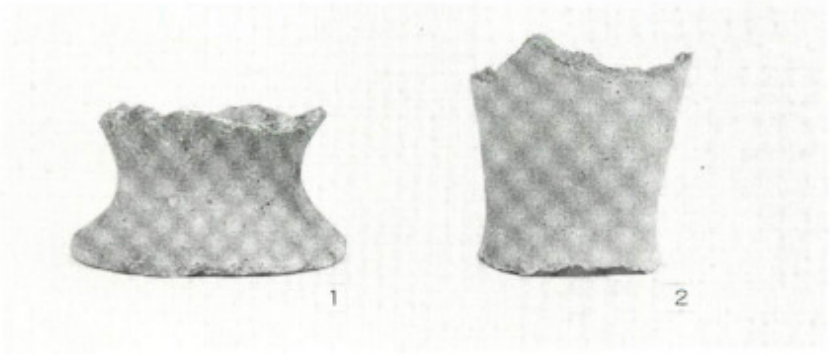


2．同上側面図
（南側）


1
2
3
4
5


6
7
8
9
10
11
12

13
14
15


1

2

3

4

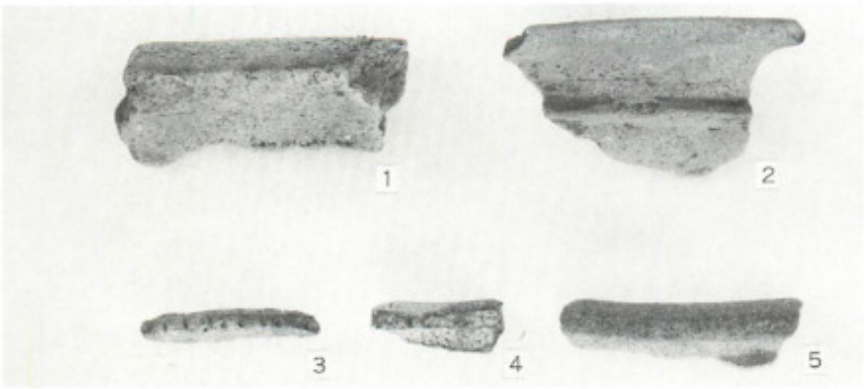
5

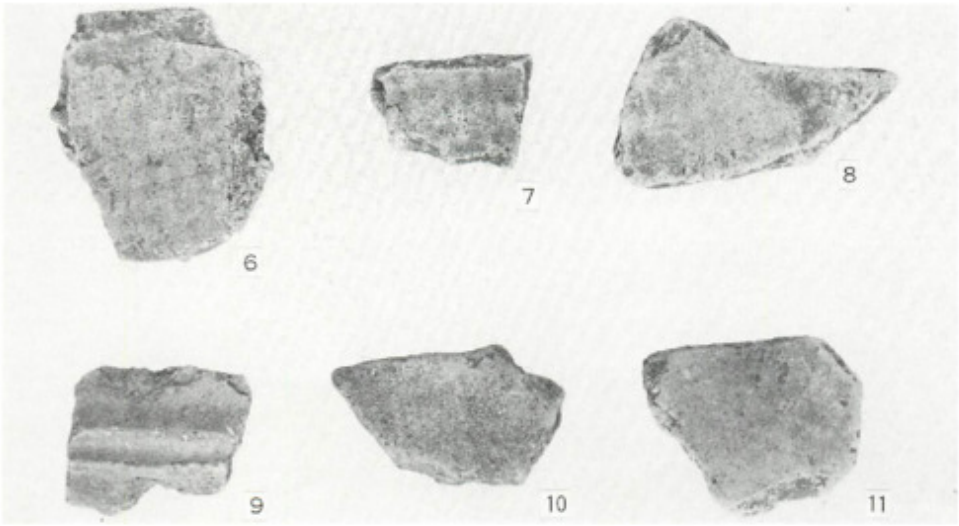
6

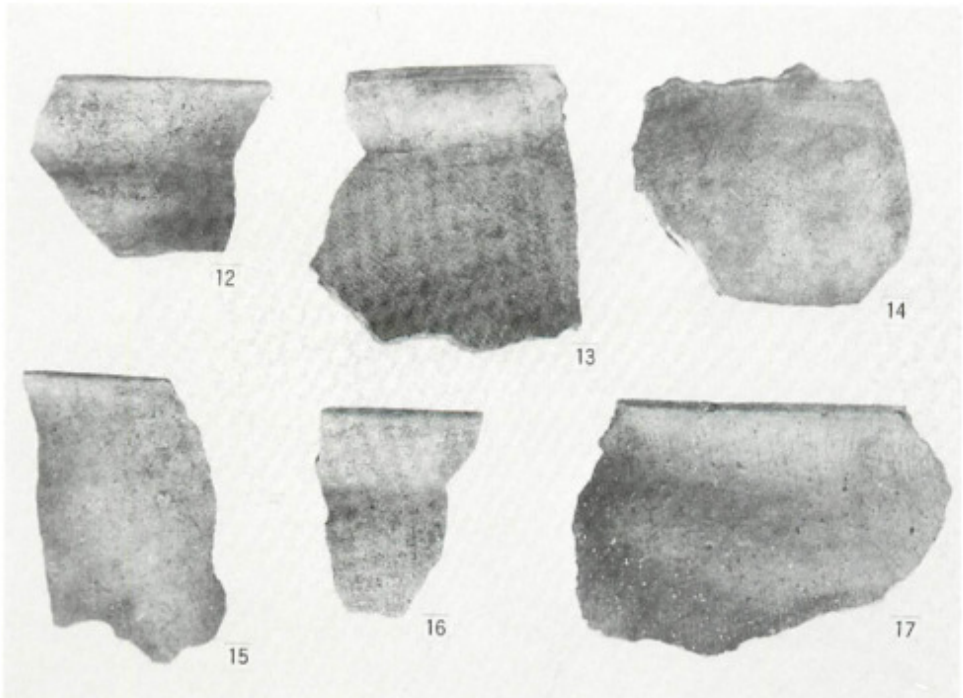
7

8

9


1
2
3
4
5


6
7
8
9
10
11


12
13
14
15
16
17

1

2

3

4

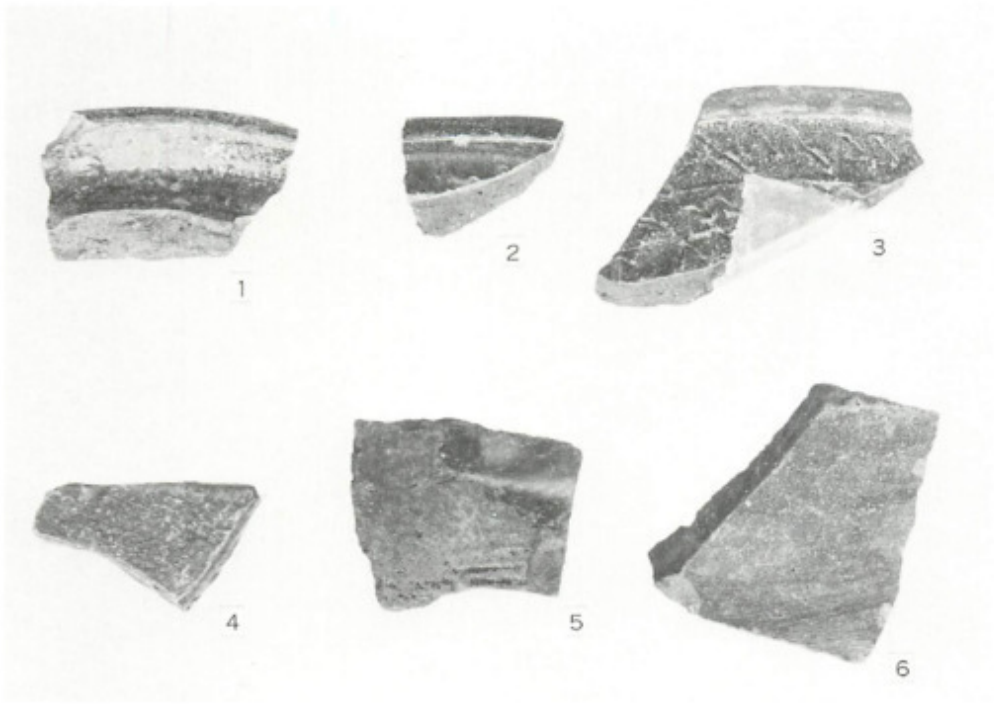
5

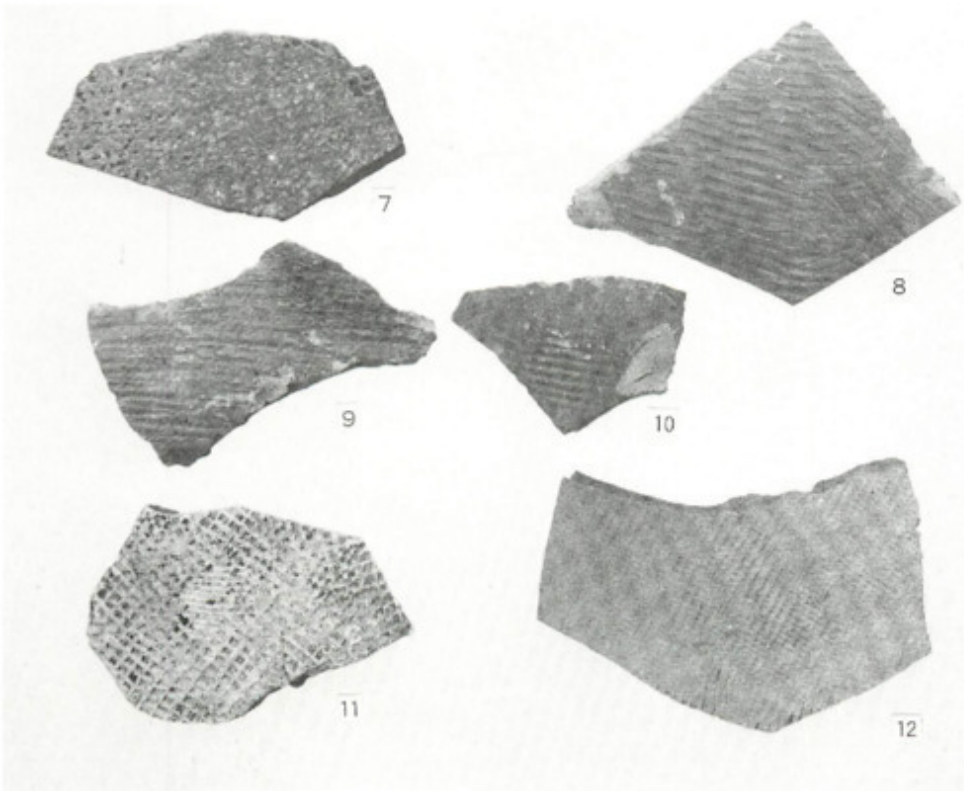
6

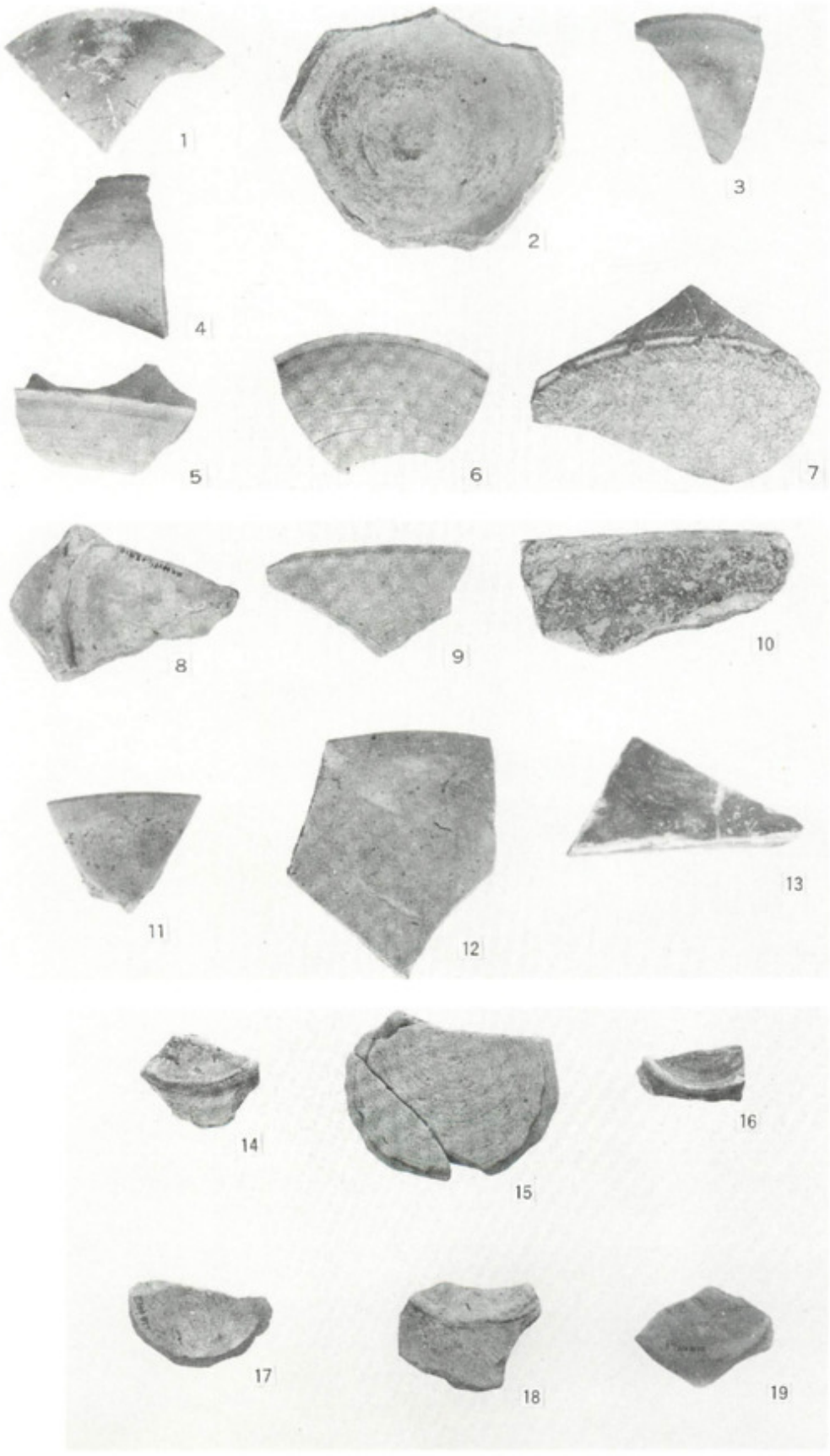
7

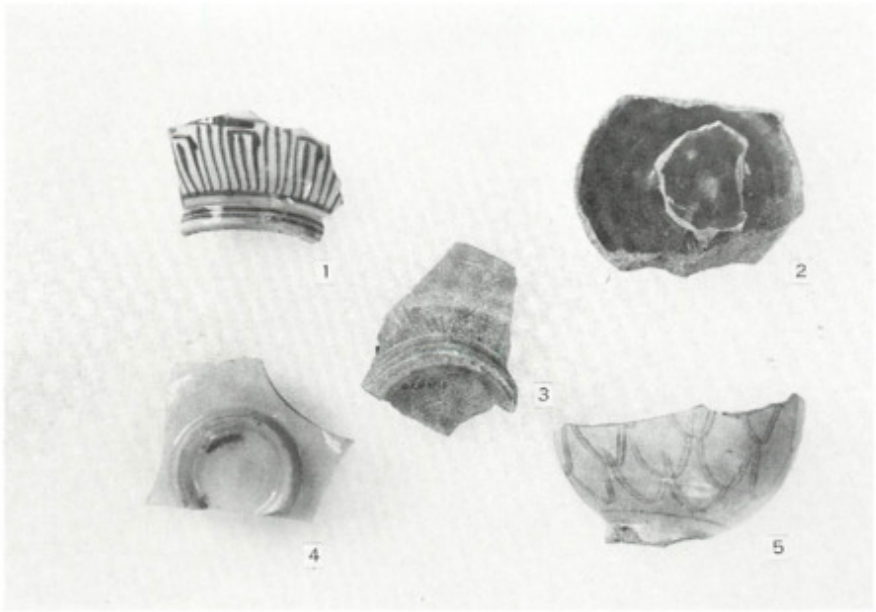
8

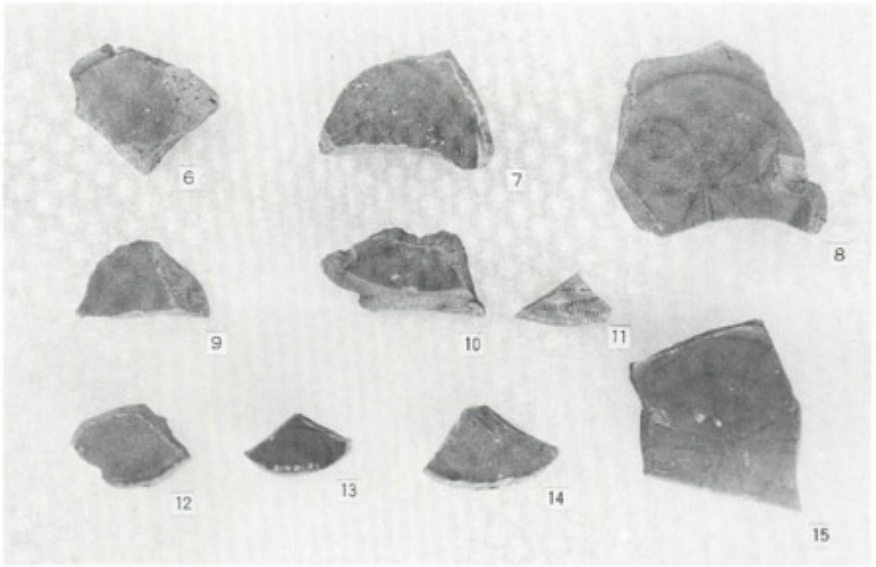
9


1
2
3
4
5
6


7
8
9
10
11
12


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19


1
2
3
4
5


6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

1

2

3

4

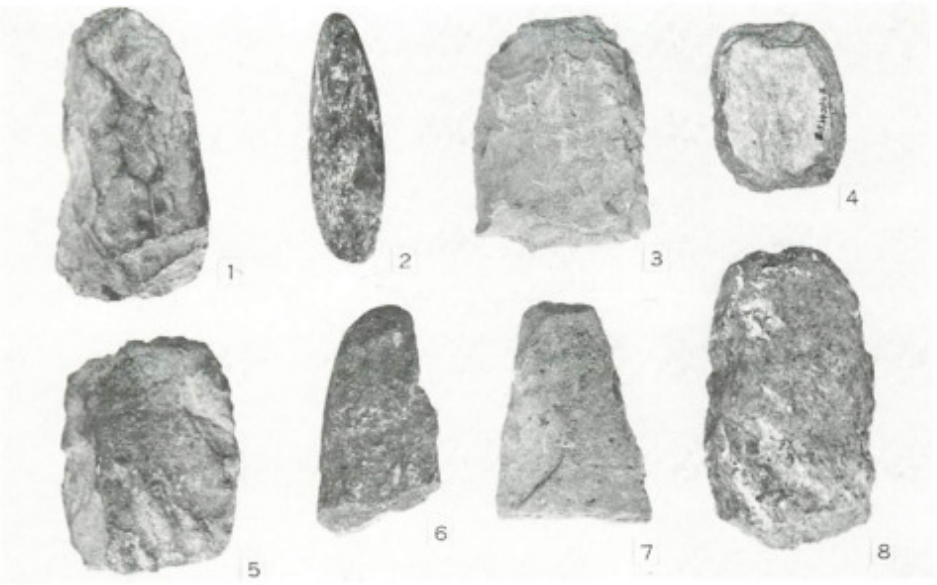
5

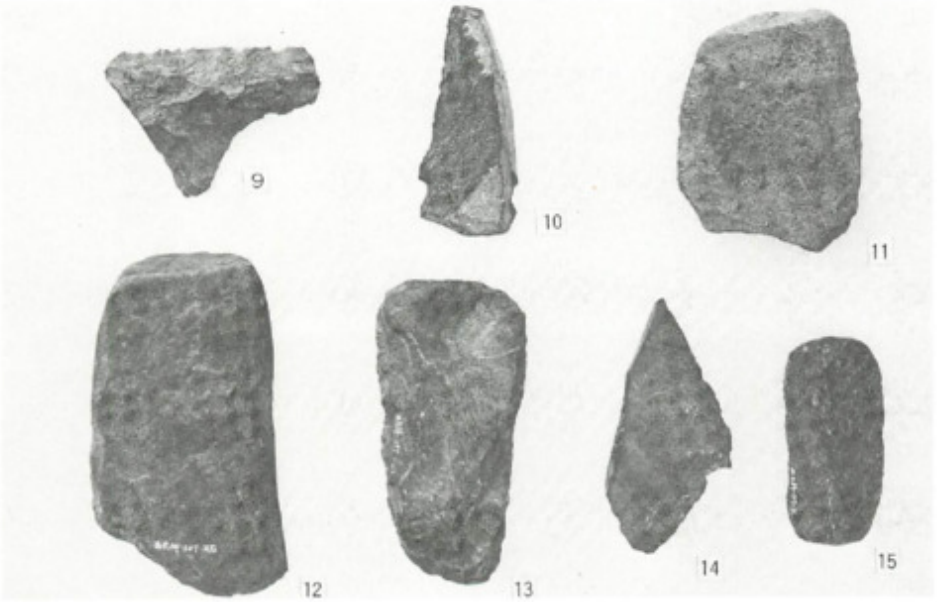
6

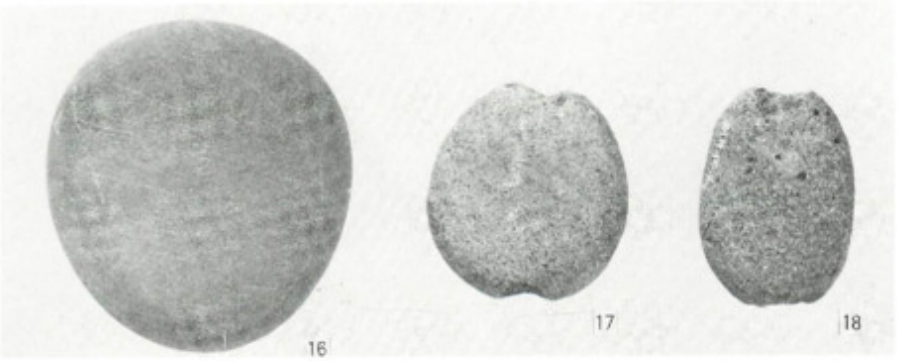
7

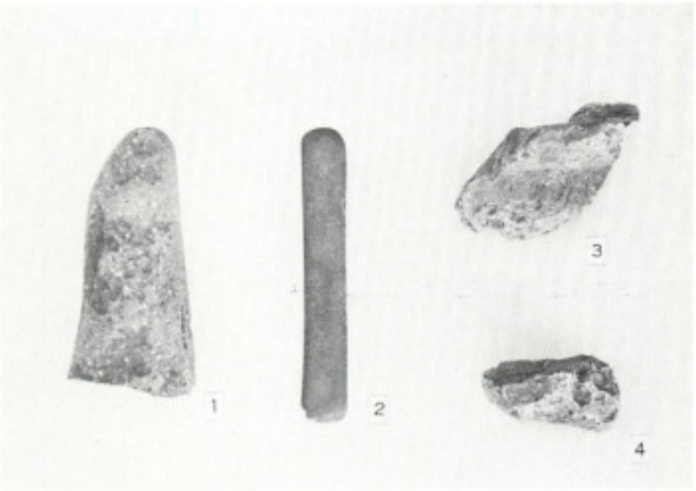
8

9


1
2
3
4
5
6
7
8


9
10
11
12
13
14
15

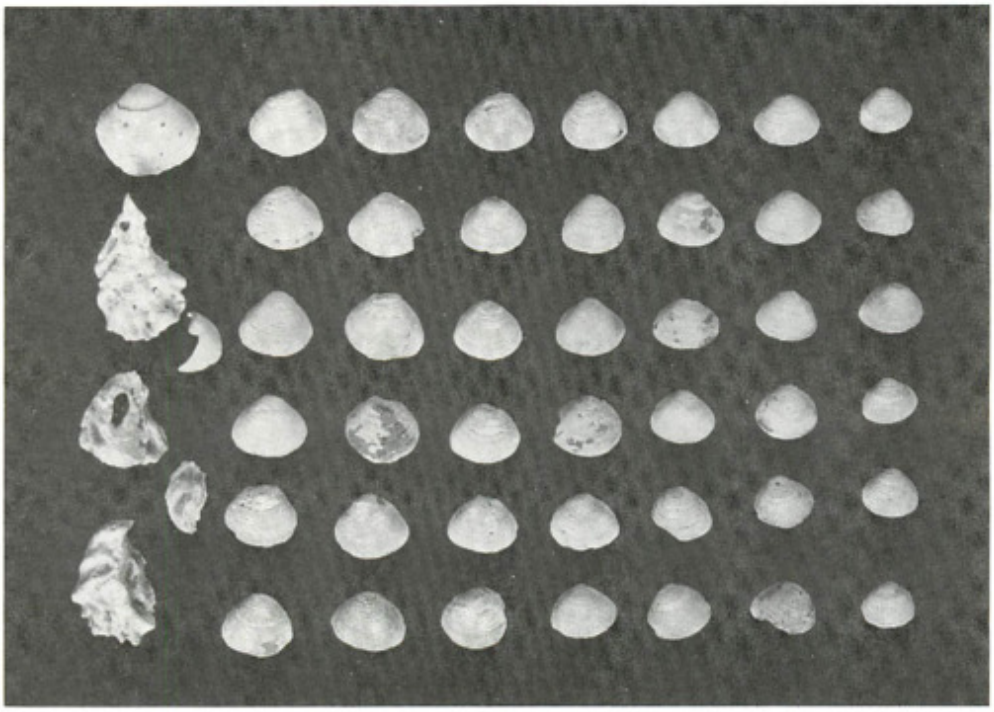

16
17
18


1
2
3
4

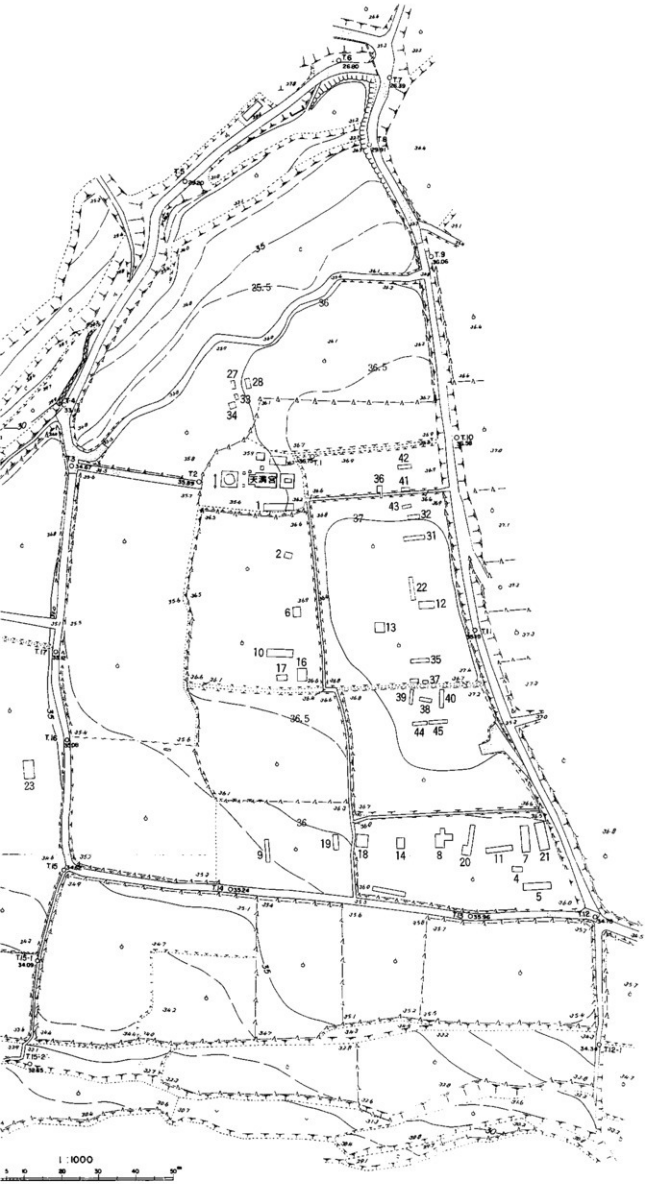
5

6

7
8
9



T4-1
T4-2
T4-3
T4-4
T4-5
29
30
24


1:1000

益城郡衙

熊本県文化財調査報告－32集－

昭和53年3月31日

発行　熊本県教育委員会

熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー

熊本市御領町730　☎80-8131

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 32 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：益城郡衙
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日